

青森県埋蔵文化財調査報告書 第136集

雷遺跡・西山遺跡

平成 2 年度

青森県教育委員会

いかづち にし やま
雷遺跡・西山遺跡

—福地村天魔平地区農道整備事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成2年度

青森県教育委員会



(「鹿」狩獵文土器部分)

序

馬淵川の流域には、多くの埋蔵文化財包藏地が分布しております。

この報告書は、天魔平地区農免農道整備事業に係る福地村雷遺跡及び西山遺跡を発掘調査した結果をまとめたものであります。

今回の調査によって、縄文時代と弥生時代の竪穴住居跡などの様子が明らかになりました。

この成果が、今後、文化財の保護と活用に多少なりとも資するところがあれば幸いに存じます。

ここに、調査の実施から報告書の刊行まで種々御指導、御協力いただいた調査指導員をはじめ、関係各位に対して深くお礼申し上げます。

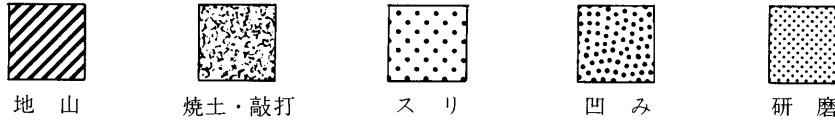
平成3年3月

青森県教育委員会

教育長 山 崎 五 郎

例　　言

1. 本書は平成元年度に発掘調査を実施した青森県三戸郡福地村に所在する「雷遺跡」・「西山遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は福地村の天魔平地区農道整備事業予定地内に、周知されている遺跡が所在するため、その建設工事に先立って実施したものである。
3. 発掘調査を実施した「雷遺跡」・「西山遺跡」は青森県教育委員会が昭和53年度に刊行した『青森県遺跡地名表』に、それぞれ遺跡番号64013番、64014番として登録されている周知の遺跡である。
4. 本書の執筆者氏名は、依頼原稿については文頭に、ほかについては文末に記した。
5. 本書に掲載してある図版の縮尺は、できるだけ統一を図り、各図版ごとに表示している。写真図版については縮尺の統一は図っていない。
6. 本文中及び表において使用した略称・スクリーントーン等の表示は次のとおりである。
住・住居跡・H→豎穴住居跡　　土→土壤　　焼→焼土
また、遺構番号は、第〇号の第と号を省略する場合もある。
スクリーントーンの表示は、次のとおりである。



地　山

焼土・敲打

ス　リ

凹　み

研　磨

7. 遺構の規模に関する計測値は各遺構の妥当と考えられる部位を計るようにし、また、豎穴住居跡の面積は、プラニメーターを使用して算出した。遺構の計測値の単位は、「cm」とした。
8. 色調に関する表記は、農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』5版 1976に基づいている。
9. 試料の鑑定及び分析は、次の方々に依頼した。

¹⁴ C炭素年代測定	村中 健	八戸工業大学助教授
火山灰蛍光X線分析	三辻 利一	奈良教育大学教授
植物遺体の分析	吉崎 昌一	北海道大学教授
	椿坂 恭代	北海道大学埋蔵文化財調査室調査員
石質鑑定	松山 力	県立八戸高等学校教諭
	山口 義伸	県立板柳高等学校教諭

10. 調査並びに報告書作成にあたり、次の機関・諸氏にご指導をいただいた。

(敬称略・順不同)

葛西 勉・藤沼 邦彦・本間 宏・小林 克・千田 和文・田村 俊之・高橋 潤・
杉山 武・久保 泰・長尾 正義・工藤 竹久・藤田 亮一・熊谷 常正

目 次

序

例 言

目 次

第I章 調査に至る経過と調査要項	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査要項	1
第3節 調査方法	2
第II章 遺跡及び周辺の環境	5
第1節 遺跡及び周辺の地形と地質	5
第2節 周辺の遺跡	11
第III章 雷 遺 跡	17
第1節 検出遺構	17
1 溝状ピット	17
第2節 出土遺構	20
1 土 器	20
2 石 器	25
3 その他の遺物	31
第3節 小結	34
写真図版	35
第IV章 西山遺跡	41
第1節 検出遺構	41
1 壺穴住居跡	41
2 土 壤	62
3 溝状ピット	66
4 焼 土	73
第2節 出土遺物	79
1 土 器	79
2 石 器	97
3 その他の遺物	103

第3節 自然化学的分析	109
1 放射性炭素年代測定結果について	109
2 西山遺跡出土火山灰の蛍光X線分析	110
3 西山遺跡から検出された微細植物遺体について	112
第4節 小結	114
写真図版	116
まとめ	129

第Ⅰ章 調査に至る経過と調査要項

第1節 調査に至る経過

昭和59年（1984）、県農林部では、三戸郡福地村天魔平地区の農道を整備する計画をたてていた。

事業の進捗に伴い、計画路線内に埋蔵文化財包藏地がある恐れが出てきたので、昭和61年5月17日、土地改良第二課から主管課あてに照会がなされた。これを受けた文化課では、同年5月19日及び10月11日に現地調査を行った。その結果、事業予定路線は、館野・雷・西山の3遺跡と抵触することが判明し、10月17日、その旨を回答するとともに埋蔵文化財の保護のため、事業予定路線の変更を要望した。その後、路線変更について協議を重ねたが、農道の整備という事業の性格上、路線の変更は難しいとの結論に至り、工事着工前に記録保存のための発掘調査を実施することになった。

調査は、事業の進捗状況に即応して、館野遺跡については昭和62年度、また、雷遺跡と西山遺跡については平成元年度に実施することになった。

なお、昭和62年7月1日から同年10月31日まで調査した館野遺跡からは、縄文時代後期、十腰内I式期の竪穴住居跡1軒、そのほか土壙59基、屋外炉5基、溝状ピット2基、焼土11基を検出したほか、円筒土器を主体とした遺物がダンボール箱で160箱出土した。

（北林 八洲晴）

第2節 調査要項

調査目的	天魔平地区農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業の実施に先立ち、当該地区に所在する雷遺跡・西山遺跡の発掘調査を行い、その記録保存をはかり、地域社会の文化財活用に資する。
調査期間	平成元年7月3日から同年10月20日まで
遺跡名	(1) 雷遺跡 青森県三戸郡福地村大字苦米地字雷6他
及び所在地	(2) 西山遺跡 青森県三戸郡福地村大字苦米地字西山10-46他
調査面積	(1) 雷遺跡 1,400平方メートル (2) 西山遺跡 1,500平方メートル
調査委託者	青森県農林部
調査受託者	青森県教育委員会
調査担当機関	青森県埋蔵文化財調査センター
調査協力機関	福地村教育委員会 三戸土地改良事務所 三八教育事務所
調査参加者	

調査指導員　　村越　潔　　弘前大学教授
調査協力員　　西山　勝治　　福地村教育委員会教育長
　　　　　　穂積　利昌　　同　　上
調査員　　松山　力　　青森県立八戸高等学校教諭
　　　　　　春日　信興　　三戸地方教育研究所指導主事
　　　　　　　　　　　(現　八戸市立北稜中学校教頭)
調査担当者　　青森県埋蔵文化財調査センター
調査第二課長　　北林　八洲晴
主幹　　遠藤　正夫 (現　青森市教育委員会社会教育課
　　　　　　　　　　　主幹兼埋蔵文化財係長)
主査　　白鳥　文雄
調査補助員　　秋元宏之、　　田沢淳逸、　　石文貢子、　　福士敦子
　　　　　　　　　　　(白鳥　文雄)

第3節 調査方法

調査区の設定

雷・西山両遺跡の中間に沢があることから、同一軸線による調査区の設定は困難であった。このため、両遺跡はそれぞれ単独に軸線を設定し、グリッドを設定した。

(雷遺跡)　道路建設用中心杭の No.365とNo.366を通る線を基準軸線とし、これを延長してグリッドを設定した。1グリッドは $4\text{ m} \times 4\text{ m}$ とした。グリッドの呼称は、南から北方向にアルファベットの大文字を、東から西方向に算用数字を付して、その組み合わせで示した。中心杭No.365はK-30である。グリッドの東西軸線はN-68° - Eである。

(西山遺跡)　道路建設用中心杭の No.379とNo.380を通る線を基準軸線とし、これを延長してグリッドを設定した。1グリッドは $4\text{ m} \times 4\text{ m}$ とした。グリッドの呼称は、南から北方向にアルファベットの大文字を、東から西方向に算用数字を付して、その組み合わせで示した。中心杭No.379はG-20である。グリッドの東西軸線はN-90° - Sである。

発掘方法

両遺跡の調査は、基本的には同一の発掘方法によった。

(粗掘り)　軸線(Gライン)及び5の倍数にあたるグリッドごとに土層観察用の「あぜ」を残して、各層ごとに掘り下げた。

標準土層(基本層序)にはローマ数字を付して呼称した。

(遺構の調査方法)　遺構は各種類ごとに、確認順に番号を付した。調査中に遺構と断定できないものについては欠番としたが、一部新たに確認した遺構に振り替えたものもある。

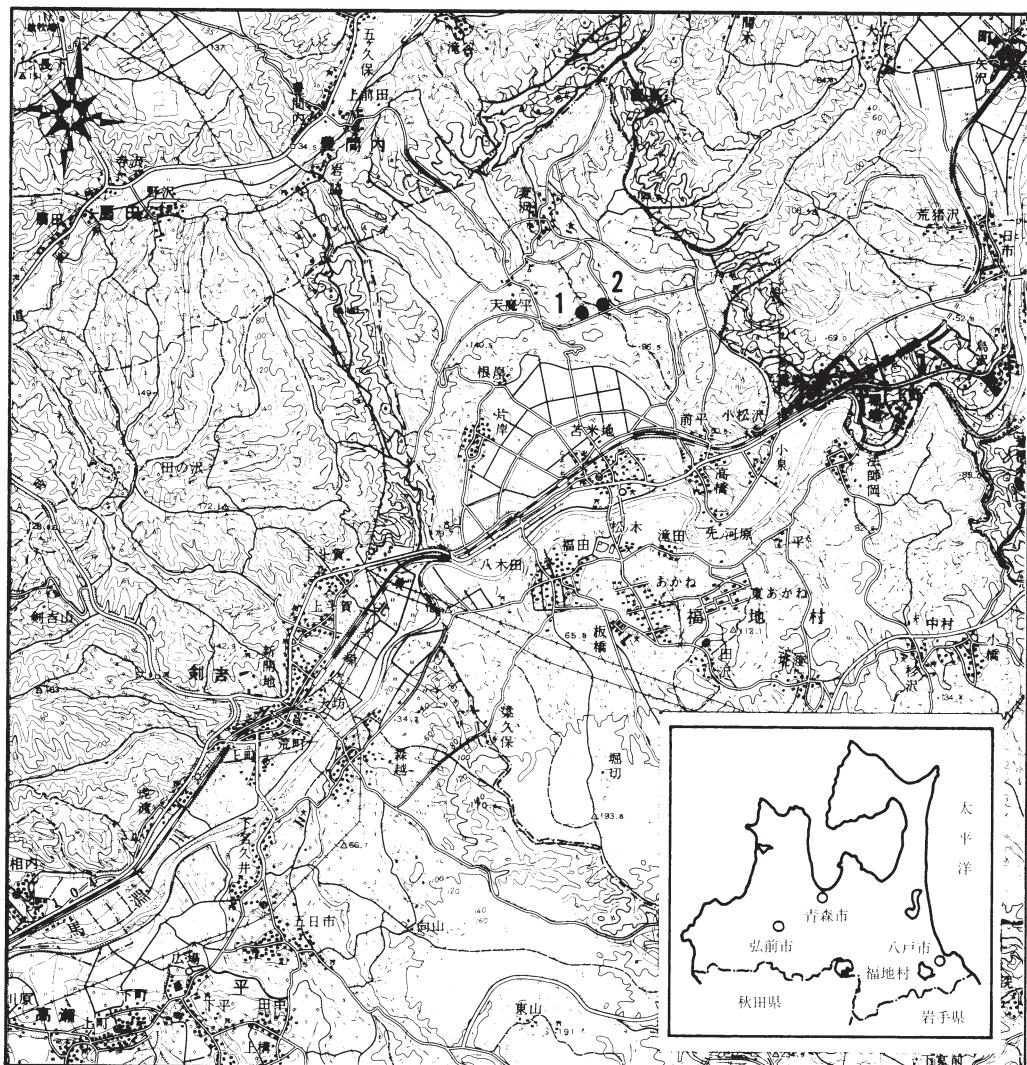
遺構覆土の堆積状況を観察するためにセクションベルトを残し、規模の大小により四分法・二分法・その他を用いた。遺構内の堆積土は算用数字を付して呼称した。

遺構の実測の縮尺は、20分の1を基本としたが、規模の大小によって10分の1・その他とした。実測にあたっては、グリッド軸線を基にして、水糸による簡易遣り方実測を行った。

記録保存のために、適宜写真撮影を行った。フィルムは、モノクロとカラーリバーサルの2種類を用いた。

(遺物の取り上げ方法) 遺構ごと及び層位ごとに取り上げることを原則とした。また、遺物の出土地点を記録し、層位・標高を台帳に記入した。遺構内出土遺物は遺構単位に、遺構外出土遺物はグリッド単位に、通し番号を記入し、出土層位・標高を記録した。

また、取り上げに際しては、色分けしたカード（土器－白・石器－青・その他－赤）を使用し、遺物番号・出土地点・層位・取り上げ期日等を明記した。 (白鳥 文雄)



1 雷遺跡 2 西山遺跡

第1図 遺跡の位置

0 1 2 km

第II章 遺跡及び周辺の環境

第1節 遺跡及び周辺の地形と地質

青森県立八戸高等学校教諭 松 山 力

1. 周辺の地形

青森県南東部の馬淵川以北の地域には、八甲田山系から八幡平へと伸びる脊梁山脈の東麓から八戸湾以北の太平洋岸へ向けて、ゆるやかに高度を低める丘陵・段丘群（洪積台地）が広がる。この丘陵・段丘群は、太平洋に注ぐ相坂川（奥入瀬川）・五所川と馬淵川支流の浅水川・猿辺川・熊原川などの諸河川によって数kmごとに切斷され、これらの諸河川に沿って狭長な沖積地が分布している。また、相坂川・五戸川・馬淵川の河口周辺には、やや広い海岸平野（沖積地）が開ける。

西山遺跡は、そのうちの浅水川と馬淵川との間を4～5km幅で東北にのびて、馬淵川最下流部の八戸湾奥に開ける沖積地（長苗代低地帯）に突き出す丘陵・段丘群の東端から、南西方へ約5kmの丘陵南半部に位置を占める。福地村北端の麦沢の集落中心部からは、南東方ほぼ1kmにあたる。また、雷遺跡は西山遺跡から西方へ、麦沢から南東に下る小谷をへだてて、両遺跡の中心部間の距離で300～400m離れたところに立地している。

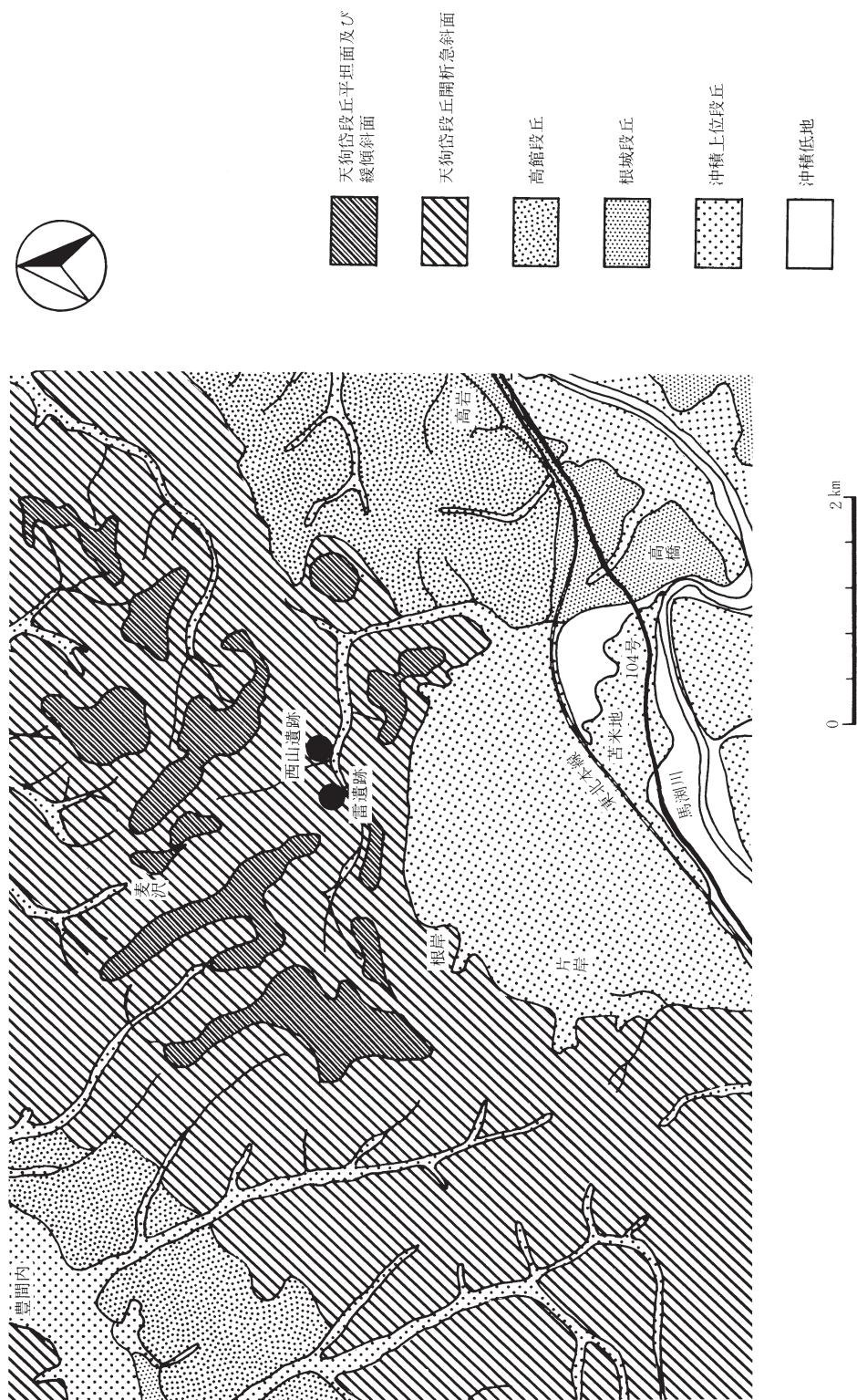
西山遺跡の南南方約2.5kmを通り東北東方へ流れる馬淵川の北岸は、東北本線苦米地駅付近を中心にはほぼ1kmの半径で北側に広がる半円形の平坦な沖積上位段丘で、その周囲を両遺跡を含む丘陵（天狗岱段丘）の段丘崖にあたる急斜面が囲んでいる。

この遺跡周辺の丘陵は2段に分かれ、段丘面高度はそれぞれ90～110m、140～150mで、全体として北西方にゆるく傾き、開析が進んでいるために原面のほとんどが失われて平坦面に乏しいが、西山遺跡西方1km弱の天魔平の集落と北西方ほぼ1kmの麦沢との間から北西方向へと、麦沢のすぐ東から南東方への地域には、平坦面がほぼそのまま、あるいはそれに近くゆるやかに起状する程度の地形面が比較的よく残されている。天魔平の集落のすぐ西にも、ほぼ南北にのびる同様の地形面がある。

そのうち、麦沢の東から南東へかけての丘陵面は高度140m、幅200～300mで、西山遺跡はこの西側斜面下の、麦沢から下る小谷に沿う数mの高さの狭長な小丘陵上に立地している。また、天魔平と麦沢との間の平坦面は高度130～140mで、その南東端から南東へ下る急斜面の裾の、天魔平から東に下る谷の谷壁に接する緩斜面部に立地している。

麦沢から下る小谷は、西山遺跡から200～300m南方に下ったところで、雷遺跡の南縁を通る小谷と合流して、丘陵を削りながら東へ向かい、合流点から700～800mほどではほぼ直角に向き

第2図 遺跡周辺地質概要図



を変えて南下し、800mほどのところで、苦米地駅付近を中心に広がる沖積上位段丘の北東部に出る。この谷の天魔平付近から東方への流路と沖積上位段丘の北縁との間は、高度90～110m（沖積上位段丘との比高は75～95m）程度の幅（最狭部は200m）の狭い東西方向の丘陵地（下位天狗岱段丘）となっている。雷遺跡の南縁を通る小谷は、西方ほぼ1kmの天魔平集落の南西数百mに主な谷頭をもち、ゆるくS字型に屈曲しながら東へ下る谷である。

2. 周辺の地質概要

遺跡周辺の基盤は、砂岩・泥岩主体の斗川層群と呼ばれる新第三紀鮮新世の地層である。丘陵・段丘群はところによってその上に砂礫層などの段丘堆積物がのり、基盤の地層や段丘堆積物は新旧の火山灰層群に覆われて、最上部の腐食土層に遷移する。

この地域の火山灰層は、下位から、洪積世の天狗岱火山灰層、高館火山灰層、八戸火山灰層と、洪積世末葉～沖積世初頭とみられる二ノ倉火山灰層相当層、および沖積世に降下し黒色土層群に挟まれる幾枚かの火山灰層とに分けられる。

天狗岱火山灰層と高館火山灰層とは主に粘土質の褐色火山灰層（ローム）で、幾枚もの粘土化した浮石層を挟む。八戸火山灰層は、約13,000～12,000年前に十和田火山の活動により降下した火山碎屑物で、下からI層～VII層（後述の遺跡の土層区分の記号と同じで紛らわしいが、まったく別であることに注意）の7枚に区分され、I・III・V層は主に粘土質あるいは砂質の火山灰層、II・IV・VI層は主に砂粒程度から径数cmまでの堅い浮石とのが密集したくずれやすい浮石層で、II・III層は数cm、その他は20～40cmの厚さとなっている。VII層は粘性に乏しい褐色火山灰層で上部は腐食土に遷移するが、一部に10,000年前頃に降下した二ノ倉火山灰層に連続すると考えられる黄橙色火山灰層が上位にある。

遺跡付近の腐食土（黒色土類）中には、南方の名川町剣吉以南で明瞭に成層する南部浮石層の浮石と同時降下とみられる浮石（南部浮石）が部分的に密集する土層や、中摺浮石層が分布する。このうち、南部浮石は8600年前の降下とされ、粒径数cm以内の浮石である。遺跡付近で厚さ20cm程度の中摺浮石層は、5000年前後に降下した砂粒大の浮石（火山灰）の密集層で、膠結がすんでいないので、もろくくずれやすい。

このほか、約2000年前の降下とされる十和田b降下火山灰層の浮石部の浮石が黒色腐食土層の中に密集あるいは散在する部分がある。この浮石は、奈良教育大学の三辻氏の蛍光X線分析によれば、十和田b降下火山灰層の火山灰とは異なるので、可能性として中摺浮石か南部浮石のいずれかのことであるが、層位と上下の土層との関係および層相からみて、十和田b降下火山灰層の浮石部の浮石であることは確実である。おそらく分析の試料が火山灰部の火山灰で、浮石部のものではないための不一致であろう。

3. 遺跡の層序

(1) 西山遺跡

西山遺跡では二ノ倉火山灰層の部分までが発掘され、地表から下へおおまかに I ~ VIII 層までの 8 つに区分した。記述中の各土層の厚さは一般的な厚さである。

I 層は地表直下の厚さ 15~25cm 程度の黒褐色耕作土層で、粒径 0.3~1.0cm の堅い灰色浮石の散らばる砂質土となっているところが多い。

II 層は 5~20cm の厚さの黒色~黒褐色土層で、微細粒白色鉱物粒や中~細粒砂大の黄褐色浮石粒が多く含まれ、全体的に粘土質で、乾燥すれば黒灰色となる。十和田 b 降下火山灰層降下時の白色で堅い粒径数mm~2cm の浮石が随所に散在あるいは密集する。

III 層は厚さが 10~20cm 、やや砂質の黒褐色土層である。下部ほど密に、中振浮石層に由来する砂粒大の黄橙色浮石が混じり、また粒径 0.3~0.5cm の橙色浮石が散らばる。

IV 層は厚さが 10~30cm 、砂質の暗褐色土層である。下方ほど濃密に中振浮石相当の砂粒大の黄橙色~明黄橙色浮粒石粒が混合し、粒径 0.3~1.5cm の黄橙色浮石が、上方でまばらに下方でやや多めに散在する。この層のところどころには、径数cm程度のまじりのない中振浮石の密集塊が含まれる。

V 層は厚さが 30~60cm で、色調が上から下へ、黒褐色からにぶい黄褐色へと漸移する粘土質土層で、上から V a 層 (5~20cm) · V b 層 (10~30cm) · V c 層 (10~20cm) の 3 層に区分できる。V a 層は相対的には粘土化の遅れたやや砂質の黒褐色土で、上方ほど密に中振浮石に由来する砂粒大の砂粒を含み、また全体的に粒径 0.3~1.5cm の黄橙色浮石とにぶい黄褐色浮石とが散らばる。V b 層は暗褐色~にぶい黄褐色の上半部が特に粘性に富む粘土質土層で、下方ほど密に、南部浮石に由来する粒径 0.3~2.0cm の明黄褐色~黄橙褐色浮石を包含する。V c 層はよくしまったにぶい黄褐色の粘土質土層で、ところにより密に、ところによりまばらに、粒径 0.3~1.5cm の浮石が散在する。

VI 層は厚さが 50~70cm で、上位の腐食土層群と下位の八戸火山灰層との漸移層に相当する。色調は上から下へ、黄褐色~明黄褐色~やや橙色がかった明黄褐色へと漸移するが、全般的に砂粒大の浮石粒を多く含むよくしまったローム質土層で、上限付近数cm に黑色土類の混合が目立ち、また上半には粒径 0.3~1.5cm の灰白色および黄橙色の浮石が散らばる。これらの浮石は、特に上限から 15cm 程度のところまでに多く含まれている。

VII 層は厚さが 10~30cm の黄橙色粘土質火山灰層で、十和田湖東方地域の、約 10000 年前頃に降下した二ノ倉火山灰層に連続する可能性が大きい。この層には砂粒大のスコリア粒や浮石粒が多量に含まれるほか、粒径 0.2~0.4cm のにぶい黄橙色浮石が散らばる。

VIII 層は厚さ 30cm 以上の浮石粒の集まった粗粒砂層で、粒径 0.2~0.5cm の灰白色浮石が多量に

混じり、よくしまっている。産状からみて段丘を構成する水成堆積物の可能性が大きく、そうであるとすれば、遺跡をのせる段丘は洪積世末葉から沖積世初頭頃に形成された段丘であるとみてよい。

(2) 雷遺跡

I層は厚さ15~60cm、やや粘土質の砂質黒褐色土層で、十和田b降下火山灰層由来の堅い灰白色浮石（粒径0.3~1cm）を含むところがある。

II層は厚さ10~50cm、やや粘土質の黒褐色でI層と同様の粒径0.3~1cmの堅い灰白色が散在し、また微細な白色鉱物が多量に含まれる。乾燥すれば灰黒色を呈する。厚いところでは上部のIIa層と、下部のIIb層とに分ける。そのうち、IIb層は黒褐色でやや砂質、微細粒白色鉱物のはかに、砂粒大の黄橙色浮石が下方ほど密に含まれる。

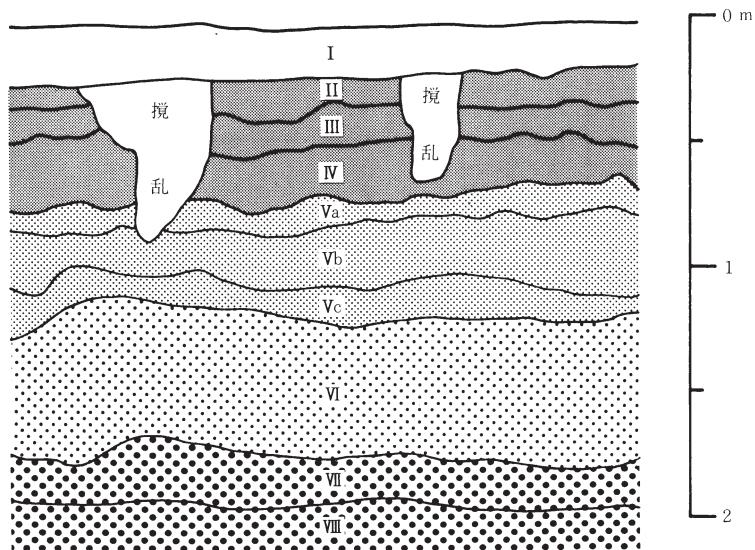
III層は厚さ10~20cm、下方ほど密に中振浮石に由来する砂粒大の浮石粒を含んで砂質となる黒褐色の土層である。

IV層は厚さ10~25cm、中振浮石由来の砂粒大浮石粒が密に混合したにぶい黄褐色土層で、ところどころに径数cmの中振浮石のみが密集した淡黄橙色浮石塊が含まれる。そのほか粒径0.3~1cmの黄橙色あるいは灰黄色浮石が散在する。

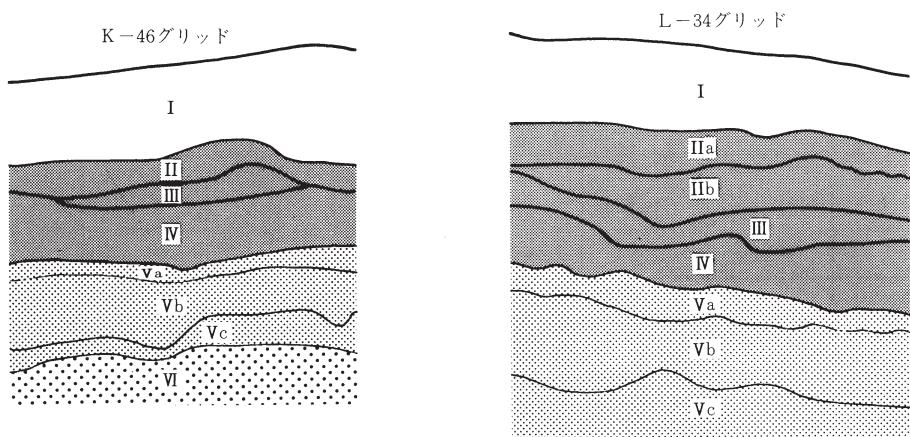
V層は厚さ45~60cm、特徴の異なる3つに土層を区分できるところが多いので、上から下へVa・Vb・Vc層とする。Va層は厚さが3~8cmの薄い砂質黒褐色土層で、砂粒大の浮石流を多く含むほか、粒径0.3~1.5cmの灰黄色あるいは黄橙色の浮石が散在する。Vb層は、色調が、上から下へ、黒色から黒褐色へと漸移するしまった粘土質土層で、粒径0.3~2cmの明黄褐色の浮石が下方ほど密に混合している。この浮石は南部浮石に由來したものであろう。Vc層は、色調が、上から下へ、黒褐色から暗褐色へと漸移するローム質の粘土質土層で、特に上半にVb層に混合する浮石と同様の浮石が多い。

VI層は浮石砂が密集するにぶい黄褐色の砂質火山灰層で、中に粒径0.3~1cmの灰白色あるいは明黄褐色の浮石が散在する。この層は、おそらく斜面から運ばれて、二次的に堆積した段丘堆積物であろう。八戸火山灰を欠いてこのような堆積物が存在することから、雷遺跡ののる地形面も、西山遺跡ののる小段丘と同様に、沖積世初頭に形成されたものだろう。

西山遺跡



雷遺跡 (縮尺同)



第3図 基本層序

第2節 周辺の遺跡

八戸市立北稜中学校教頭 春日信興

青森県南地方は、奥羽脊梁山脈に水源を有する何本かの河川がほぼ東北東に流れて、狭い河谷を形成し太平洋に流出する。更にそれらの河川に合流する大小の支谷があって起伏の著しい複雑な山地形になっている。

青森県福地村には、岩手県北の山地を水源とする馬淵川が、村の北側（苦米地地区）を流れ、中流地域としては比較的広い谷水田地帯を形成している。馬淵川の北側に形成される東・南斜面は急崖となる場合が多く、南側の北・西斜面は緩斜面となることが多いが、当福地村はその典型的例にあたる。したがって当地方における縄文時代の遺跡分布の傾向は、馬淵川の北丘陵には少なく、東・南の緩やかな丘陵上に発達した小支谷を背景に営まれることが多い。それは、遺跡の規模についても同様で、比較的大きな遺跡は馬淵川の東・南側に多い。

青森県教育委員会が発行（昭和53年）した「青森県遺跡地名表」及びその後の調査例によれば、現在福地村管内には27の遺跡が確認されている。うち9は馬淵川本流沿いに、他は山間部の小支谷に沿って存在している。時期的に確認できるところでは、縄文時代草創記及び早期の遺跡は見当たらず、同前期は西久根遺跡、下木戸場遺跡の2遺跡、同中期も西久根遺跡、昼巻沢遺跡の2遺跡のみと縄文時代の前半の確認が少ない。これは調査例が少なく未確認が多いということも考えられる。一方、縄文時代後期及び晩期の遺跡は27遺跡中20を数え、数としては際立って多くなる。この傾向は、青森県南の山間部の遺跡分布に共通する傾向で、かつ規模としても小さくなる。

従来から知られていた福地村における比較的大きな遺跡について概観してみたい。まず、戦前から知られていた遺跡に堀渡（ごみわたり）遺跡がある。水田造成に伴う工事で確認されたと言われており、大量の縄文時代後・晩期の遺物を採集したとされるが、現在は散逸してしまっている。工事や耕作で採集した古老の話や採集できる土器片では後期・晩期の初頭が多いようである。また、同村杉沢の天獅子遺跡も縄文時代後期の遺跡としてよく知られ、遺物も多く採集されたと言うが、まとまって保存はされていない。

これらの遺跡が立地する沢筋の下流に館遺跡がある。中世の館跡とも言われており、現在は平坦な耕作地となっているが、遺跡が営まれた頃は、東西を低い谷が区切り、馬淵川に向かって北西に緩やかに傾斜する舌状台地であったと思われる。この遺跡は、昭和54年の東北新幹線建設予定路線内の遺跡分布調査で確認された遺跡で、既に盗掘の形跡が顕著であった。畠頭に寄せられた炉石と思われる酸化した河原石に混じって、主として縄文時代後期初頭の土器片が大量に確認された。村内に営まれた遺跡では、規模の大きいものの一つであったと思われる。

本格的に発掘調査された例として、昭和56年調査の畠卷沢遺跡がある。これは、東北縦貫自動車道建設用地内を青森県教育委員会が調査したもので、馬淵川に注ぐ小支谷の沢頭に相当する南西斜面である。ここからは、土壙2、フラスコ状ピット1、溝状ピット8、周溝遺構2の各遺構と早期末葉から後期前半の土器片及び石器が出土した。量としては円筒土器片が多かった。なお、これらのうち周溝遺構は、後に八戸市の丹後平遺跡（八戸市教育委員会1989年）などで確認された古墳によく似た形態を有するものであった。

また、本遺跡調査の前年に青森県教育委員会が発掘調査した館野遺跡（青森県教育委員会1989年）では、多くの遺構のほか円筒土器が大量に出土した。詳細は報告書に譲りたいが、ここにもかなり以前から知られた大規模な遺跡で、盗掘された形跡もあった。

馬淵川に沿って近隣の遺跡まで視点を広げてみたい。昭和29・30年に江坂輝弥氏が発掘調査した平貝塚は、本遺跡の上流にあたるが、装身具類や合せ口甕棺が出土し、昭和36年の音喜多富寿氏等の調査では人骨一体が出土し、昭和52年の名川町教育委員会による隣接の虚空蔵遺跡の調査では縄文時代晚期後半の土器が多量に出土して、青森県南の縄文時代晚期後半の土器編年に好資料を提供した。

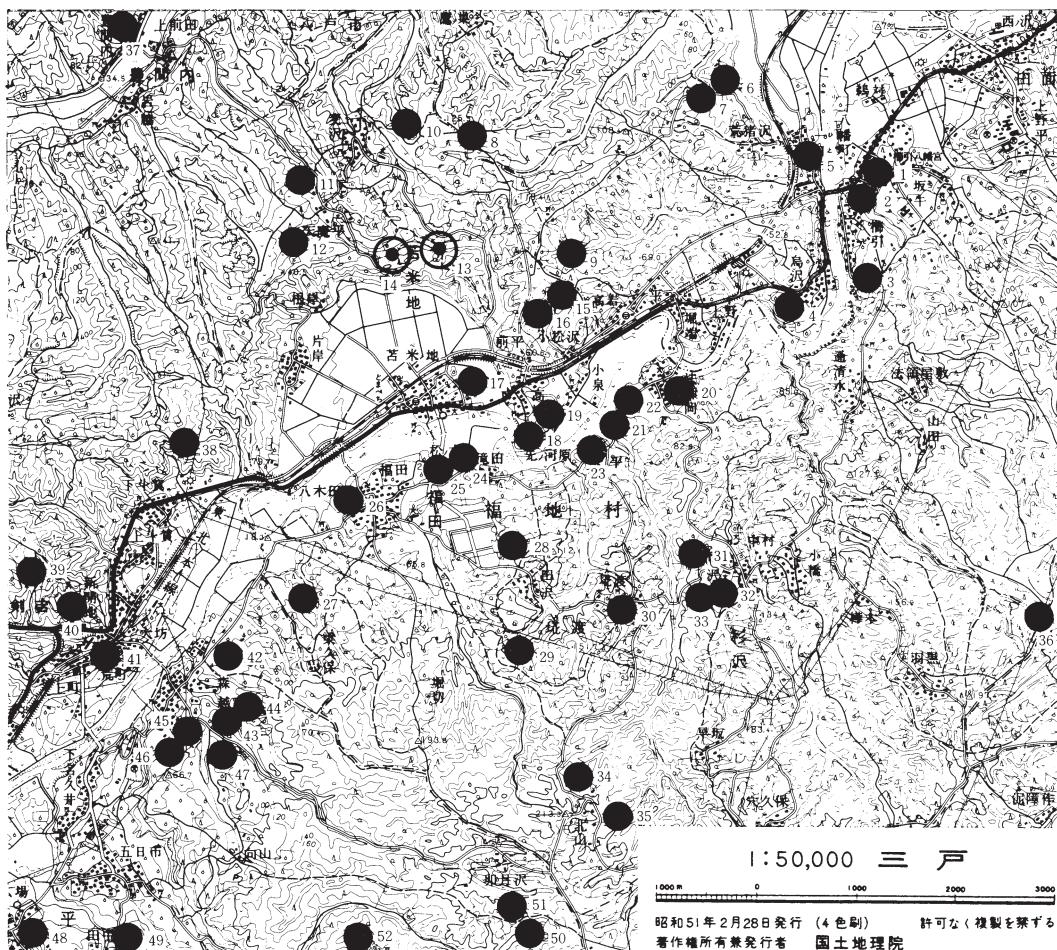
やはり上流に位置する剣吉荒町遺跡は、昭和31年以降数回にわたって調査が進められ、縄文時代晚期の大洞A式・A'式及び弥生時代前期の遠賀川系土器が出土し、青森県の弥生時代の研究に貴重な資料を提供している。

さらに上流の泉山遺跡は、昭和50年に青森県教育委員会が発掘調査し、深さ2mに及ぶ大型のフラスコ状ピットから多量の獸骨や堅果類が出土した。その他多数の土壙墓とストーンサークルが検出されて注目された。土器では、特に縄文時代中期末から後期初頭にかけての好資料が出土し、円筒土器から大木系土器への接点を探る資料として注目されている。

八戸市八幡貝塚遺跡は、早くから縄文時代晚期の遺跡として知られていたが、昭和62年橋梁架け替え工事による発掘調査が八戸市教育委員会によって行われ、晚期前半の好資料を出土している。

さて、本遺跡は馬淵川と浅水川に挟まれた標高120m～130mの丘陵上に位置している。現在のところ、福地村の遺跡分布状況の中では希薄な地域に相当するが、ごく近い範囲で分布状況をみると、縄文時代後期では北向遺跡、西山遺跡、雷遺跡、館野遺跡があり、これは同水系の中にある。一方、北側には、直渡遺跡、下木戸場遺跡の円筒土器を出土する遺跡がある。この二つは、浅水川に向かう小支谷の沢頭に相当する位置にある。相互に関連を有する遺跡と思われる。これら6遺跡は、山間部の狭隘な谷間に立地する点において共通しており、馬淵川本流沿いに立地する遺跡とは文化の性格を若干異にするものかもしれない。

以上、本遺跡の立地する福地村を中心に、周辺の遺跡について述べてみた。馬淵川沿いは縄文文化の中心と言われながらも、本格的な調査が少なく、そのせいかくを明らかに出来ない。これは福地村にとっても同じで、今後の調査によって一層明確にされていくものであろう。



第4図 周辺の遺跡

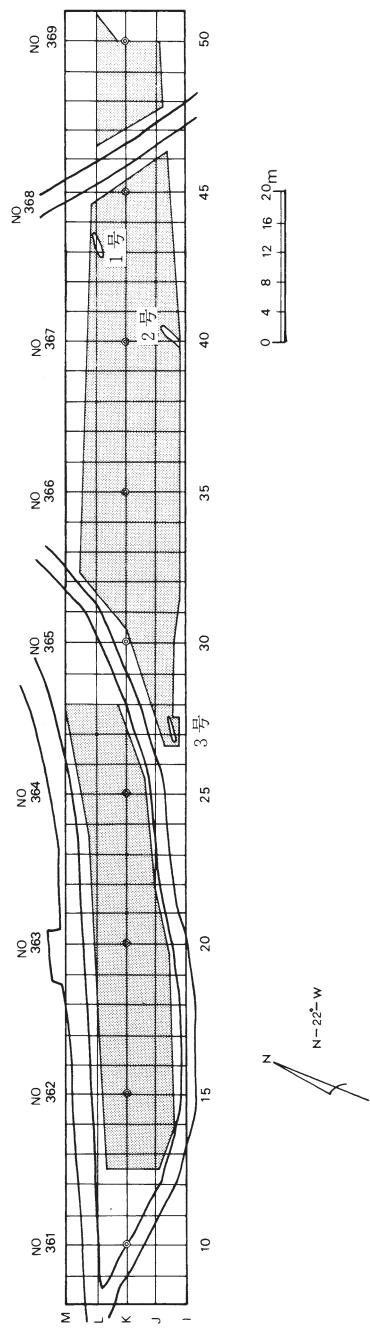
第1表 周辺の遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	所 在 地	立 地	種 別	時 代	備 考
1	千石屋敷遺跡	八戸市八幡字千石屋敷	台 地	包含地	縄文（晚期）	
2	八幡貝塚遺跡	八戸市八幡字館ノ下	台 地	貝 塚	縄文（晚期）	
3	櫛引遺跡	八戸市櫛引字岡前館神下矢倉		城 跡		
4	登場遺跡	八戸市上野字登場	台 地	包含地	縄文（前～晚期）	
5	一日市遺跡	八戸市櫛引字一日市	台 地	散布地	歴史（平安、中世）	
6	荒猪の沢遺跡	八戸市櫛引字荒猪の沢	台 地	散布地	歴史	
7	岩の沢平遺跡	八戸市櫛引字岩の沢平19	台 地	包含地	歴史	
8	直渡遺跡	八戸市櫛引字直渡	台 地	包含地	縄文（前、中期）	
9	白樺遺跡	八戸市櫛引字白樺	丘 陵	散布地	縄文（晚期）	

遺跡番号	遺跡名	所在地	立地	種別	時代	備考
10	下木戸場遺跡	福地村麦沢字下木戸場9-93	台地	包含地	縄文(前期)	
11	北向遺跡	福地村麦沢字北向4	台地	包含地	縄文(後期)	
12	館野遺跡	福地村苦米地字館野	丘陵	包含地	縄文(後期)	青埋文報第119集
13	西山遺跡	福地村苦米地字西山1-2	台地	包含地	縄文(後期)	
14	雷遺跡	福地村苦米地字雷1	台地	包含地	縄文(後期)	
15	小松沢下平遺跡	福地村小泉字小松沢下平26	丘陵	散布地	縄文(晚期)	
16	中森遺跡	福地村小泉字中森1-4	丘陵	散布地	縄文(後、晚期)歴史	
17	高橋館遺跡	福地村高橋字横館6	丘陵	館跡	中世~近世	
18	巖倉平遺跡	福地村小泉字巖倉平17	丘陵	散布地	縄文(後期)歴史	
19	細尻遺跡	福地村小泉字細尻30	丘陵	散布地	歴史	
20	法師岡館遺跡	福地村法師岡字田向93	丘陵	館跡	中世~近世	
21	西張遺跡(1)	福地村法師岡字西張42-6	台地	包含地	縄文(後期)	
22	西張遺跡(2)	福地村法師岡字西張58	台地	散布地	縄文(後期)	
23	館遺跡	福地村塙渡字館9	台地	包含地	縄文(後期)	
24	源次郎平遺跡(1)	福地村福田字源次郎平7	台地	包含地	縄文(後期)	
25	源次郎平遺跡(2)	福地村福田字源次郎平	台地	包含地	歴史	
26	西久根遺跡	福地村福田字西久根51	台地	包含地	縄文(前、中期)	福地村郷土誌
27	矢崎館遺跡	福地村福田字矢崎館8の1	台地	包含地	縄文(後期)歴史	
28	カッテウ遺跡	福地村塙渡字カッテウ14-2	丘陵	散布地	縄文(後、晚期)	
29	放森遺跡	福地村塙渡字放森10-17-1	丘陵	散布地	縄文(後、晚期)歴史	
30	塙渡遺跡	福地村塙渡字塙渡24	台地	包含地	縄文(後、晚期)	八戸周辺の遺跡地名表
31	天獅子遺跡	福地村杉沢字天獅子16	丘陵	散布地	縄文(後期)歴史	八戸周辺の遺跡地名表
32	漆山遺跡	福地村杉沢字漆山7-1	丘陵	散布地	歴史	
33	牛墓遺跡	福地村杉沢字牛墓5	丘陵	散布地	縄文(後期)歴史	
34	佐伝窪遺跡	福地村塙渡字佐伝窪2	台地	包含地	縄文(後期)	
35	長地嶺遺跡	福地村塙渡字長地嶺24	丘陵	包含地	縄文(後期)	
36	昼巻沢遺跡	福地村樺木字昼巻沢30	丘陵	包含地	縄文(中、後期)	青埋文報第83集
37	高寺遺跡	五戸町豊間内字高寺		包含地	縄文(後期)	
38	諸味坂遺跡	名川町斗賀字諸味坂	山地	包含地	縄文(後期)	
39	伊勢沢遺跡(1)	名川町剣吉字伊勢沢	丘陵	包含地	縄文	
40	伊勢沢遺跡(2)	名川町剣吉字伊勢沢	丘陵	包含地	縄文(後、晚期)歴史	
41	剣吉荒町遺跡	名川町剣吉字荒野69、70-1	台地	包含地	縄文(後期)	青森県剣吉荒町遺跡調査略報 「名川町剣吉荒町遺跡」調査報告書
42	大宮遺跡	名川町森越字大宮	台地	包含地	縄文(後期)歴史	
43	森越山遺跡(1)	名川町森越字家ノ上	丘陵	包含地	縄文(後期)	
44	森越山遺跡(2)	名川町森越字家ノ上	丘陵	包含地	縄文(後期)歴史	
45	森の越野月遺跡	名川町森越字野月森越ポンフ場前	台地	包含地	縄文(早、後、晚期)弥生	
46	堀米遺跡	名川町森越字堀米		包含地	縄文(後、晚期)歴史	
47	提ヶ沢遺跡	名川町森越字提ヶ沢	台地	包含地	縄文(早期)	
48	柞木田遺跡	名川町平字柞木田57	台地	散布地	縄文(後期)歴史	
49	虚空蔵遺跡	名川町平字虚空蔵10-1	丘陵	包含地	縄文(後、晚期)	虚空蔵遺跡発掘調査報告書
50	下横沢遺跡(2)	名川町下名久井字下横沢42	台地	包含地	縄文(後、晚期)歴史	
51	下横沢遺跡(3)	名川町下名久井字下横沢43	台地	包含地	縄文	
52	東山遺跡	名川町下名久井字東山43-2	台地	散布地	縄文(後期)	

雷 遺 跡

第5図 雷遺跡遺構配置図



第III章 雷 遺 跡

第1節 検出遺構

今回の調査では、溝状ピットを3基検出しただけである。

第1号溝状ピット（第6図）

〔位置と確認〕 K-42・43グリッドに位置し、第IV層中で褐色土に黒色土の広がりとして確認した。

〔重複〕 なし。

〔規模と形状〕 開口面は365cm×65cmで、底面は340cm×10cmの長楕円形を呈する。深さは135～150cmである。短軸断面上では細長いV字状を呈している。長軸方位はN-55°-Eである。

〔壁〕 第VI・VII層を壁としており、上部はやや脆いものの、下部は堅緻である。

〔底面〕 第VII層を底面としており、西側が30cm程浅い。

〔堆積土〕 8層に分層できた。黒色土を基調としており、全体にしまりがなくやわらかい。上部及び最下層に炭化物粒の混入が認められた。

〔出土遺物〕 出土しなかった。

〔遺構の時期〕 構築時の掘り込み最上部は不明であるが、確認時には、第IV層を掘り込んでいたことが明確であることから中振浮石の降下時期よりは新しい。

第2号溝状ピット（第6図）

〔位置と確認〕 I-39・40グリッドに位置し、第VI層上部で褐色土に黒色土の広がりとして確認した。

〔重複〕 なし。

〔規模と形状〕 開口面は(375)cm×76cmで、底面は(305)cm×12cmの長楕円形を呈する。深さは145～165cmである。短軸断面上では細長いV字状を呈している。長軸方位はN-27°-Eである。

〔壁〕 第VI・VII層を壁としており、上部はやや脆いものの、下部は堅緻である。

〔底面〕 第VII層を底面としている。

〔堆積土〕 10層に分層できた。黒色土及び黒褐色土を基調としており、上部はしまりが認められるが、中位以下はしまりがなく、やわらかい。上部及び最下層に炭化物粒の混入が認められた。

〔出土遺物〕 出土しなかった。

〔遺構の時期〕 検出地点は中振浮石の堆積が認められなかった地点であることから、時期を決定するには至らなかった。

第3号溝状ピット (第6図)

〔位置と確認〕 I-27・28グリッドに位置し、第V層上部で褐色土に黒色土の広がりとして確認した。

〔重複〕 なし。

〔規模と形状〕 開口面は353cm×42cmで、底面は342cm×9cmの長楕円形を呈する。深さは88～145cmである。短軸断面上では細長いV字状を呈している。長軸方位はN-58°-Eである。

〔壁〕 第V・VI層を壁としており、上部はやや脆いものの、下部は堅緻である。

〔底面〕 第VI層を底面としている。

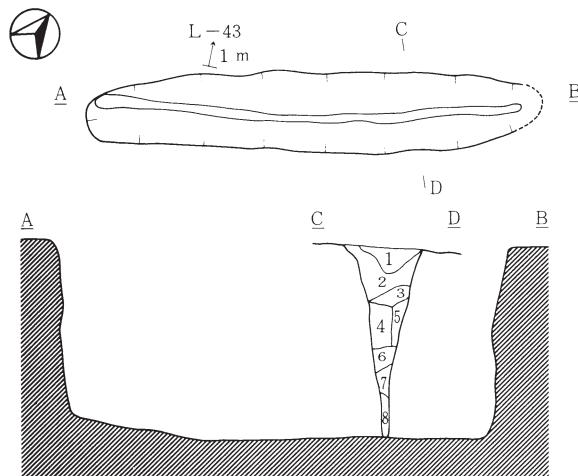
〔堆積土〕 3層に分層できた。黒色土を基調としており、全体にしまりがなく、やわらかい。上部及び最下層に炭化物粒の混入が認められた。

〔出土遺物〕 出土しなかった。

〔遺構の時期〕 検出地点は中摺浮石の堆積が認められなかった地点であることから、時期を決定するには至らなかった。

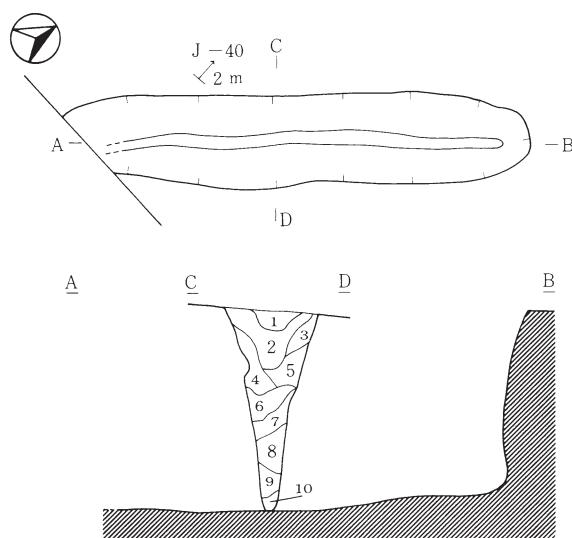
今回の調査は、道路幅に限定されていたため、溝状ピットの検出数も少なく、本台地上における該遺構の配置及び構築範囲を把握するには至らなかった。しかし、緩傾斜面からの検出が認められたことから、台地南側の緩傾斜面に向かって、該遺構の存在する可能性が高い。

(白鳥 文雄)



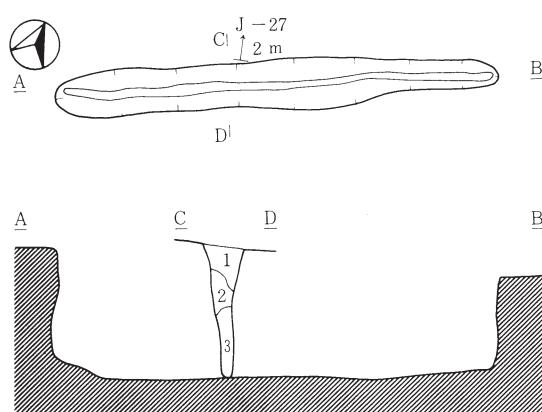
第1号溝状ピット

第1層	黒色土 10YR ^{1/2}	炭化物微量混入
第2層	黒色土 10YR 3/4	炭化物微量混入
第3層	黒色土 10YR 3/4	
第4層	黒色土 10YR ^{1/2}	
第5層	黒色土 10YR 3/4	
第6層	暗褐色土 10YR 3/4	
第7層	黒色土 10YR 3/4	
第8層	黒色土 10YR ^{1/2}	炭化物微量混入



第2号溝状ピット

第1層	黒色土 10YR 3/4	
第2層	黒色土 10YR 3/4	
第3層	黒褐色土 10YR 3/4	
第4層	黒色土 10YR 3/4	中振浮石との混合土
第5層	黒色土 10YR 3/4	
第6層	黒色土 10YR 3/4	
第7層	黒色土 10YR 3/4	
第8層	暗褐色土 10YR 3/4	
第9層	黒褐色土 10YR 3/4	褐色土との混合土
第10層	黒褐色土 10YR 3/4	



第3号溝状ピット

第1層	黒色土 10YR 3/4	かたく、しまりあり
第2層	黒色土 10YR 3/4	かたく、しまりあり
第3層	黒色土 10YR ^{1/2}	かたく、しまりあり

0 2m

第6図 第1～3号溝状ピット

第2節 出土遺物

今回の調査では、土器・石器等ダンボール箱で、約5箱分出土した。

1 土 器

出土した土器は、縄文時代の土器と平安時代の土器である。土器は大まかに時期ごとに群別した。各群中において型式により細分した。

第I群土器——縄文時代早期の土器

第II群土器——縄文時代前期の土器

第III群土器——縄文時代中期の土器

第IV群土器——縄文時代後期の土器

第V群土器——縄文時代の土器で時期が不明のもの

第VI群土器——平安時代の土器

第I群土器（第7図-1）

縄文時代早期の土器で、わずか1点の出土である。文様は、口唇部から口縁部へ縄による側面圧痕文が施文されており、口縁部から下は縄文が施文されている。胎土中には植物纖維を含み、器面には細砂粒の混入が認められる。これらの特徴から、表館VI群（青森県埋蔵文化財調査報告書第120集 1989年）に比定できるものと考えられる。

第II群土器（第7図-2・3）

縄文時代前期の土器で2点しか出土しなかった。(2)は、口頸部に縄による側面圧痕のある貼付隆帯を持ち、口縁部には、口縁と平行に1条の押圧縄文と、口縁部から隆帯へ斜位の押圧縄文が1条施文されている。また、口縁部はゆるやかな波状を形成する。前期大木6式に比定される。(3)は、口縁部の破片であり、口縁部と胴部の仕切りに2条の押圧縄文が施文されている。器形は頸部から口縁部にかけて外反するものであり、前期下層d式に比定される。

第III群土器

縄文時代中期の土器を一括した。本群土器を以下のように類別し記述する。

1類 円筒上層C式に比定されるもの。

2類 円筒上層d式に比定されるもの。

3類 円筒上層e式～楓林式に伴うもの。

つぎに、類別した土器の文様施文、胎土、器形等の諸特徴について述べる。

III群1類 円筒上層C式に比定されるものである

本類土器を隆帯の間にある施文方法により、2つに類別した。

A種 隆帯の間に縄による側面圧痕と刺突があるもの（第7図-4・5）

(4)は、平口縁であり、縄の側面圧痕のある隆帯が波状に貼付けられている。(5)は、刺突の工具に竹管を用いている。

B種 隆帯の間に刺突文が多様されるもの（第7図-6・7・第8図-8～16）

(6)は、口縁部の大突起にボタン状の瘤が貼付けられており、内面には貫通していない補修孔が施されている。また、胴部施文は結束第1種羽状縄文である。(13)は、ゆるやかな4つの波状を形成する口縁で、頸部には縄の側面圧痕のある瘤が貼付けせれている。(10)は、円形の貼付隆帯が口縁部に施されている。また、焼成が不十分なため、器面と貼付隆帯では、胎土の色が異なる。

III群2類 円筒上層d式に比定されるものである（第8図-17・18・第9図-19）

(19)は、4つの突起のある波状口縁で、口唇部には短く切断した貼付隆帯が縦位に連続して施文されている。(17)は、口頸部の破片であり、2個のボタン状貼付と縄による側面圧痕がある貼付隆帯が施文されている。(18)は、波状口縁の突起で口唇部には指頭押圧があり、口縁部には補修孔が設けられている。

第III群3類 円筒上層e式～複林式に伴うものである（第9図-20・27・28）。

本類は、ごく少量の出土であり、これらは口縁部破片である。20は緩やかに外反する波状口縁で、胴部にはヘラ状工具による斜位方向の調整がなされている。27・28は口縁から縄文が施文されている。

この他には、第9図21は口縁部から胴部へかけての破片で、口縁部は折り返し口縁である。口唇部及び胴部には縄文を施文しているが、口縁直下は幅1cm程の無文帯が構成されている。折り返し口縁という特徴から、円筒上層d式またはe式に伴うものと考えられる。

第9図22・24-26は、口縁部が欠失しているため、型式を特定できない。

（成田 悟）

第IV群土器（第10図-33～35）

縄文時代後期の土器を一括した。出土量は極めて少量である。

小破片で、沈線による文様が施文されている。十腰内I式に比定される。

第V群土器（第9図-30～32）

縄文時代の土器で時期を特定できないものを一括した。

31・32は同一個体と思われる破片で、網目状撲糸文が施文されている。薄手で、内面は丁寧にナデつけられている。縄文時代中期中葉から後期初頭のものと考えられる。30は沈線による文様施文後に、木目状撲糸文？による充填文様が施されており、中期後半期のものと考えられる。

第VI群土器（第10図-36～44）

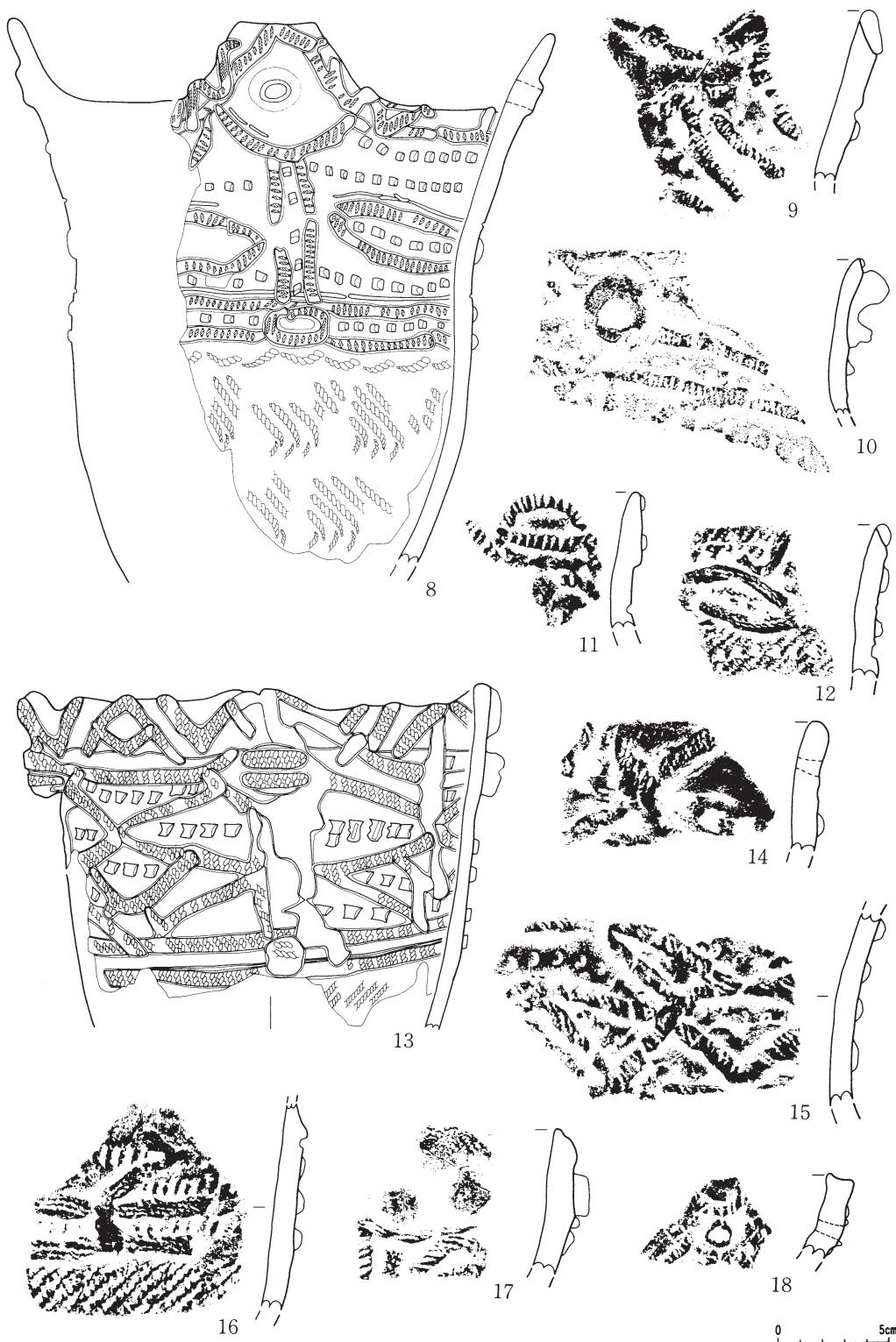
平安時代の土器を一括した。出土量はディスクトレー半箱分である。

土師器（第10図36～39）

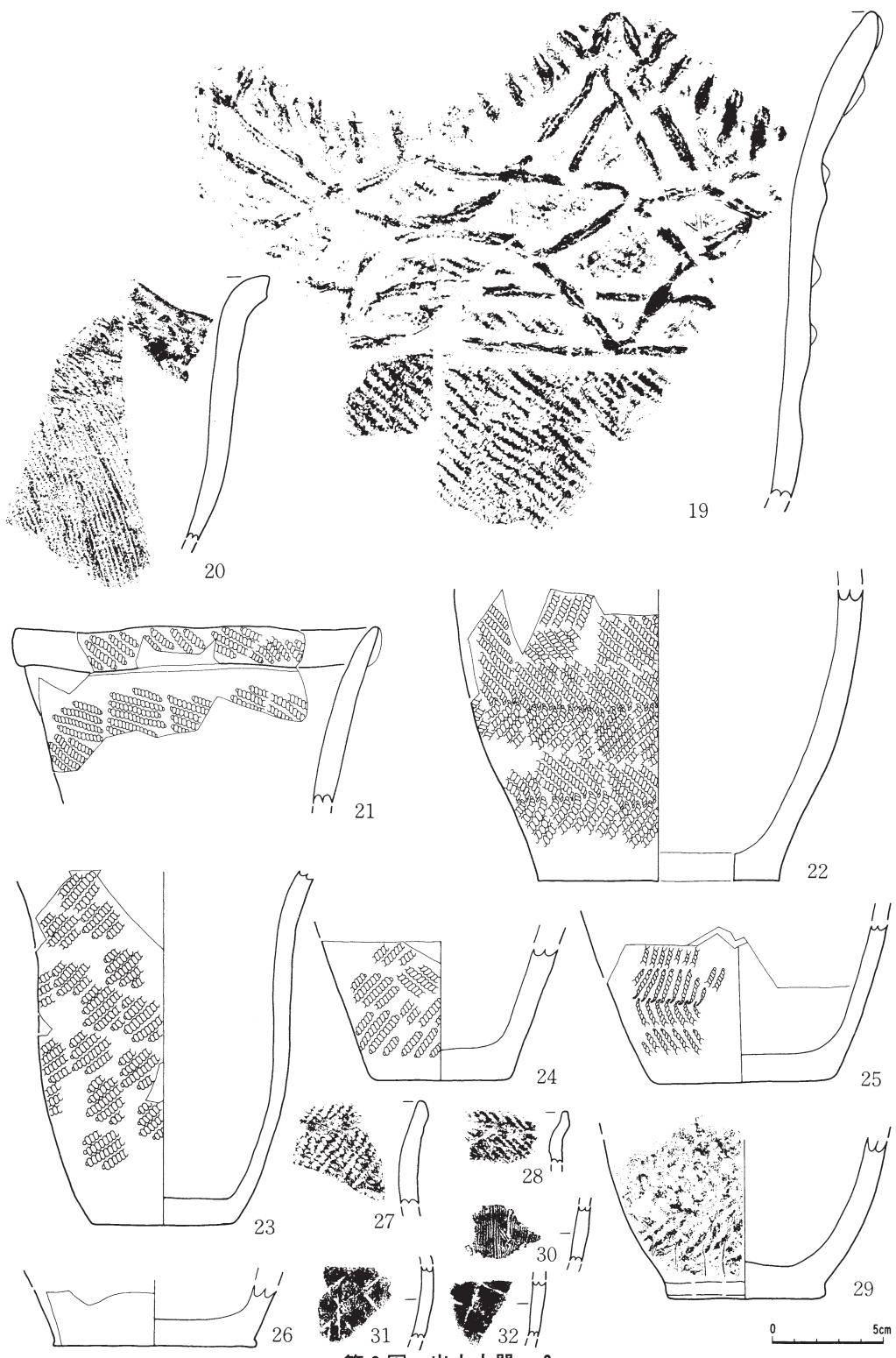
壺及び甕の破片が出土している。壺は小破片で1点の出土である。内面黒色処理が施されている。甕も破片での出土で、全体形を知り得るものはない。36は口縁部破片で、37は底部破片



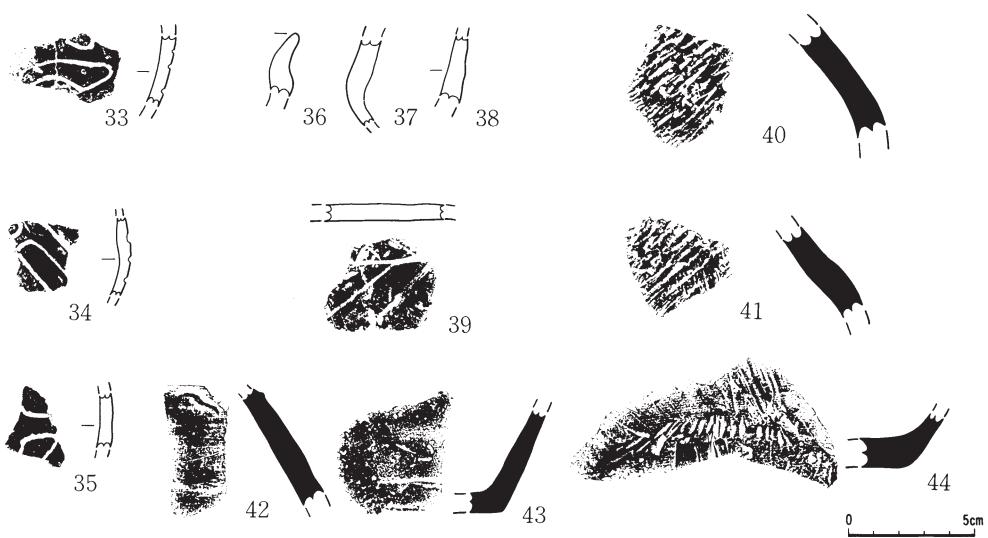
第7図 出土土器-1



第8図 出土土器-2



第9図 出土土器-3



第10図 出土土器－4

である。39は薄手で、内面は黒色処理されており、外面に木葉痕が認められる。甕の焼成は全体に非常に硬質であり、あかやき土器に近い。10世紀末から11世紀初頭と考えられる。

須恵器 (第10図-40~44)

大甕及び小型甕（壺？）の破片が出土している。44は底部破片で、立ち上がりの部分は籠ヶズリがなされており、外縁に叩き目が認められる。40・41は外面に叩き目が認められ、内面は籠ナデが行われ、当て具痕は認められない。41は黒色の自然釉が付着している。小型甕または壺と考えられる破片は、内外面ともナデによって器面を整形している。

(白鳥 文雄)

2 石 器

剥片石器25点、礫石器9点の出土である。総点数が非常に少ないとから、各器種等での細分類は行わず、一般的な器種名によって分類した。また、すべて遺構外出土のものであることから、一括して記載する。

(1) 剥片石器

石鏃 (第11図-1~10)

10点出土した。無茎鏃1点、有茎鏃7点、尖基鏃2点で、完形品は4点である。

1は薄手の無茎凹基鏃で、完形品である。基部の一端が（釣針の）カエシ状に突出している。2は有茎平基鏃で、基部端を欠失している。器体中央部に最大厚を有する。3~8の6点は、有茎突基鏃である。3・4は欠損品であり、長さに比して幅が狭く、尖頭部が長く作出されて

第2表 出土土器観察表

番号	出土地点	層	部位	外 面 施 文 文 様	内 面	分類
7図-1	K-37	V	口 縁 部	縦位圧痕+縄文(R L)		I群
7図-2	I-28	IV	口 縁 部	貼付隆帯+側面圧痕+縄文(L R)		II群
7図-3	K-34	III	口 頸 部	側面圧痕+縄文(L R)		II群
7図-4	L-34	III	口 縁 部	刺突+貼付隆帯+側面圧痕+結束1種羽状縄文		III-1
7図-5	J-49	I	口 縁 部	刺突+貼付隆帯+側面圧痕		III-1
7図-6	K-37	III	略 完 形	刺突+貼付隆帯+結束1種羽状縄文		III-1
7図-7	K-33	IV	口 縁 部	刺突+貼付隆帯+縄文(R L)		III-1
8図-8	K-37	Va	口 縁 部	刺突+貼付隆帯+結束1種羽状縄文+補修孔		III-1
8図-9	I-49	I	口 縁 部	刺突+貼付隆帯		III-1
8図-10	J-29	III	口 縁 部	刺突+貼付隆帯		III-1
8図-11	L-36	III	口 縁 部	刺突+貼付隆帯に刻目		III-1
8図-12	K-37	V	口 縁 部	刺突+貼付隆帯+縄文(L R)		III-1
8図-13	K-37	V	上 半 部	刺突+貼付隆帯+縄文(L R)		III-1
8図-14	J-49	I	口 縁 部	刺突+貼付隆帯+補修孔		III-1
8図-15	K-37	V	口 縁 部	刺突+貼付隆帯		III-1
8図-16	L-36	II	胴 部	刺突+貼付隆帯		III-1
8図-17	K-33	III	口 縁 部	貼付隆帯+ボタン状貼付		III-2
8図-18	J-40	III	口 縁 部	貼付隆帯+口唇部圧痕+補修孔		III-2
9図-19	J-38	IV	口 縁 部	貼付隆帯+縄文(R L)		III-2
9図-20	I-37	Va	口 縁 部	はけ目状の調整痕		III-3
9図-21	J-40	III	口 縁 部	縄文(R L)		III
9図-22	L-34	III	底 部	結束1種羽状縄文		III
9図-23	K-37	Va	下 半 部	縄文(L R)		III
9図-24	K-37	V	底 部	縄文(L R)		III
9図-25	I-37	Va	底 部	結束1種羽状縄文		III
9図-26	J-31	IV	底 部	無 文		III
9図-27	K-37	V	口 縁 部	縄文(L R)		III-3
9図-28	K-37	IV	口 縁 部	縄文(R L)		III-3
9図-29	L-36	III	底 部	結束1種羽状縄文		III
9図-30		IV	胴 部	R単絡1類回転文		V
9図-31	K-39	Va	胴 部	撲糸圧痕(R)		V
9図-32	L-38	II	胴 部	撲糸圧痕(R)		V
10図-33	I-40		胴 部	曲線沈線		IV
10図-34	I-40		胴 部	工字文		IV
10図-35	I-40		胴 部	曲線沈線		IV
10図-36	I-43	III	口 縁 部	ナデ(横位) 土師器甕	ナ デ	VI
10図-37	K-46	I	底 部	ヘラナデ 土師器甕	ヘラナデ	VI
10図-38	K-41	I・II	胴 部	ロクロ使用 土師器坏		VI
10図-39	表 採		底 部	木葉痕 土師器甕	ヘラケズリ	VI
10図-40	I-41		胴 部	格子様叩き目 須恵器	ヘラナデ	VI
10図-41	K-41	III	胴 部	格子様叩き目 須恵器	ヘラナデ	VI
10図-42	L-47		胴 部	ヘラナデ 須恵器	ヘラナデ	VI
10図-43	表 採		底 部	ヘラナデ 須恵器	ヘラナデ	VI
10図-44	表 採		底 部	ヘラケズリ 須恵器	ヘラナデ	VI

いる。やや肉厚である。2点とも先端及び基部端を欠失している。5は前2者とほぼ同様な作りであるが、基部の幅がやや広い。完形品である。6～8は器体全体が丸みを帯びており、前3者よりも器長が短い。6・7は両端を欠失している。8は完形品である。9は小型の有茎尖基鎌で、両端を欠失している。両端部とも肉厚であり、先端近くの形状から石錐に転用した可能性が考えられる。10は細身で器長の長い有茎尖基鎌で、完形品である。先端の形状から、9と同様に石錐に転用した可能性も考えられる。

石質では、珪質頁岩7点、玉髓質珪質頁岩1点、玉髓2点である。また、点数では、剥片石器中の40パーセントを占める。

石槍（第11図-11）

1点出土した。欠損品で、基部と考えられる。器面調整の剥離は、主に片面に施され、基端部において細かい調整剥離が認められる。また、この端部は、光沢を有することから、形狀的な要素から石槍としたものの、範状石器の可能性も高い。槍の未製品の欠損部を転用したものとも考えられる。

不定形石器（第12図）

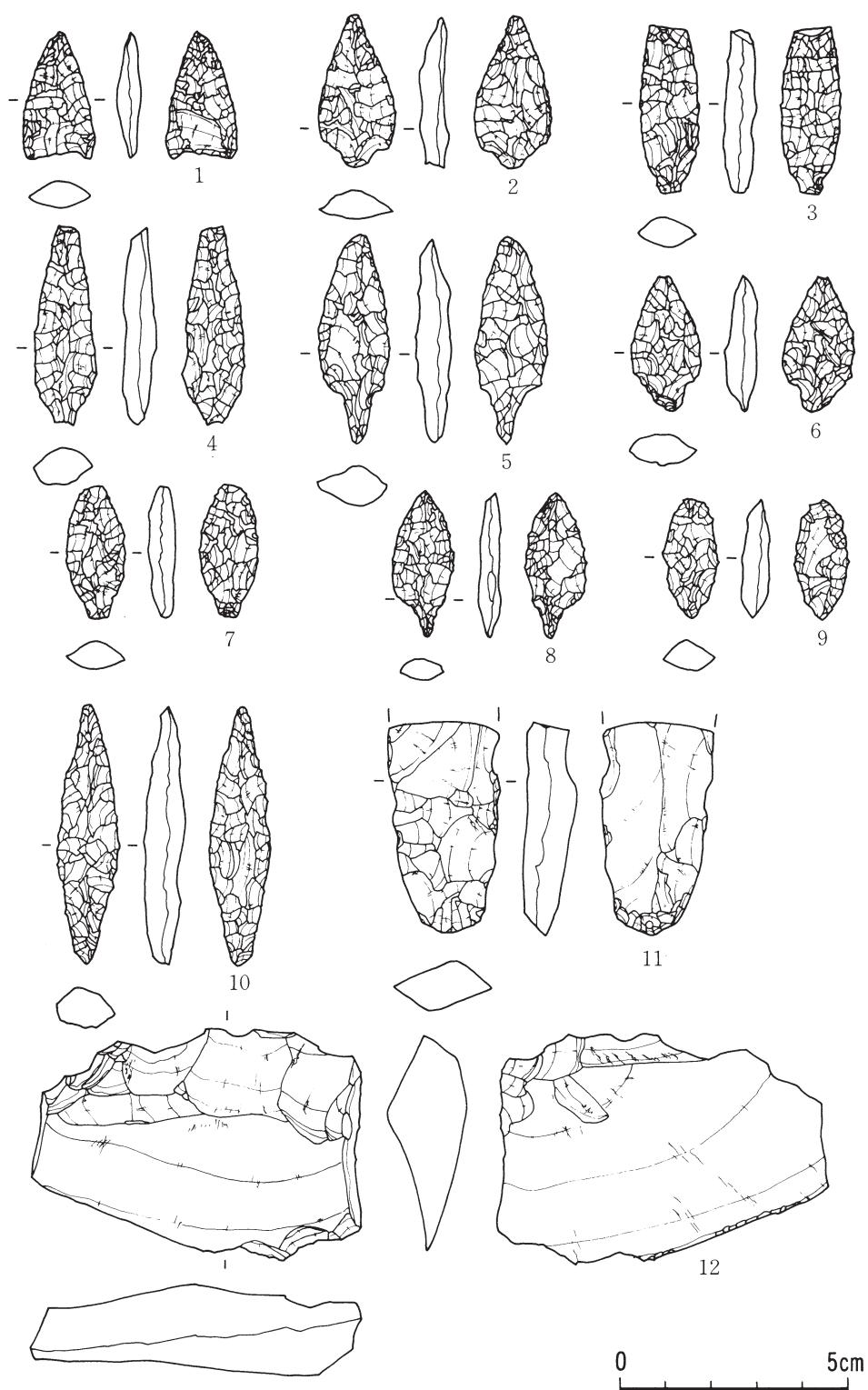
8点出土している。このほかに、U-フレークが6点ある。

横長剥片を素材としているものが2点ある（12・14）。12はやや大型の剥片を使用し、下端の縁辺に使用による連続した微細剥離を有する。バルブ側の縁辺に荒い剥離が認められ、不連続ではあるが、調整剥離が施されている。14は器体全面に調整剥離が施されており、バルブ側と下端の縁辺部に、刃部が構成されている。基端の最上部には、潰し状の丸みを帯びた面が認められる。

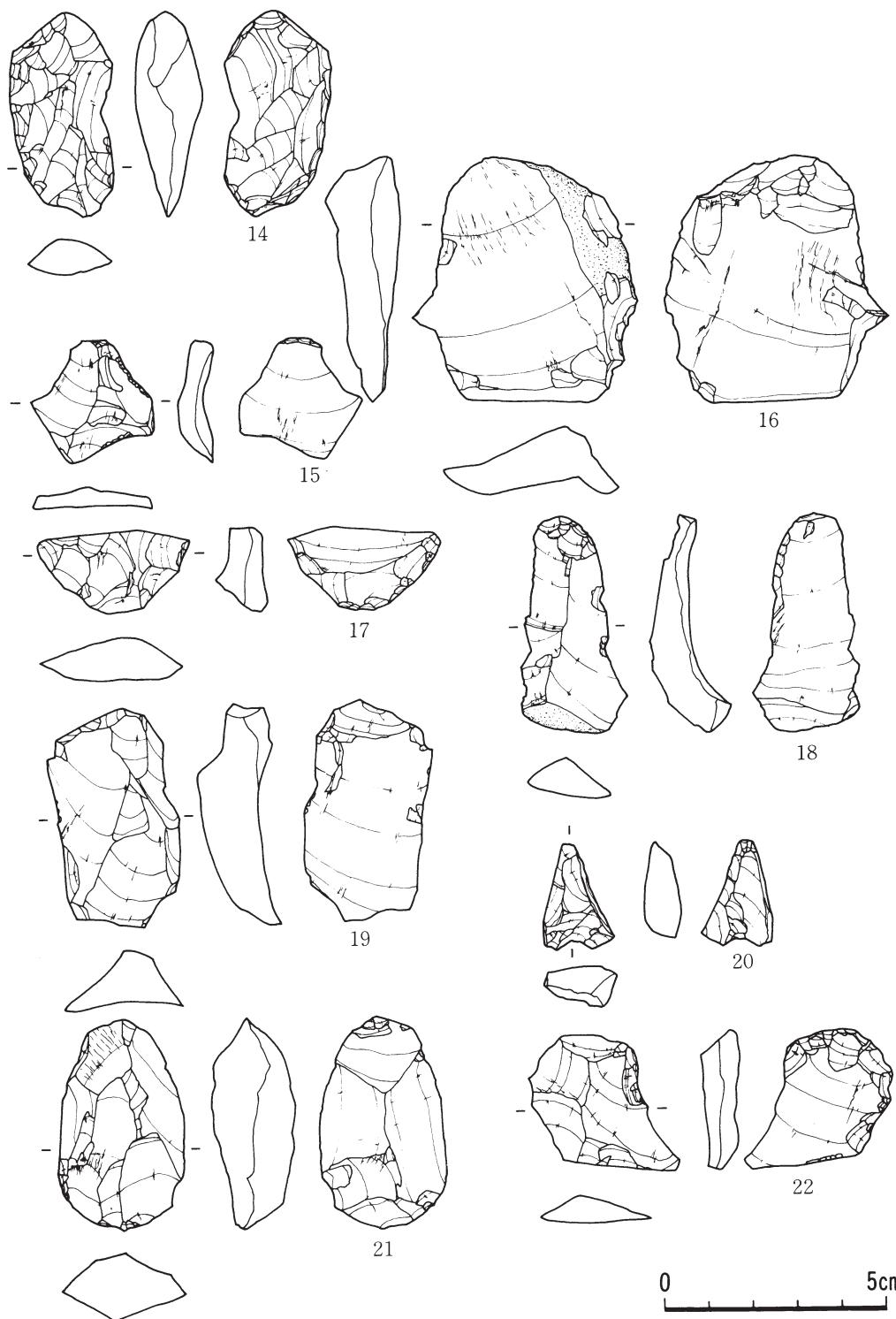
5点は、縦長剥片を素材としている。16は1側縁の中程からバルブにかけて、連続した調整剥離がなされており、側縁のほぼ中央部に嘴状の突起が作出されている。この突起の先端にも微細な調整剥離が施されている。いわゆるベックとは異なり、突起の根元には抉り状の剥離が認められない。錐的使用を意図したものと考えられる。18は縦長剥片のバルブ寄りの1側縁に片面からの連続した剥離を施したもので、他の側縁には使用による連続した微細な剥離が認められる。下端には自然面が残存する。22は1側縁からバルブまで連続した鋸歯状の剥離が施され、下端の折損部の一部には微細な剥離が認められる。15はやや内湾ぎみの2辺に連続した微細剥離が施されている。打面にも剥離が認められた。20は小型の破片で一部に両面からの剥離による抉りが施されている。21は肉厚の石核様の素材の両端部に微細な剥離が認められるものである。

これらの不定形石器の石質は、すべて珪質頁岩である。

（白鳥 文雄）



第11図 出土石器－1



第12図 出土石器－2

(2) 磔石器

9点の礎石器が出土した。内訳は、磨製石斧3点、北海道式石冠1点、スリ石4点、凹石1点である。各石器についての概略を記し、計測値等は、一覧表にまとめた（第4表）。

磨製石斧（第13図－1～3）

3点出土した。全て欠損品であり、基部側が残存している。

1は、敲打（潰し整形）後、全面研磨が行われているが、両側縁にザラ付きが若干残る。折損は、アックス的用法によるものと思われ、平面上で、斜めに折れている。

折損後、基礎部を敲磨器として転用しており、両面から頂部に向かって、2面の機能面が形成されている。機能面は、敲打とスリの併用によるものと考えられ、ともに面の中央が若干湾曲している。側縁側の端部には転用後の剝離痕が認められる。

2は、全面にわたって丁寧に研磨されている。折損部には剝離痕と敲打痕が認められる。期端部に敲打痕が認められ、敲打具として転用した可能性が考えられる。

3は、全面に研磨が行われている。折損は、1と同様にアックス的用法によるものと考えられる。両面中央に敲打による荒れが認められるが、柄に器体を装着するときのものか、転用時の痕跡かは不明である。側縁の一方は、整形時の研磨とは異なるザラ付いたスリ面が形成されており、折損後にスリ石として転用したものと考えられる。基礎部における敲打痕は、整形時のものと考えられる。

北海道式石冠（第13図－4・5）

2点出土した。1点は完形品であり、1点は欠損品である。

4は、硬質で肉厚の楕円礎を素材としている。長軸上に敲打による溝が一巡しており、使用における把握部（高橋正勝1971）を構成している。敲打による溝は浅く、また、他には整形痕は認められない。一側縁を機能面としており、3cm～4cmと幅広で、片減りが顕著に認められる。

5は、欠損品で、隣接するグリッドから出土した2点が接合したものであるが、器体全体の約半分が残存しているだけである。分厚い楕円礎を素材としており、機能面を除いた大部分に敲打痕が認められ、非常に浅いものではあるが敲打による溝が巡っている。機能面と相対する側縁から端部にかけても敲打及び小剝離による成形・整形の痕跡が顕著に認められる。

機能面は、非常に幅広であり、最大で5cm程であり、片減りも認められる。ススの付着が認められる。

スリ石（第13図－6～8）

3点出土した。

6は、肉厚の楕円礎を素材としている。片面のほぼ全面にわたり敲打による潰しが行われて

おり、一端のほぼ頂部にまで達している。また、この端部寄りに、より強い敲打が成され、凹みが形成されているが、この痕跡は把握を容易にするための意図的なものか、また敲打具として併用した結果であるかは不明である。一側縁を機能面としており、敲打が成されている側のスリ面の縁には、連続した剥離が行われている。他方の縁には、使用時によるものと思われる小剥離が認められる。また、機能面中の縁寄りにも磨消されきっていない小剥離痕が認められる。スリ面は、2～3.5cmと幅広であり、片減りが顕著である。他の面及び側縁には、整形及び使用痕は、全く認められない。

7は、欠損品で、分厚い楕円礫を素材としており、側縁の一部に敲打と併行したスリの痕跡が認められる。また、器表面に加熱によるものと考えられる荒れがみられる。

8は、断面形が三角の、長楕円礫を素材としており、一端部を機能面としている。機能面は素材の形状を、そのまま利用しており、使用頻度も非常に少ない。他には整形・使用等による痕跡は全く認められない。

凹石（第13図9）

9は、三角形の、やや扁平な礫を素材としており、両面に敲打による凹みが認められる。また、一辺の一部にも敲打による潰れが認められる。全体に火熱を受けており、部分的に火熱によるものと考えられる小剥離と荒れが認められる。

3 その他の遺物

古 錢

3枚出土した。寛永通宝と判読できるものが2枚で、1枚は銭名は不明である。また、5～6枚の古銭が半溶融状態で結合したものが出土した。これは、古銭を原材として鋳掛けのようなことを行った時の残滓の可能性がある。寛永通宝と判読できるものが1枚混じっている。

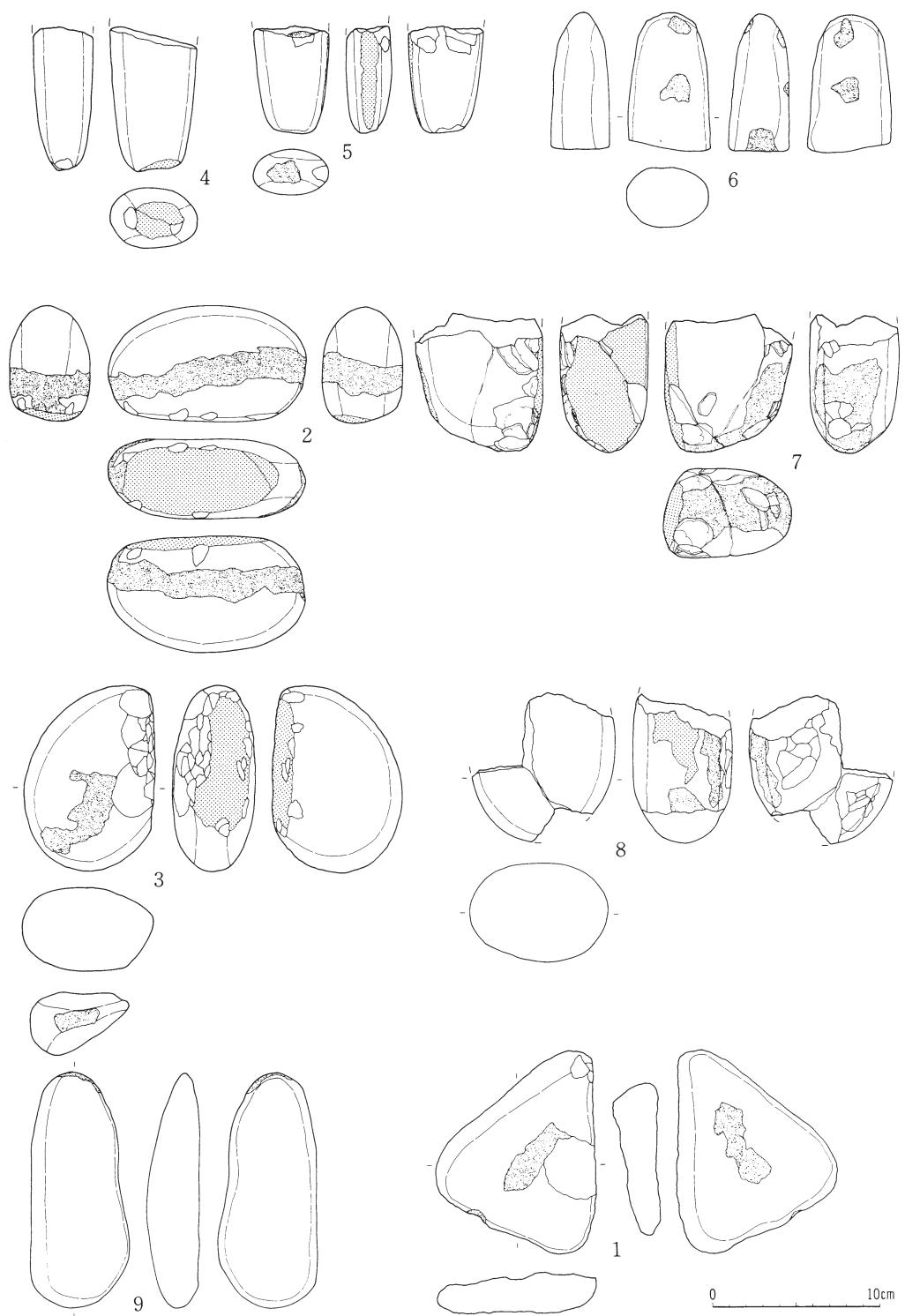
これら出土した古銭は、すべて銅銭である。出土層位は、すべて第1層（表土）である。保存状態が悪いために、拓本等の実測はできなかった。出土した旨の記載のみに留める。

（白鳥 文雄）

	玉 髓	玉質珪頁	珪質頁岩	閃 緑 岩	安 山 岩	輝 緑 岩	砂 岩	計
石 鏃	2	1	7					10
石 槍			1					1
不定形(含Uーフレーク)			14(6)					14
石 斧				3				3
北海道式石冠						1	1	2
ス リ 石					1		2	3
凹 み 石					1			1
計	2	1	22	3	2	1	3	34

第3表 石器組成表

(玉質珪頁→玉髓質珪質頁岩)



第13図 出土石器-3

第4表 石器観察表

剝片石器

図版	出地	土点	層	器種	最大計測値				石質	整理番号	備考
					長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
11図-1	I-41		III	石 鏃	28	16	5	1.6	玉 體	1	無茎凹基 完形品
11図-2	J-28		IV	石 鏃 (34)	17	6	(2.7)	珪 貞	2	有茎平基 基部欠損	
11図-3	K-34		II	石 鏃 (37)	14	6	(3.4)	珪 貞	3	有茎凸基 先端・基部欠損	
11図-4	J-44	-	石 鏃 (44)	13	7	(3.6)	珪 貞	4	有茎凸基 先端・基部欠損		
11図-5	K-37		V	石 鏃 46	15	9	4.1	珪 貞	5	有茎凸基 完形品	
11図-6	K-40		III	石 鏃 (30)	15	7	(2.5)	玉 珪	6	有茎凸基 先端・基部欠損	
11図-7	K-37	V	石 鏃 (30)	12	7	(2.2)	珪 貞	7	有茎凸基 先端・基部欠損		
11図-8	K-37	V	石 鏃 32	13	5	1.8	玉 體	8	有茎凸基 完形品		
11図-9	K-37	V	石 鏃 (27)	12	7	(1.9)	珪 貞	9	尖基 基部欠損		
11図-10	K-37	V	石 鏃 58	14	9	4.1	珪 貞	10	尖基 完形品		
11図-11	J-43		III	石 槍 (43)	23	11	(12.6)	珪 貞	11		
11図-12	I-37		III	不定形 45	72	19	52.7	珪 貞	12		
12図-14	J-34		IV	不定形 46	23	15	15.2	珪 貞	14		
12図-15	J-43		III	不定形 28	27	7	3.9	珪 貞	15		
12図-16	I-37		III	不定形 55	49	12	29.0	珪 貞	16		
12図-18	J-37		III	不定形 49	23	14	8.4	珪 貞	18		
12図-20	J-42		III	不定形 (24)	16	9	(2.7)	珪 貞	20		
12図-21	J-40	I	不定形 48	28	19	22.4	珪 貞	21			
12図-22	K-42		III	不定形 31	34	9	6.1	珪 貞	22		
12図-13	K-37	V	U-フレーク 24	29	8	5.5	珪 貞	13			
12図-17	K-37	-	U-フレーク (18)	35	11	(5.7)	珪 貞	17			
12図-19	I-43		III	U-フレーク 50	27	15	18.7	珪 貞	19		
	J-49	I	U-フレーク 30	20	7	4.0	珪 貞	23			
	J-49	I	U-フレーク 23	12	8	1.5	珪 貞	24			
	K-35	II	U-フレーク 25	14	5	0.6	珪 貞	25			

礫石器

図版	出地	土点	層	器種	最大計測値				石質	整理番号	備考
					長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
13図-1	L-34		IV	石 斧 (86)	(52)	(36)	(255)	閃緑岩	4	磨製・欠損品・敲磨器転用	
13図-2	J-29		III	石 斧 (65)	(46)	(28)	(118)	閃緑岩	5	磨製・欠損品・敲磨器転用?	
13図-3	表採	-	石 斧 (82)	(49)	(41)	(220)	閃緑岩	6	磨製・欠損品・敲磨器転用		
13図-4	J-46		IV	北海道式石冠	120	71	49	653	砂岩	2	完形品
13図-5	K-32・33		III	北海道式石冠 (83)	(77)	(54)	(540)	輝緑岩	7	欠損品	
13図-6	K-37		V	スリ石 111	76	50)	634	砂岩	3	完形品	
13図-7	K-35・L-34	III	スリ石 (100)	(86)	(60)	(473)	安山岩	8	欠損品		
13図-8	I-40		IV	スリ石 142	60	38	397	砂岩	9	完形品・端部使用	
13図-9	L-42	III	凹 石 122	97	36	382	安山岩	1	完形品・2面使用		

第3節 小 結

今回の調査は、道路幅の範囲に限定されたため、遺跡の全容を把握するには至らなかった。

調査の成果から以下のことが考えられる。

遺構では、溝状ピットを3基検出したにすぎず、住居跡等は確認できなかった。該遺構は、調査区西側の傾斜がやや急になっている部分には認められず、概ね、平場または緩傾斜地において検出された。このことから、溝状ピットは調査区の南から北東にかけての緩傾斜地及び平場に沿って、斜面縁辺部に展開して構築されている可能性が高い。構築時期は、中摺浮石層及び相当層を掘り込んでいることから、当該火山灰の降下時期よりは新しいものと考えられる。また、十和田 b 降下火山灰を含む第II層が上部に堆積していることから、これら2種の降下時の間に構築されたものと推察される。

遺物は、総出土量がダンボール箱5箱分と少量であったために、本遺跡を利用した主要な時期を断定することはできない。

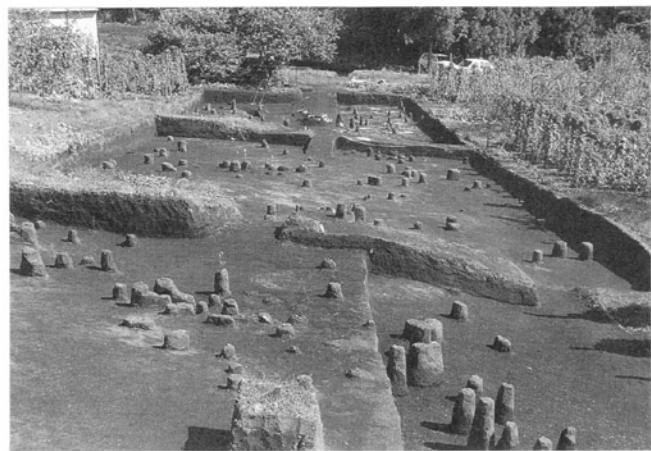
出土土器では、縄文時代中期の円筒上層d式、同e式がその大部分を占めている。また、周辺の畠地等から出土している土器片等も、ほぼ同時期のものが多く認められる。この時期以外では、縄文時代早期・前期・後期の土器が数点づつではあるが出土している。また、平安時代の土師器及び須恵器が破片で出土している。

出土した土器からは、本遺跡の主体となる時期は、主に円筒上層式の後半期に當まれたことが示唆される。

出土石器は、総点数に対して石鏃の出土点数が多いという特徴が挙げられる。この中の5点は南部浮石を含む第V層上位からの出土であり、器形も有茎凸基または尖基で形状が類似している。礫石器では、主に縄文時代中期に用いられたと考えられる北海道式石冠を含むスリ石が主体を占めていることから、器種組成の面からは居住空間に伴う石器が多いという傾向が認められる。出土層位等からは、出土土器の時期と何ら矛盾点は認められない。

以上、遺構・遺物の特徴を列記したが、これらの点から、本遺跡は縄文時代早期から後期までと平安時代に生活の場として利用されたことが理解される。特に今回の調査の結果からは、遺物の量から疑問点は残るもの縄文時代中期に主に利用された遺跡と推察される。しかし、居住地に伴うと考えられるスリ石（食に関わるものとして）等の出土は認められたものの、その中心となる住居跡の検出が認められなかったことから、本遺跡の主体部及び性格を特定するまでは至らなかった。また遺跡の範囲としては、調査区域に隣接する緩斜面及び平場を主に利用していたものと推察される。また溝状ピットの性格から、最低一時期は狩猟の場として利用されたものと考えられる。

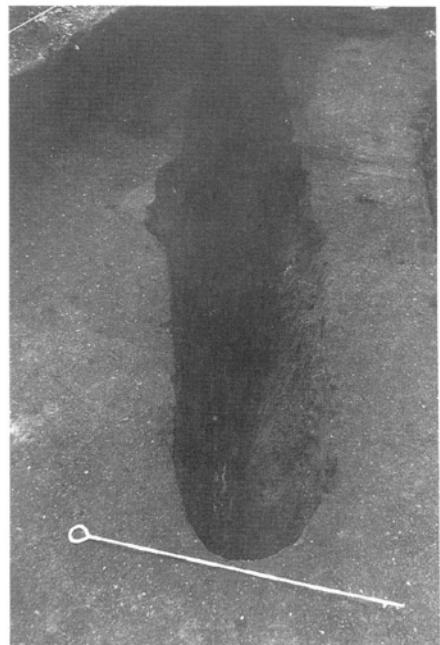
（白鳥 文雄）



遺跡全 景

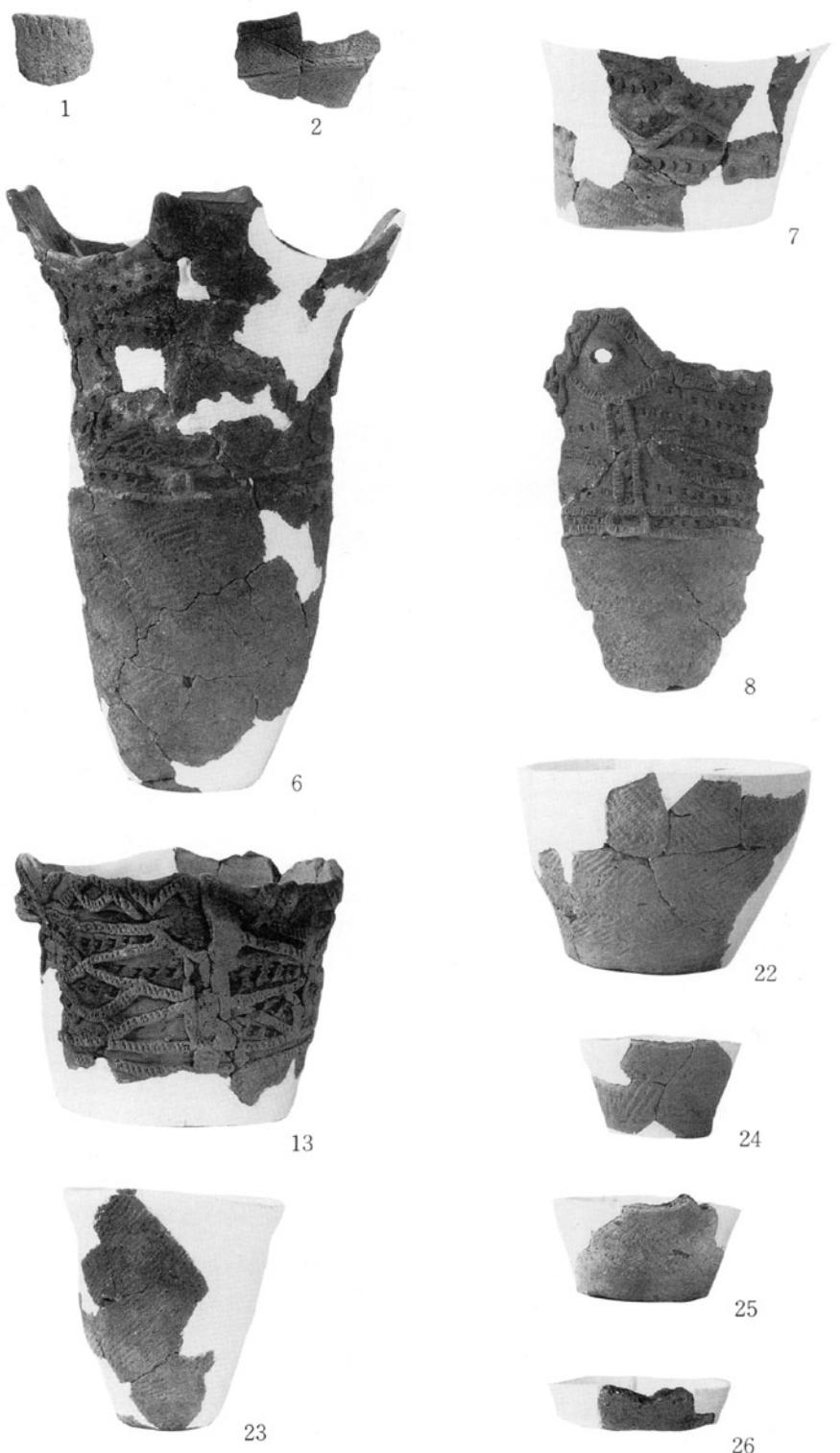


第1号溝状ピット



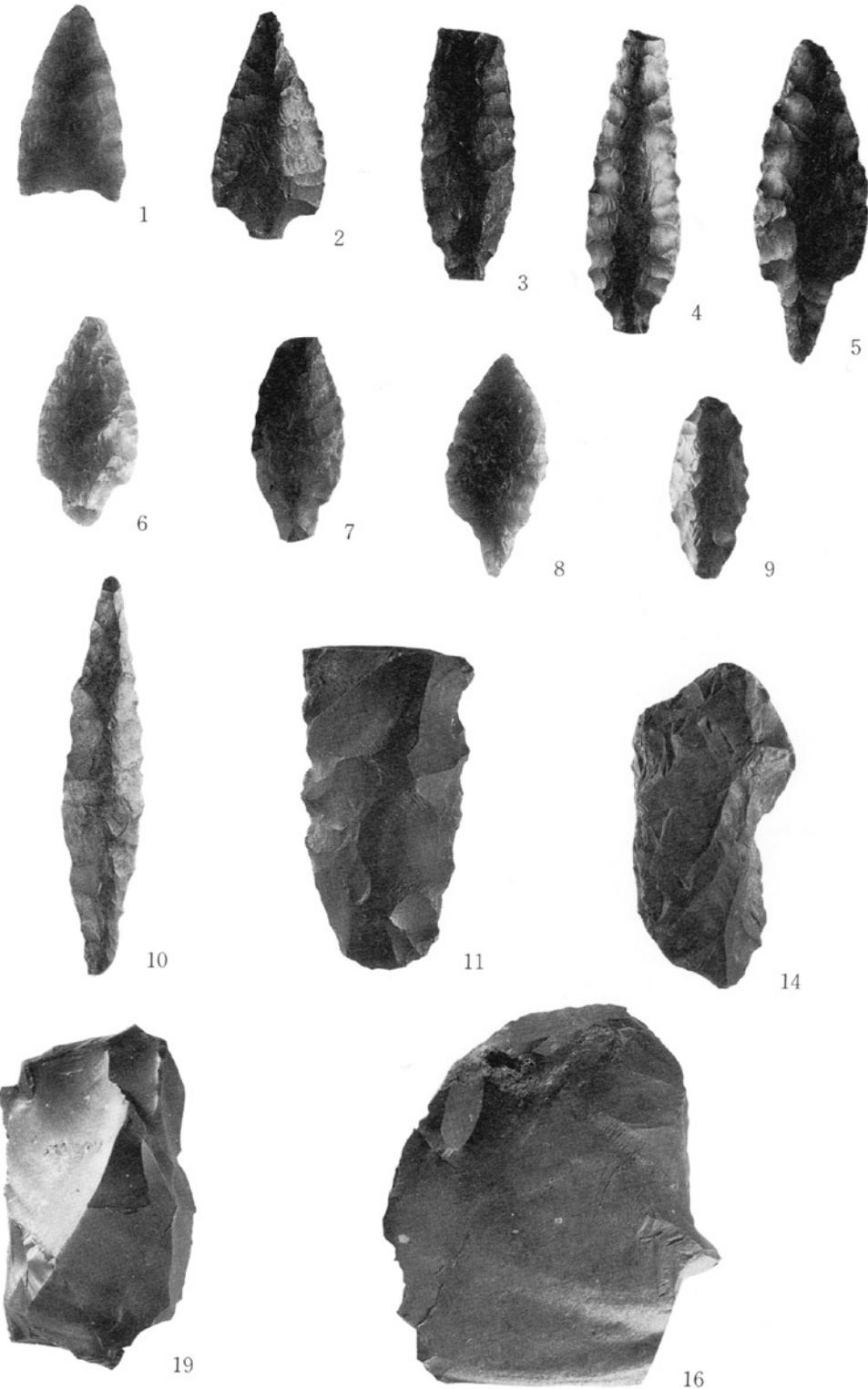
第2号溝状ピット

P L - 1 検出遺構



P L - 2 出土土器

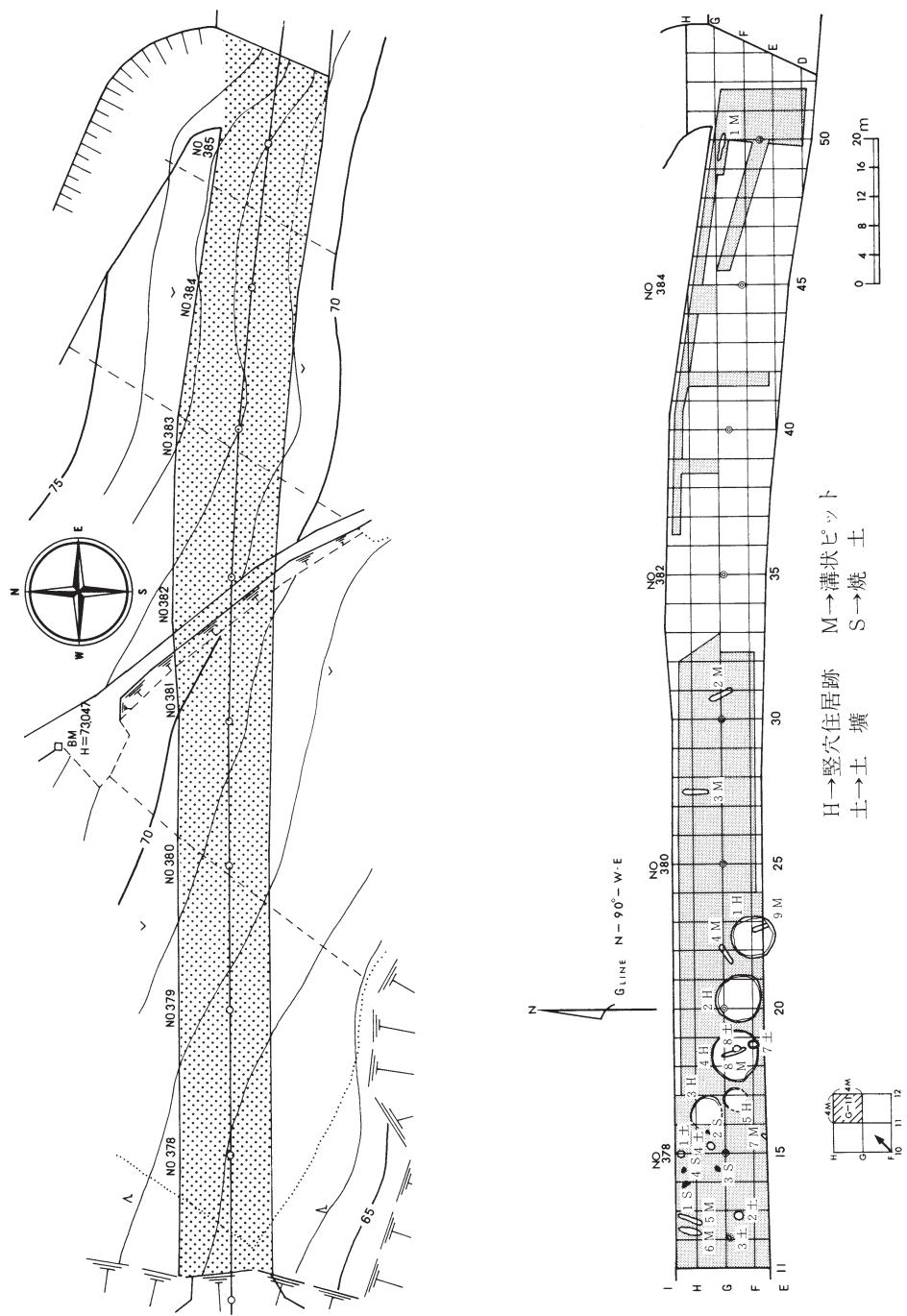
S = 1 : 45



P L - 3 出土石器

S = 1 : 1

西山遺跡



第14図 西山遺跡遺構配置図

第IV章 西山遺跡

今回の調査では、竪穴住居跡5軒、土壙6基、溝状ピット9基、焼土4基を検出した。

調査は、道路幅部分に限定されているため、これらの遺構の広がり及び集落の範囲については不明である。遺構は、台地下面の30ライン以西に集中している。

遺物では、縄文時代の土器片・弥生時代の土器片・石器等がダンボール箱で約20箱分出土している。

第1節 検出遺構

1 竪穴住居跡

5軒検出した。住居跡自体の重複は認められないが、非常に近接した位置関係での検出である。また、規模的には大型のものが多い。

遺構内の出土遺物は、住居跡出土の土器の実測・拓影図は、各住居跡の事実記載の後に掲載したが、石器は、第5号住居跡の後に一括して記載した。土壙・焼土遺構の遺物も一括して記載した。土器の観察表は、遺構内出土と遺構外出土のものに分けて記載した。石器の計測表は第2節の末尾に一括した。

第1号竪穴住居跡 (第15~17・30・32図)

〔位置と確認〕 E・F-21~23グリッドに位置する。第II層下部において、遺物の密集部及び環状に広がる浮石の範囲として確認した。

〔重複〕 第9号溝状ピットと重複し本住居跡が新しい。

〔規模と形状〕 長径610cm、短径580cmであり、深さは45cm~60cmである。東西にやや長い円形を呈する。面積は、壁直下の範囲で24.7m²であり、畳約15丁分の広さである。

〔壁〕 第III~V層を壁としており、上部は若干しまりに欠ける。立ち上がりは、床面近くは緩やかである。

〔床面〕 第V層を床面としており、若干の起伏は認められるが、概ね堅緻である。全体にローム及び粘土の混合土を用いた貼り床面である。

〔柱穴〕 床面上で5個のピットを確認した。炉を中心に、主柱穴と推定される4個が配置

第5表 ピット計測表

No.	口 径(cm)	底 径(cm)	深さ(cm)	No.	口 径(cm)	底 径(cm)	深さ(cm)
1	30 × 30	12 × 10	45	4	(30) × 26	11 × 9	55
2	28 × 27	10 × 10	50	5	25 × 18	7 × 6	18
3	25 × 23	8 × 7	43				

されている。柱穴の間隔は、東西間で約200cm、南北間で約180cmである。Pit 5は、Pit 1と4のはば中間に位置して、規模も小さく、浅い。

〔炉〕 ほぼ住居跡の中央に位置する。地山を掘り込んで構築しており、石組などの痕跡は認められない。炉を中心としての周囲は、全体に窪地状に掘り下げられている。焼土は全体にやわらかく、しまりに欠ける。炭化物粒を混入している。また、この炉の上の覆土中からも焼土が検出されたが、本住居跡に伴うものではない。

〔堆積土〕 7層に分層される。黒褐色土を基調としており、全体にしまりが認められ、かたい。第3層は降下火山灰の層で、浮石及び灰がレンズ状に堆積している。調査時には肉眼的観察から、十和田b降下火山灰と推定している。この層は住居跡の壁際まで連続しており、一部第II層とも接している。炉の項で記載した焼土は、この浮石層の直上に位置しており。浮石層まで焼化が成されている。本住居跡の埋没過程で、この窪地が利用されたものと考えられる。この浮石は、蛍光X線分析による同定を行った（第2章1節・第4章3節参照）。

また、この浮石層から出土した炭化材について放射性炭素測定による年代測定を行った（第4章3節参照）。

〔出土遺物〕 確認面から床面まで、多くの遺物が出土した。特に問題となる降下火山灰層直上からは、弥生時代後期の念佛間式と考えられる土器が出土している。

土器は、弥生時代の土器を中心としているが、縄文時代後期・晚期の土器片も覆土中から出土している。4・12は床面からの出土である。

石器は、石鎌6点・石錐1点・靴型石器1点・不定形石器3点・スリ石3点・台石1点・加工痕跡のある礫が1点出土している。この他に覆土中から多くの剝片及び礫が出土した。

礫石器のほとんどが、床面からの出土である。

この他に、は円錐状の形状のもので、なんらかの物に貼付されていたものと考えられ、片面に剥落した痕跡が認められる。土製品の可能性も考えられる。

〔遺構の時期〕 出土土器から、縄文時代晩期末葉と推定される。

(白鳥 文雄)

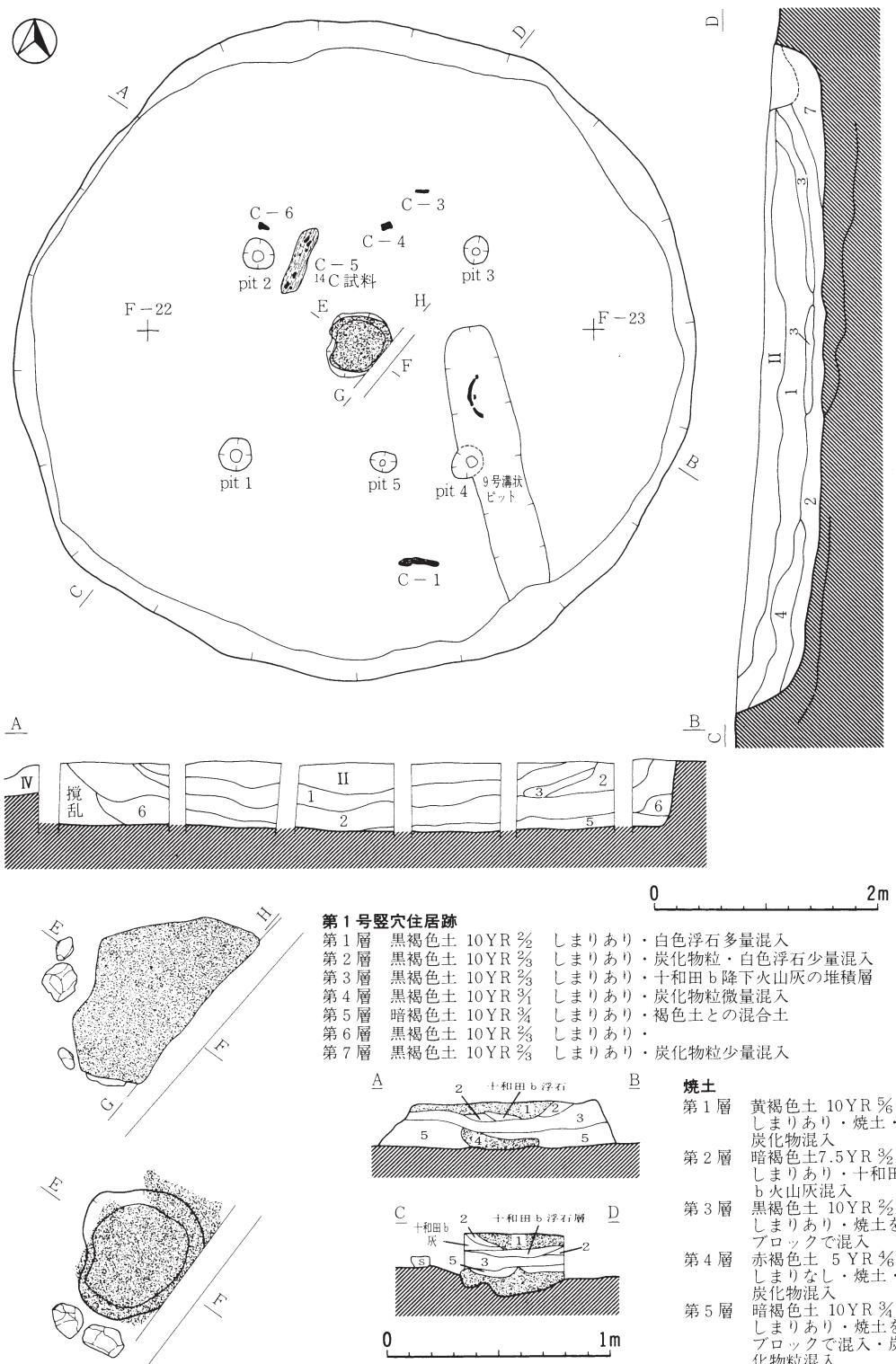
第2号竪穴住居跡 (第18・19・30図)

〔位置と確認〕 E～G-19・20・F-21グリッドに位置する。第II層下部において、遺物の密集部及び暗褐色土の範囲として確認した。

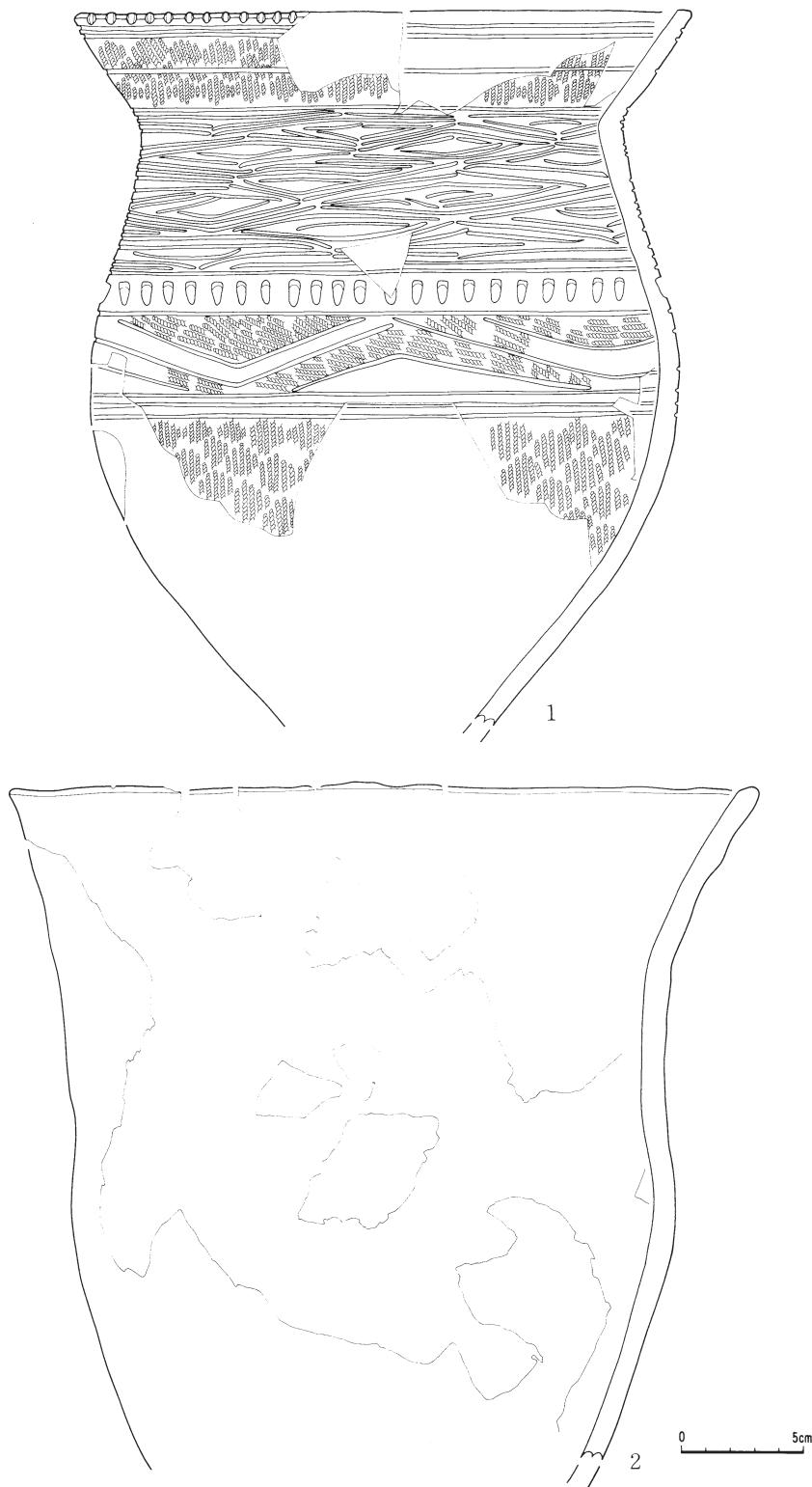
〔重複〕 なし。

〔規模と形状〕 直径680cm、短径600cmであり、深さは25cm～61cmである。東西にやや長い楕円形を呈する。面積は、壁直下の範囲で30.6m²であり、畳約18.5丁分の広さである。

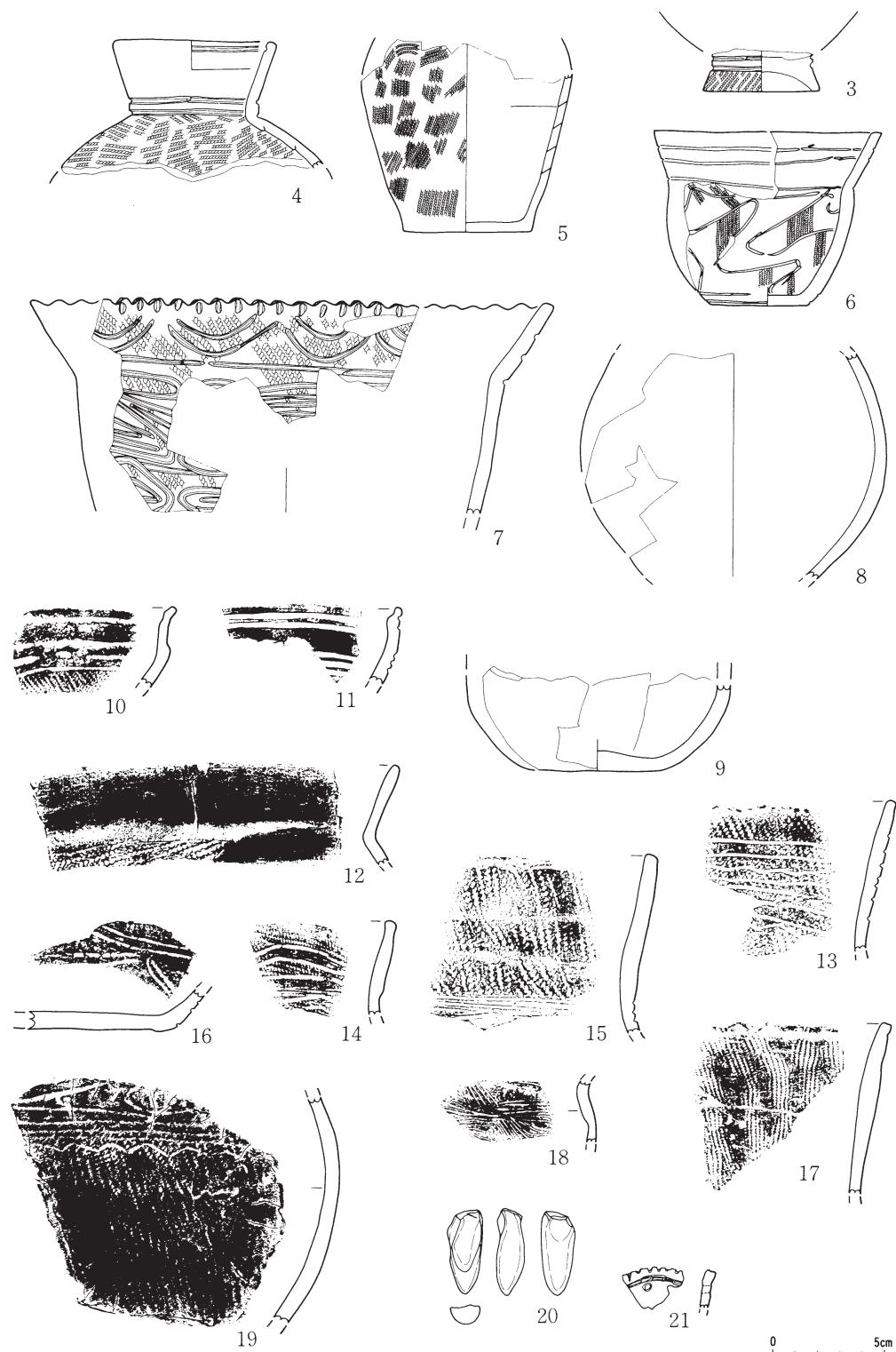
〔壁〕 第III～V層を壁としており、上部は若干しまりに欠ける。立ち上がりは、概ね、垂



第15図 第1号竪穴住居跡



第16図 第1号竪穴住居跡出土土器－1



第17図 第1号竪穴住居跡出土土器－2

直に近い。

〔床面〕 第V層を床面としており、若干の起伏は認められるが、概ね堅緻である。全体にローム及び粘土の混合土を用いた粘り床面である。南西側に傾斜している。

〔柱穴・ピット〕 床面上で12個のピットを確認した。北東壁直下に4個の小ピットと住居中央部に7個のピットが掘り込まれている。また、東壁寄りに径75cm程で、深さ50cmの付属施設と考えられる Pit 12が検出された。このピットを除いた他の11個が柱穴と考えられる。主柱穴は住居跡中央の7個が可能性が高い。ただ、基本的には4本柱と考えられること、また、住居跡の規模等から、建替えのあった可能性も考えられる。

〔炉〕 住居跡の中央からやや北寄りに位置する。地山を掘り込んで構築しており、炉を中心とした部分は、やや低く掘り下げられている。焼土は全体にややかたくしまりがある。炭化物粒を若干混入している。

〔堆積土〕 4層に分層される。上部は暗褐色土で、下部は黒褐色土である。第1層は第II～第IV層の混合土的様相を呈している。第3・4層は第IV層などの再堆積と考えれるものでしりが弱い。第1・2層は、十和田b降下火山灰の浮石、中振浮石及び南部浮石を混入しており、人為的堆積の可能性が強い。

〔出土遺物〕 確認面から床面まで、多くの遺物が出土した。

土器の多くは弥生時代の土器であるが、覆土中からは縄文時代後期の土器も伴出している。床面からは2・5・7・11が出土しており、また、第1・2層が人為的に埋め戻された可能性があることから、弥生時代の土器は本住居跡で使用されていた可能性が高い。

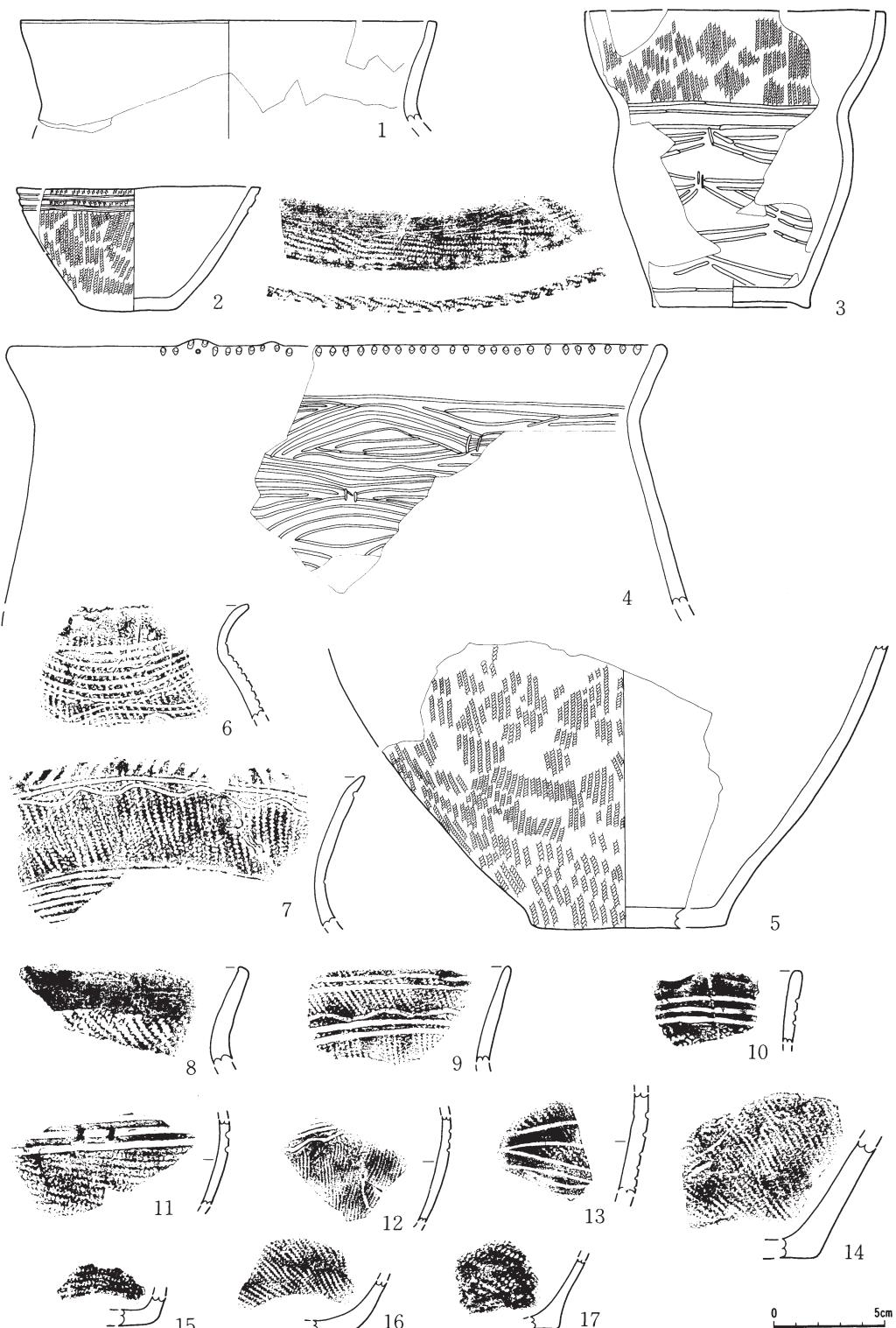
石器及び剥片・礫は、土器の出土量に比して、非常に少量の出土であり、石器は有茎凸基の石鏃が1点出土したにすぎない。

〔遺構の時期〕 出土土器から、縄文時代晩期末葉と推定される。

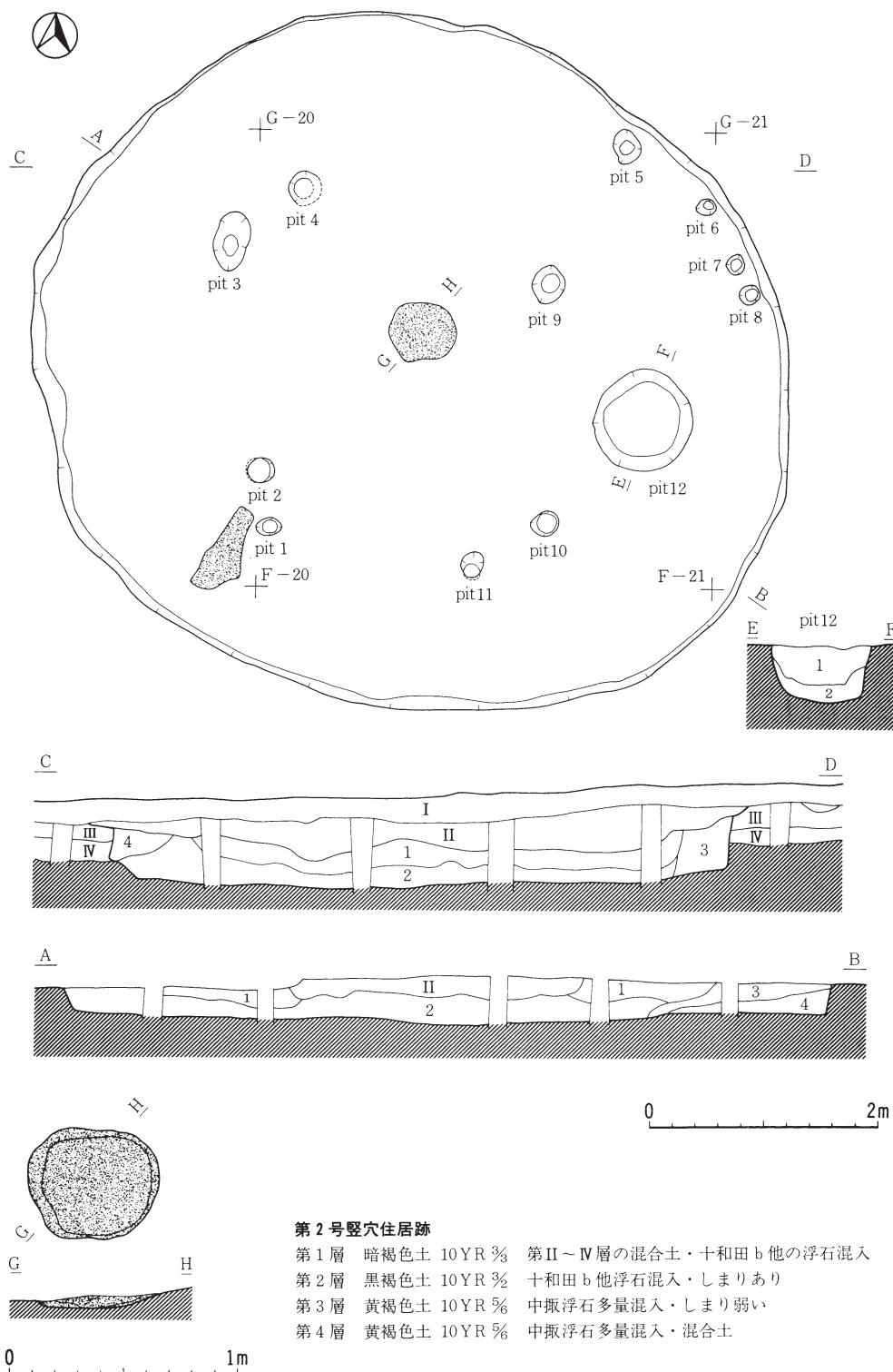
(白鳥 文雄)

第6表 ピット計測表

No.	口 径(cm)	底 径(cm)	深さ(cm)	No.	口 径(cm)	底 径(cm)	深さ(cm)
1	24 × 16	14 × 11	53	7	19 × 16	12 × 11	32
2	24 × 21	23 × 20	45	8	18 × 17	12 × 11	52
3	52 × 30	18 × 14	64	9	35 × 30	17 × 16	69
4	30 × —	18 × —	45	10	26 × 22	18 × 16	51
5	31 × 22	14 × 13	46	11	24 × 20	16 × 13	62
6	18 × 14	10 × 8	38	12	90 × 85	65 × 62	56



第19図 第2号竪穴住居跡出土土器



第18図 第2号竪穴住居跡

第3号竪穴住居跡 (第20・21図)

〔位置と確認〕 G・H-16グリッドに位置する。第II層下部において、遺物の密集部及び黒褐色土の範囲として確認した。耕作による削平のため西側部分は確認できなかった。

〔重複〕 なし。

〔規模と形状〕 確認部分での最大長は、480cmである。深さは10cm～20cmである。北西から南東に長い楕円形を呈するものと推察される。

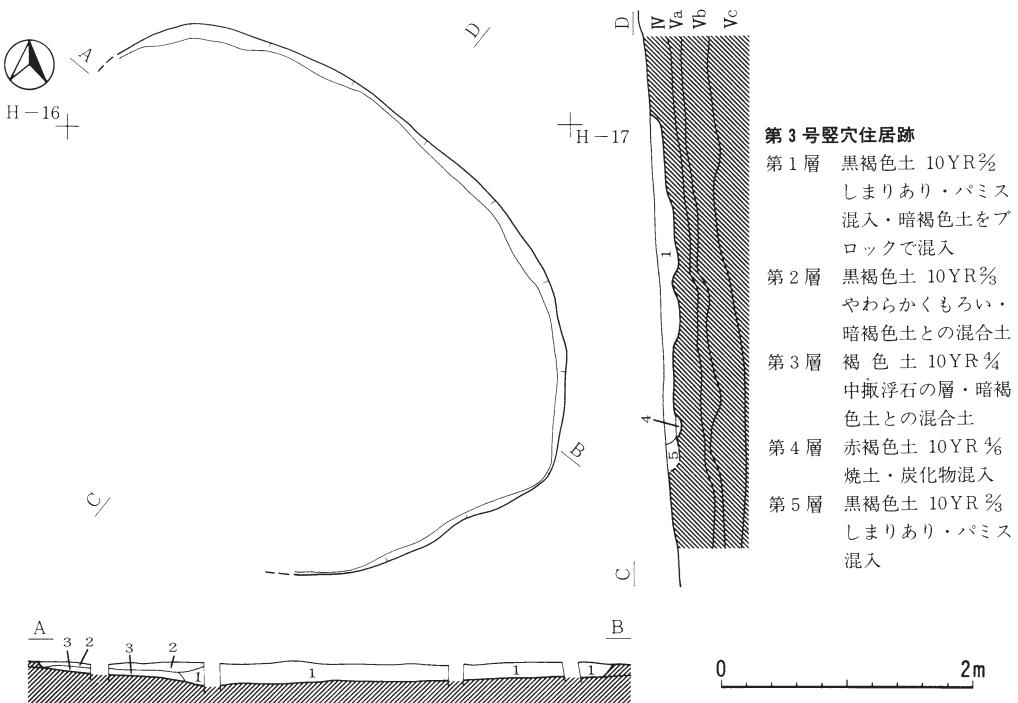
〔壁〕 第IV層を壁としており、しまりに欠ける。立ち上がりは、概ね垂直に近い。

〔床面〕 第IV層を床面としており、起伏が認められる。しまりに欠けており、貼り床の痕跡もほとんど検出できなかった。床面としてのは、他の第IV層よりもしまりが強い部分である。

〔柱穴・ピット〕 確認できなかった。

〔炉〕 確認できなかった。ただ、南東端に径20cm程で厚さ5cm程のしまりのある焼土が確認された。位置から、炉とは断定できない。

〔堆積土〕 5層に分層される。黒褐色土を基調とし、暗褐色土をブロック状に含む。中振浮石及び白色の浮石を混入する。全体にしまりが認められる。人為的堆積の可能性も考えられるが、精査面積が少ないため、推察の域を出ない。



第20図 第3号竪穴住居跡

〔出土遺物〕 確認面から床面まで遺物が出土している。壁高が10~20cmであることから、出土した遺物はほぼ床面直上のものと考えられるが、耕作による削平も著しいため、攪乱した可能性も高い。また、住居跡として確認できる前段階においては、本住居跡の範囲内外の土層中から、縄文時代後期初頭の狩猟文土器が出土している。

土器は、弥生時代及び縄文時代の後期の土器が出土している。剥片及び小礫は少量出土したが、石器は1点も出土しなかった。

〔遺構の時期〕 出土土器から、縄文時代後期以降と推定される。 (白鳥 文雄)



第21図 第3号竪穴住居跡出土土器

第4号竪穴住居跡 (第22・23・25~28・30・31図)

〔位置と確認〕 E~G-17~19グリッドに位置する。第II層下部において、遺物の密集部及び暗褐色土の範囲として確認した。また、第1号竪穴住居跡と同様に降下火山灰の浮石及び灰が、平面上で円形に確認できた。

〔重複〕 第7号土壙及び第8号土壙と重複し、本住居跡が新しい。また、第8号溝状ピットとも重複しており、本住居跡が新しい。

〔規模と形状〕 長径734cm、短径654cmであり、深さは30cm~50cmである。東西に長い楕円形を呈する。面積は、壁直下の範囲で34.8m²であり、畳約21丁分の広さである。

〔壁〕 第III~V層を壁としており、上部は若干しまりに欠ける。立ち上がりは、概ね垂直である。

〔床面〕 第V層を床面としており、緩やかな起伏が認められるが、概ね堅緻である。全体にローム及び粘土の混合土を用いた粘り床面である。全体に南西側に傾斜している。

〔柱穴・ピット〕 床面上で4個のピットを確認した。住居跡中央寄りにほぼ方形に配置されている。各柱穴は、東西間では、Pit 1と2で250cm、3と4で290cmであり、第1号住居跡と同様に南側が若干広い。南北間では、1と4で280cmで、2と4で270cmとほぼ等間隔である。

第7表 ピット計測表

No.	口 径(cm)	底 径(cm)	深さ(cm)	No.	口 径(cm)	底 径(cm)	深さ(cm)
1	29 × 28	17 × 16	44	3	27 × 23	15 × 14	45
2	25 × 26	15 × 15	41	4	26 × 24	16 × 14	45

これらの4個の柱穴は、主柱穴と考えられる。

〔炉〕 住居跡の中央から西寄りにあり、Pit 1と4の中間に位置する。2個の焼土がならんで確認された。地山を掘りくぼめて構築されている。焼土は、ともに、5cm程の厚さで、全体にかたくしまりがある。浮石粒を若干混入している。同時に使用していたか否かは、不明である。この炉のほかに、2箇所で同規模の焼土が検出されたが、本住居跡に伴うものではない。

〔堆積土〕 8層に分層される。黒褐色土を基調としており、第1・2層には第1号住居跡と同様に、降下火山灰の浮石及び灰をレンズ状に堆積している。概ね、ブロック状ではあるが連続して確認されている。この浮石層からは焼土が検出された。全体に、中振浮石及び南部浮石を混入しており、下部は人為的堆積の可能性も考えられる。

〔出土遺物〕 確認面から床面まで多くの遺物が出土した。降下火山灰の上面には、第1号住居跡と同様に、弥生時代後期の念仏間式の土器が出土している。

土器は、弥生時代の土器を主体としているが、覆土中から縄文時代後期の土器も出土している。また、床面近くから出土の土器は、縄文時代晚期と弥生時代後半のものである。

石器は、剝片石器が石鏃7点・石槍1点・石錐2点・不定形石器9点・楔形石器1点で、第図とは床面からの出土である。礫石器では、石錘1点・スリ石3点・凹石1点・台石4点で、台石は床面からの出土である。これらの石器のほかに剝片及び小礫が出土している。

〔遺構の時期〕 出土土器から、縄文時代晩期末葉？と推定される。 (白鳥 文雄)

第5号竪穴住居生跡 (第24・29図)

〔位置と確認〕 F・G-16・17グリッドに位置する。第II層下部において、遺物の密集部及び黒褐色土の範囲として確認した。耕作による削平のため南西側部分は確認できなかった。

〔重複〕 なし。

〔規模と形状〕 確認部分での最大長は、360cmである。深さは16cmである。残存部からは、円形を呈するものと推察される。

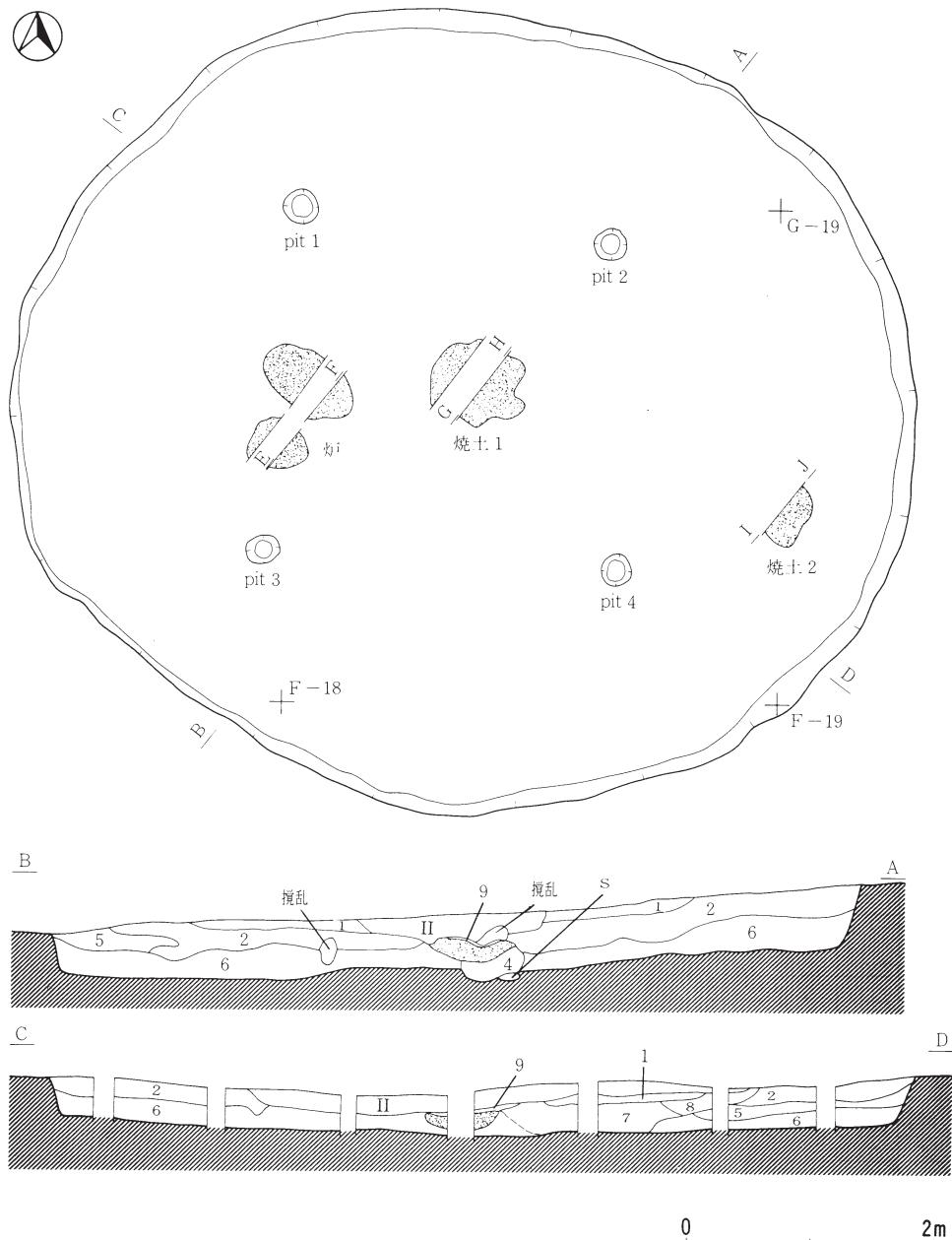
〔壁〕 第IV層を壁としており、しまりに欠ける。立ち上がりは、概ね垂直である。

〔床面〕 第IV層を床面としており、緩やかな起伏が認められる。貼り床面であるが、部分的に確認できただけである。また、図面上の点線の範囲は、他の第IV層よりもしまりが強い部分である。

〔柱穴・ピット〕 確認できなかった。

〔炉〕 確認できなかった。ただ、南東端に長径70cm、短径22cmの長楕円形の焼土が検出された。位置的な問題から、炉とは断定できない。

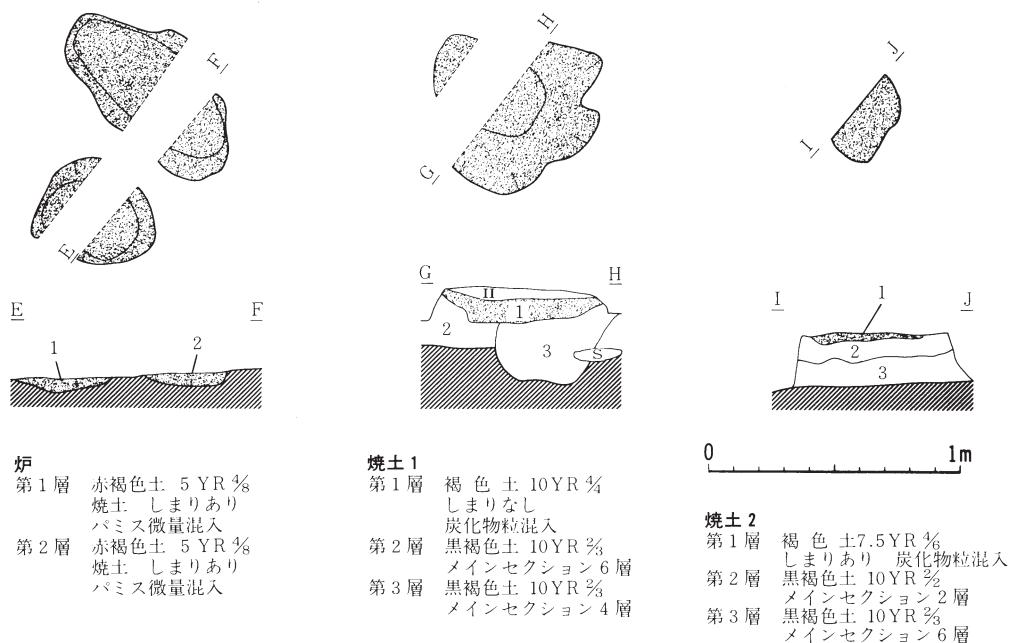
〔堆積土〕 黒褐色土を1層だけ確認した。炭化物粒を微量混入し、中振浮石及び白色の浮



第4号竪穴住居跡

- | | | |
|-----|----------------|------------------------|
| 第1層 | 黒褐色土 10YR 2/3 | やわらかい・炭化物粒混入 |
| 第2層 | 黒褐色土 10YR 2/2 | しまりあり・十和田b・炭化物混入 |
| 第3層 | 赤褐色土 7.5YR 2/5 | しまりあり・バミス混入・焼土 |
| 第4層 | 黒褐色土 10YR 2/3 | バミス混入・焼土粒混入 |
| 第5層 | 暗褐色土 10YR 3/3 | しまりあり・炭化物粒混入・黒褐色土との混合土 |
| 第6層 | 黒褐色土 10YR 2/3 | しまりあり・炭化物粒混入 |
| 第7層 | 黒褐色土 10YR 2/3 | しまりあり・暗褐色土との混合土 |
| 第8層 | 黒褐色土 10YR 2/2 | しまりあり・浮石微量混入 |

第22図 第4号竪穴住居跡



第23図 第4号竪穴住居跡

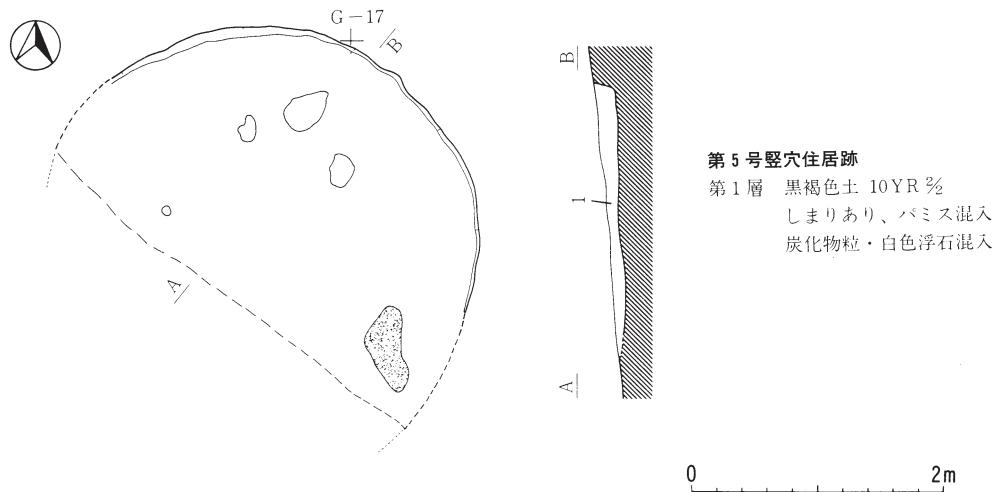
石を混入する。全体にしまりが認められる。

〔出土遺物〕 遺物の出土量は少量である。

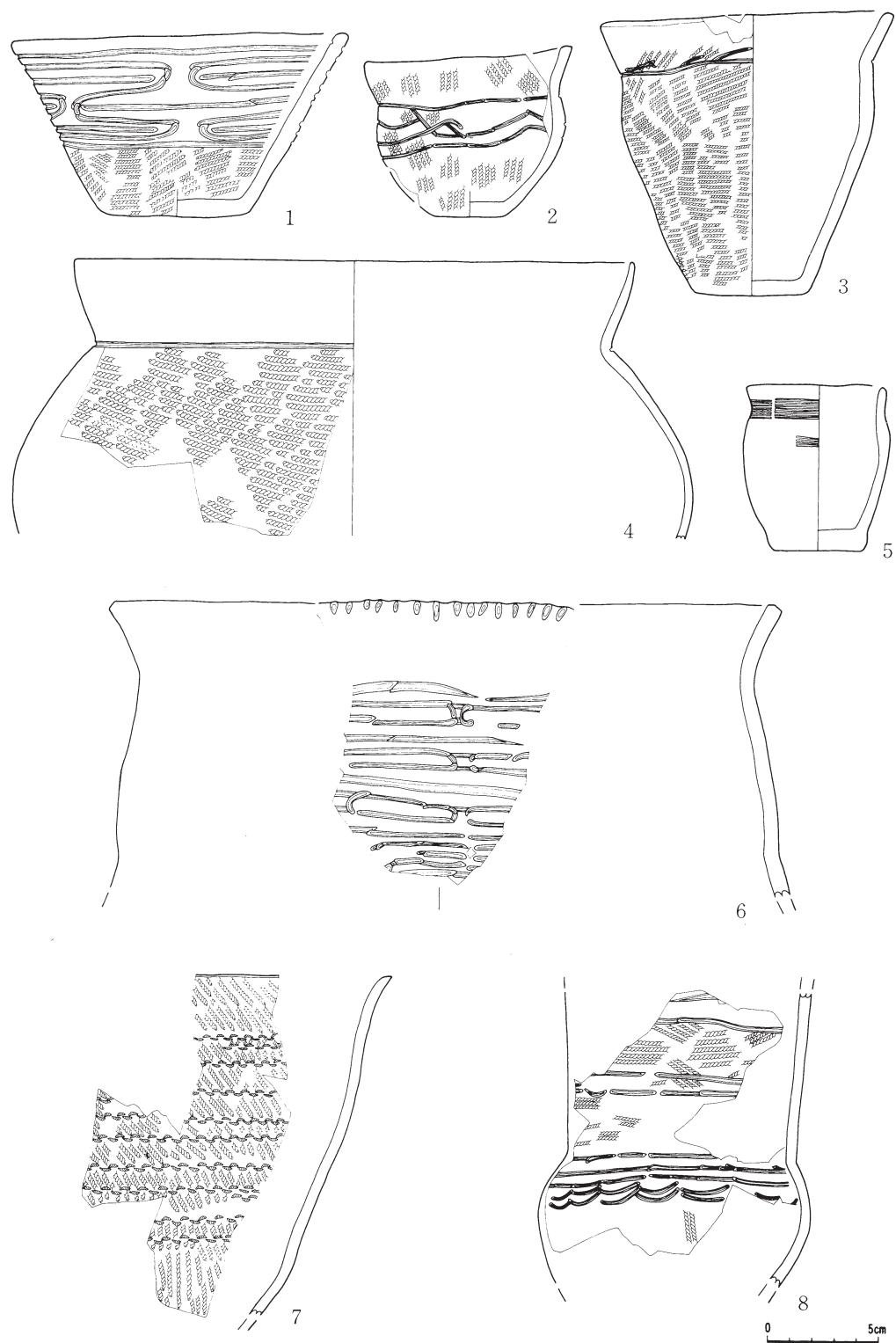
土器は、縄文時代後期の土器と弥生時代の土器が出土している。石器の出土は認められなかつたが、剥片及び小礫は若干量出土している。

〔遺構の時期〕 出土土器から、縄文時代後期以降と推定される。

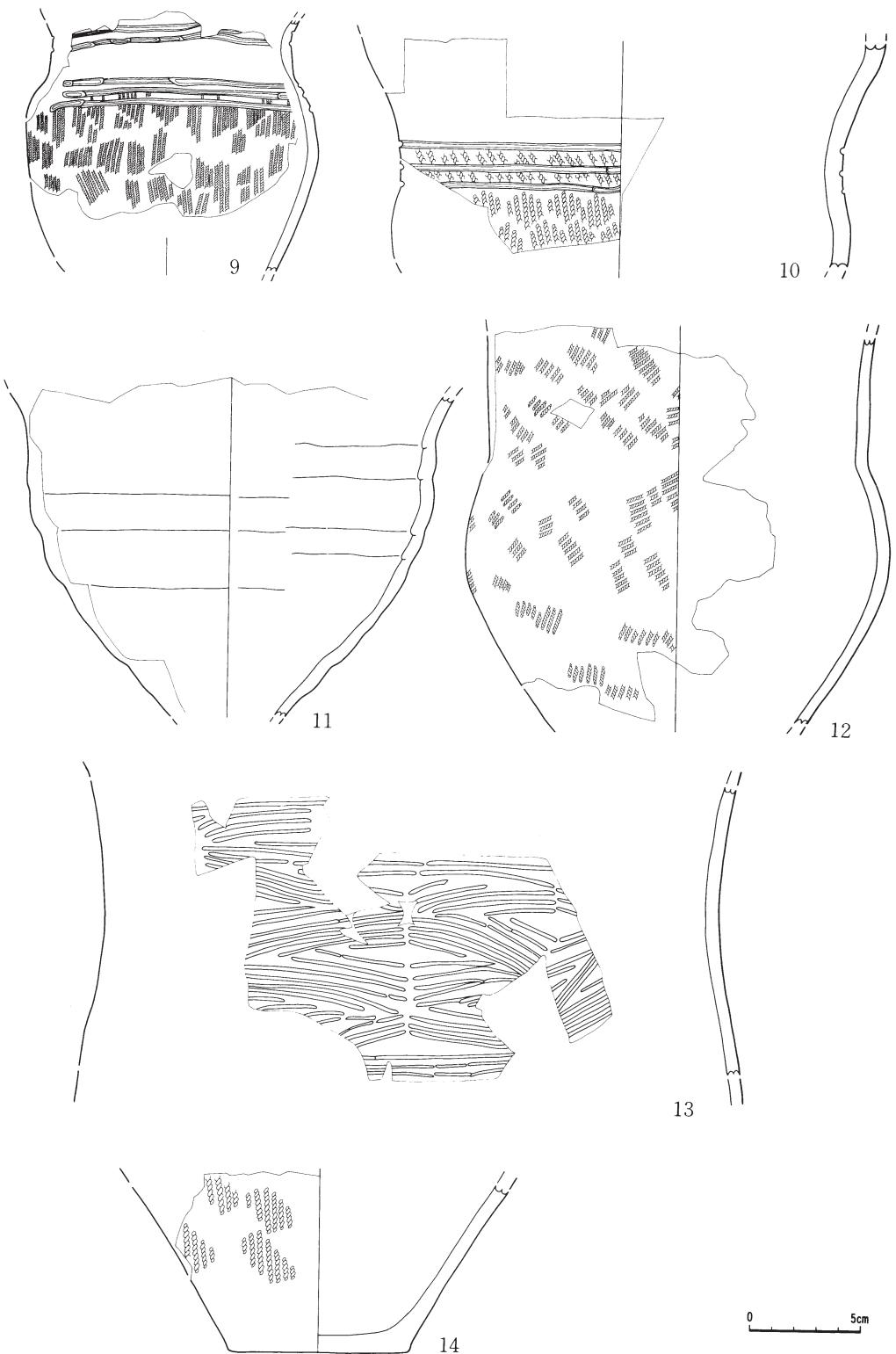
(白鳥 文雄)



第24図 第5号竪穴住居跡

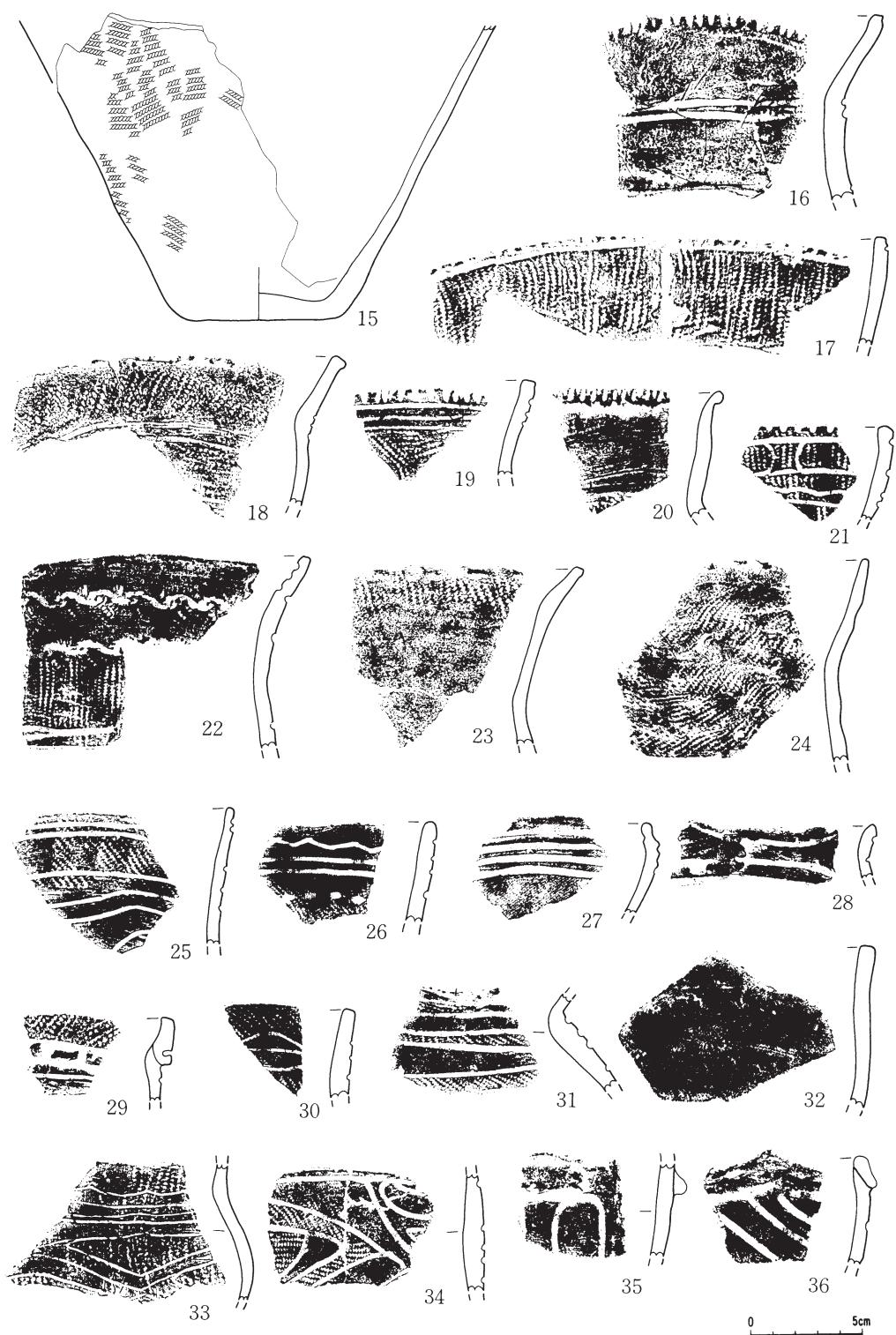


第25図 第4号竪穴住居跡出土土器－1

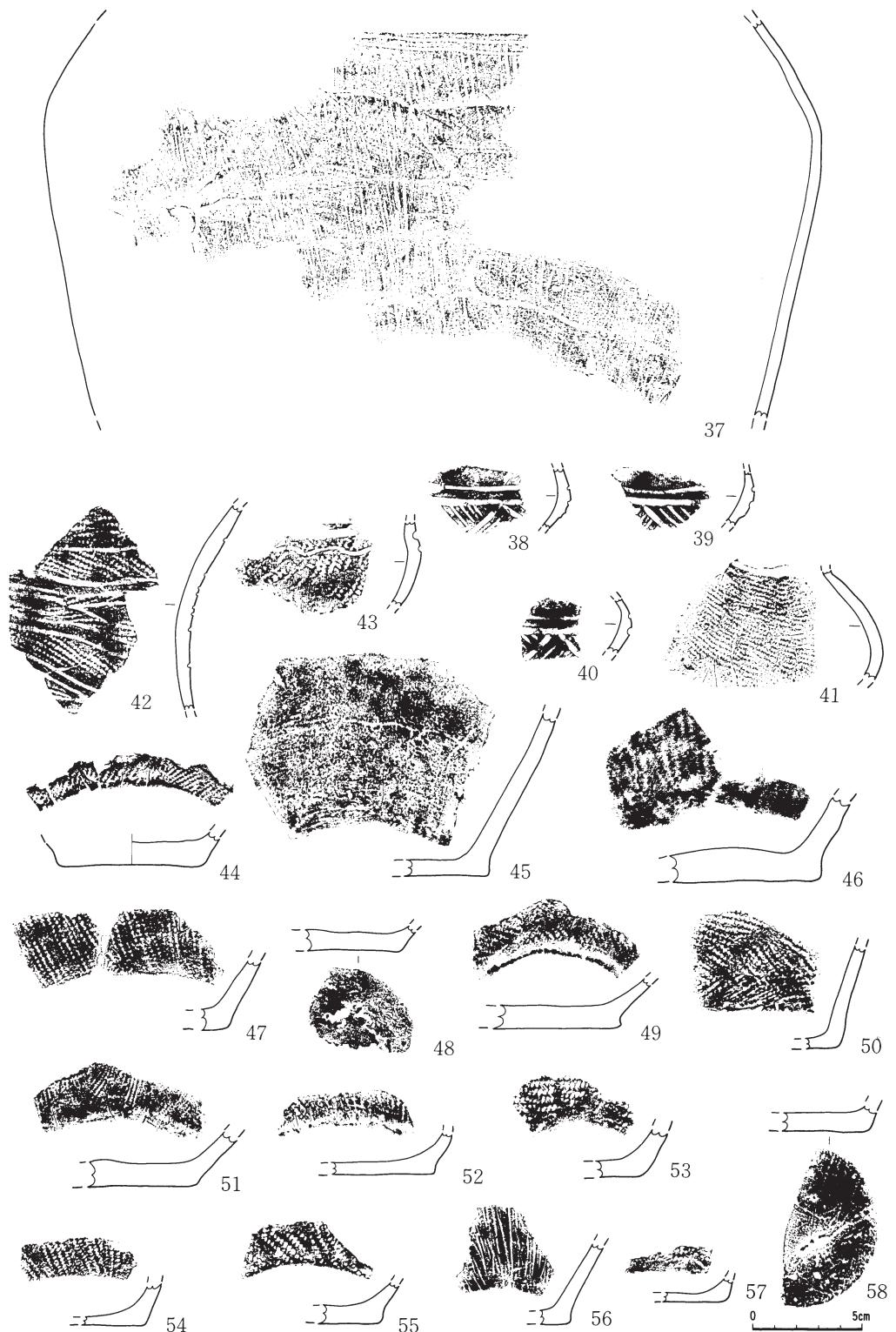


第26図 第4号竪穴住居跡出土土器-2

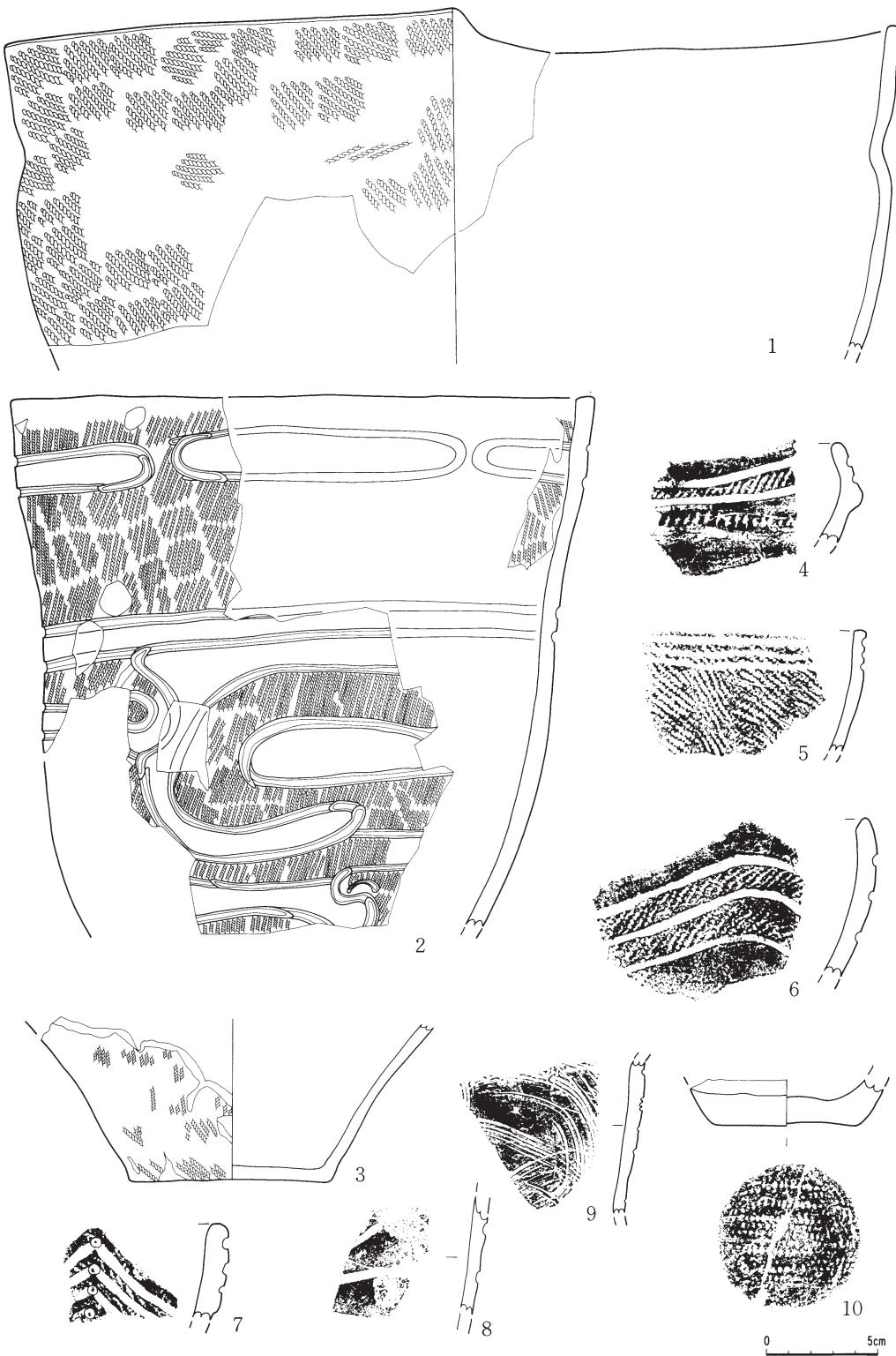
0 5cm



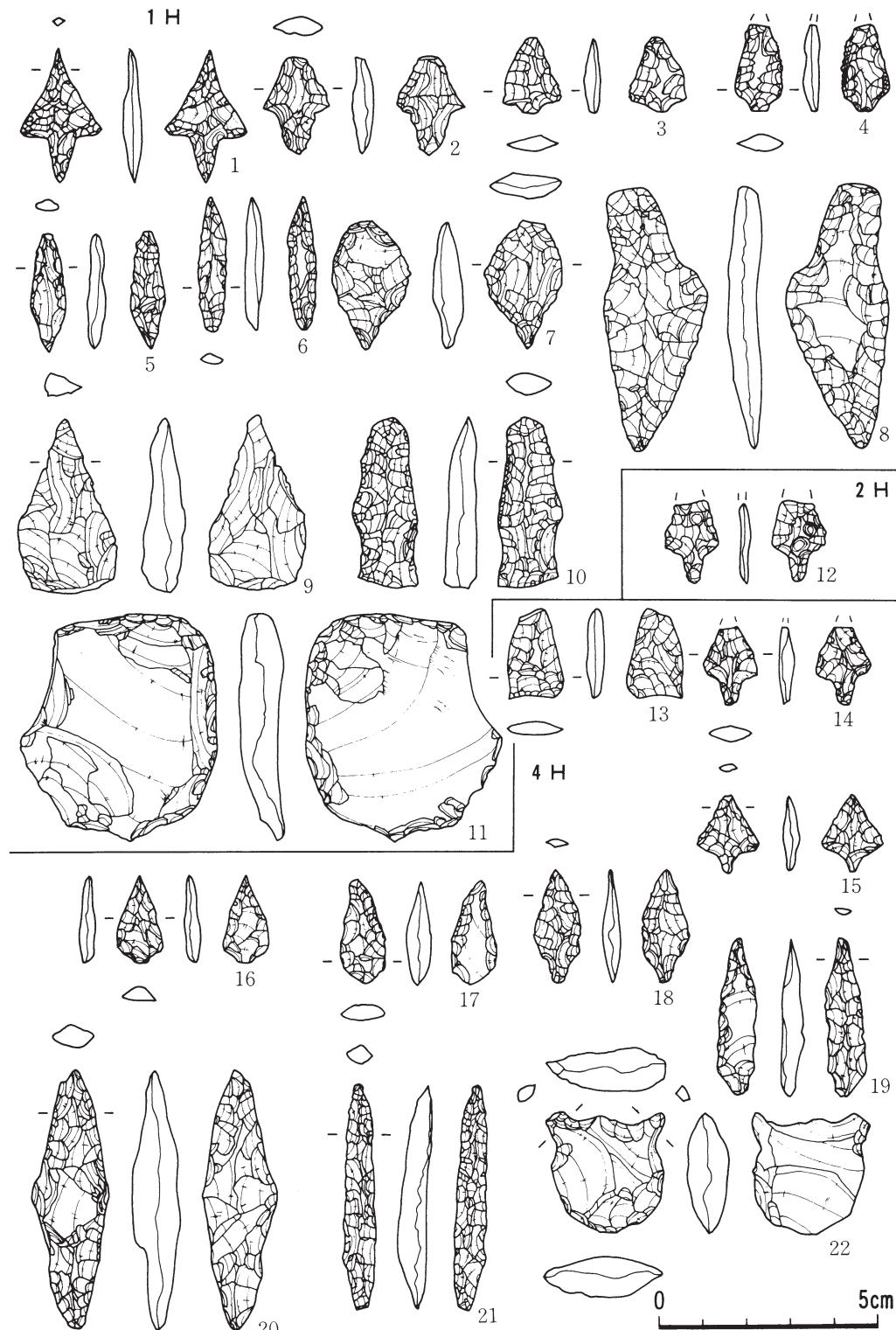
第27図 第4号竪穴住居跡出土土器－3



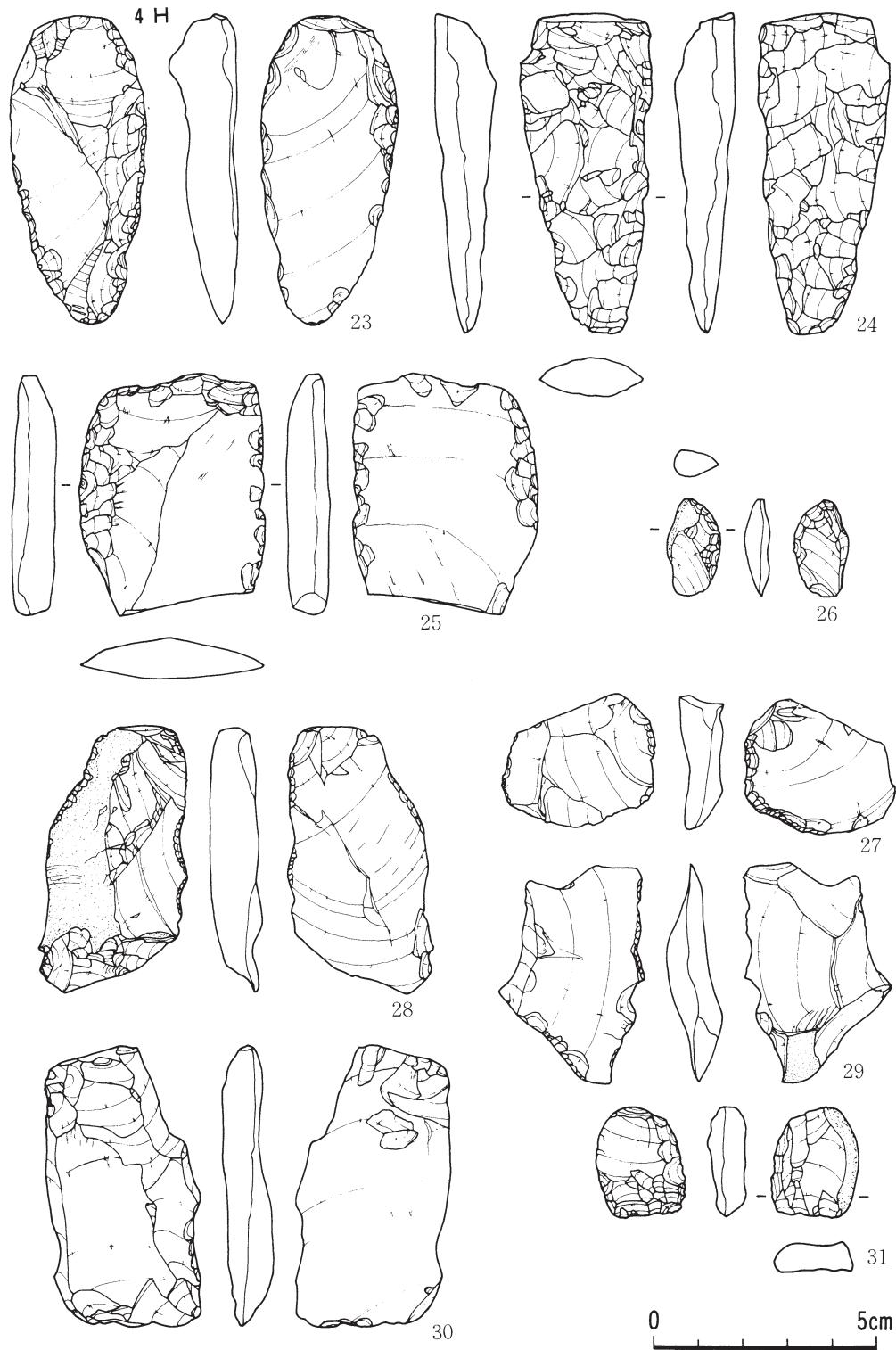
第28図 第4号竪穴住居跡出土土器-4



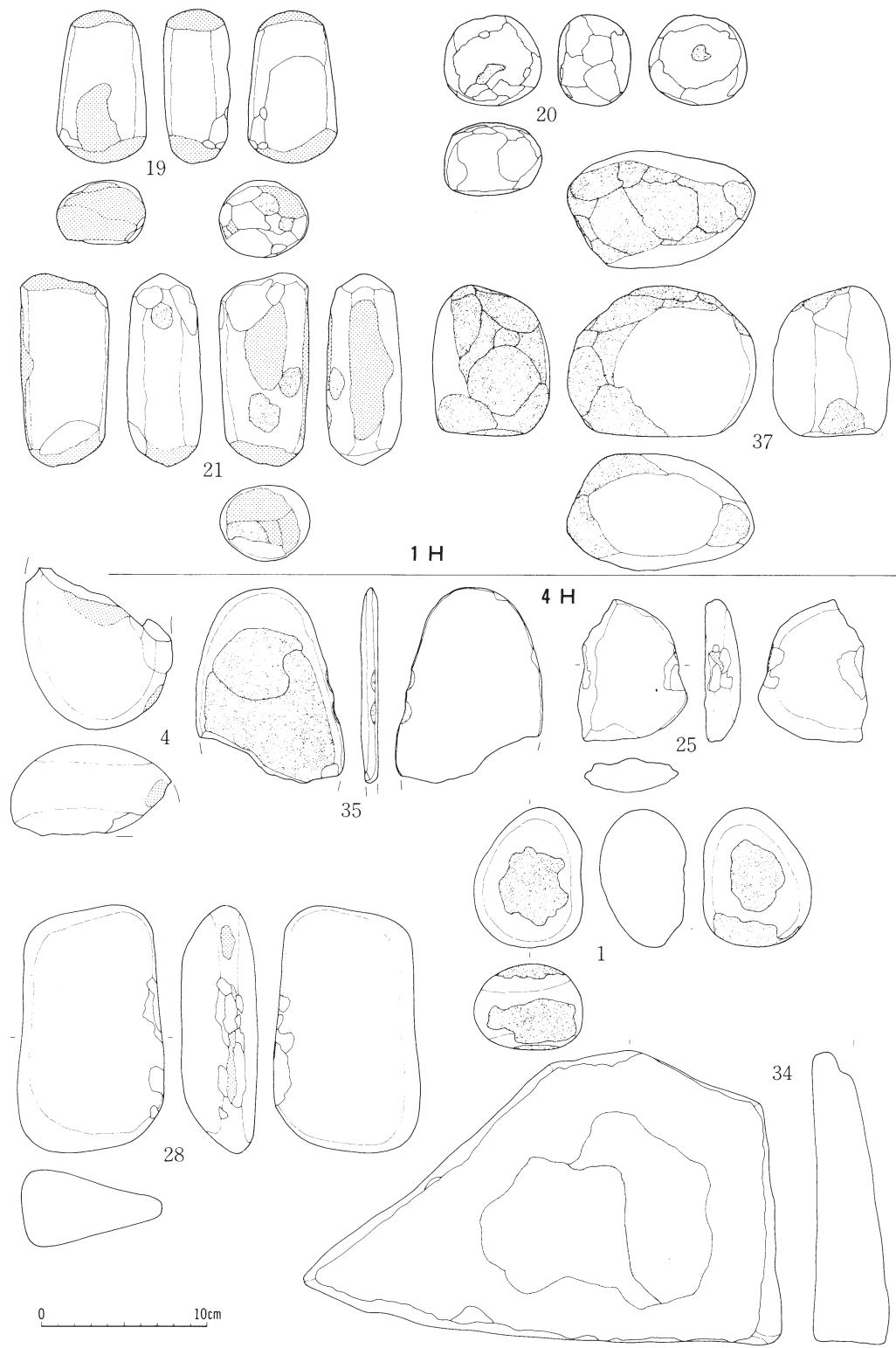
第29図 第5号竪穴住居跡出土土器



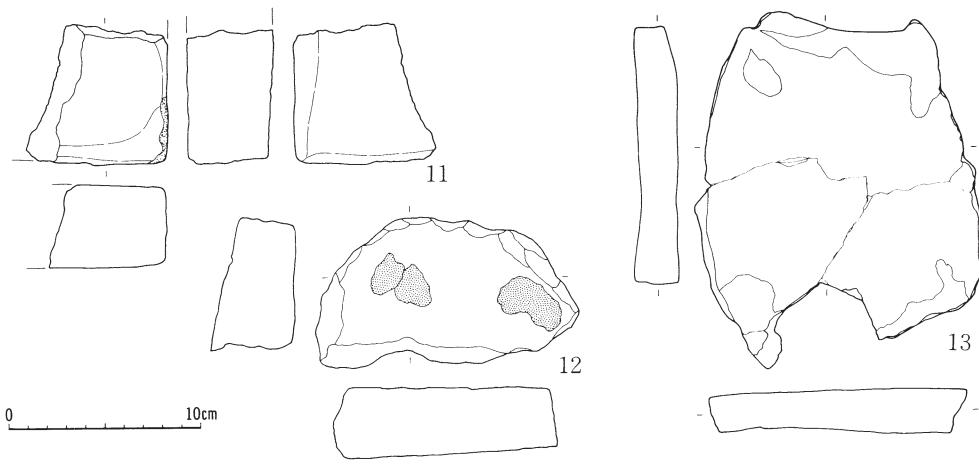
第30図 遺構内出土石器(第1・2・4号住居跡)



第31図 遺構内出土石器(第4号住居跡)



第32図 遺構内出土石器－3



第33図 遺構内出土石器

2 土 壤

6基検出した。第5・6号土壙は欠番である。

第1号土壙 (第34・35図)

〔位置と確認〕 H-14・15グリッドに位置する。第IV層で、径100cm程の黒褐色土の広がりとして確認した。西壁の一部が耕作による攪乱を受けている。

〔重複〕 なし。

〔規模と形状〕 開口面で110cm×108cm、底面で120cm×114cm、深さ64cmである。平面形状は円形であり、断面形状は筒状を呈する。

〔壁〕 第IV～V層を壁とし、ほぼ垂直に立ち上がる。全体に堅緻である。

〔底面〕 第V層を底面とし、平坦で、堅緻である。

〔堆積土〕 5層に分層される。黒色土を基調とし、全体に中摺浮石及び南部浮石が混入している。全体にかたくしまっている。人為的堆積と考えられる。

〔遺物〕 覆土中より土器片が数片出土した。

第2号土壙 (第34・35図)

〔位置と確認〕 F-12グリッドに位置する。第IV層で、径100cm程の暗茶褐色土の広がりとして確認した。南西壁及び遺構の一部分は、耕作による攪乱を受けている。

〔重複〕 なし。

〔規模と形状〕 開口面で128cm×102cm、底面で148cm×140cm、深さ85cmである。平面形は不整な円形であり、断面形状はフラスコ状を呈する。

〔壁〕 第IV～V層を壁としている。上部はやや脆い。

〔底面〕 第VI層を底面とし、若干起伏は認められるが、ほぼ平坦で堅緻である。

〔堆積土〕 6層に分層される。黒褐色土を基調としており、中摺浮石及び南部浮石が混入している。全体にやわらかく、しまりがない。人為的堆積と考えられる。

〔遺物〕 覆土中より数点の土器片が出土している。

第3号土壙 (第34図)

〔位置と確認〕 F-11・12グリッドに位置する。第IV層で、径100cm程の黒褐色土の広がりとして確認した。

〔重複〕 なし。

〔規模と形状〕 開口面で101cm×59cm、底面で120cm×102cm、深さ102cmである。平面形状は東西に長い橢円形を呈し、断面形状はフラスコ状を呈する。

〔壁〕 第IV～VI層を壁とし、中位がくびれている。上部は軟質で脆い。

〔底面〕 第VI層を底面とし、若干の起伏はあるが、概ね平坦で、堅緻である。

〔堆積土〕 8層に分層される。黒褐色土を基調とし、全体に中摺浮石及び南部浮石が混入している。上部はかたくしまっているが、中位以下はやわらかくしまりがない。人為的堆積と考えられる。掘り込み面の最上部は不明であるが、第III層から掘り込まれたものと考えられる。

〔遺物〕 出土しなかった。

第4号土壙 (第34・35図)

〔位置と確認〕 G-15グリッドに位置する。第IV層で、径80cm程の黒褐色土の広がりとして確認した。遺構の西寄りは、耕作による攪乱を受けている。

〔重複〕 なし。

〔規模と形状〕 開口面で96cm×82cm、底面で78cm×67cm、深さ39cmである。平面形状は円形であり、断面形状はナベ底状を呈する。

〔壁〕 第IV～VI層を壁としている。上部はやや脆い。

〔底面〕 第VI層を底面とし、若干起伏が認められる。

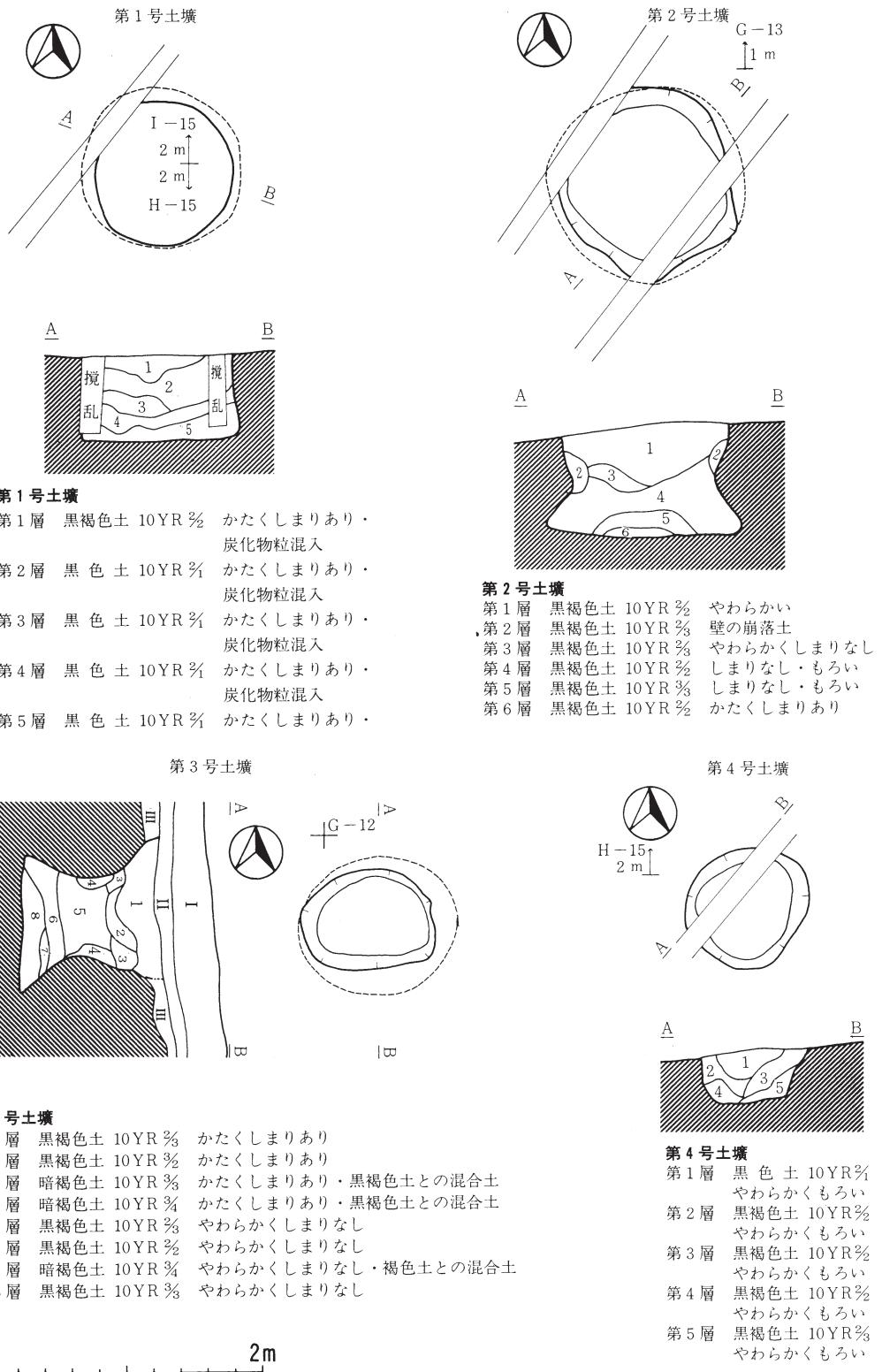
〔堆積土〕 5層に分層される。黒褐色土を基調としており、中摺浮石及び南部浮石が混入している。全体に脆く、しまりがない。人為的堆積と考えられる。

〔遺物〕 土器片が数片出土した。

第7号土壙 (第36図)

〔位置と確認〕 E・F-18グリッドに位置する。第4号住居跡の精査中に100cm程の黒褐色土の広がりとして確認した。遺構の大部分は第4号住居跡の範囲内に存在する。

〔重複〕 第4号住居跡と重複し、本土壙が古い。



第34図 第1号～第4号土壤

〔規模と形状〕 開口面で130cm×126cm、底面で137cm×120cm、深さ120cmである。平面形状は不整な円形であり、断面形状は筒状を呈する。

〔壁〕 第V～VI層を壁とし、南壁は内湾する。全体に堅緻である。

〔底面〕 第VI層を底面とし、平坦で、堅緻である。

〔堆積土〕 8層に分層される。黒褐色土を基調とし、全体に中摺浮石及び南部浮石が混入しており、最上層には炭化物粒が混入している。全体にかたくしまっている。人為的堆積と考えられる。

〔遺物〕 出土しなかった。

第8号土壙 (第36図)

〔位置と確認〕 F-18グリッドに位置する。第4号住居跡の精査中に、径約150cm程の黒褐色土の広がりとして確認した。西壁及び遺構の西側は第8号溝状ピットに切られており、不明である。

〔重複〕 第4号住居跡と重複し、本土壙が古い。また、第8号溝状ピットとも重複し、本土壙が古い。

〔規模と形状〕 開口面で最大径162cm、底面で133cm、深さ78cmである。平面形は円形であると考えられる。断面形状は筒状を呈する。

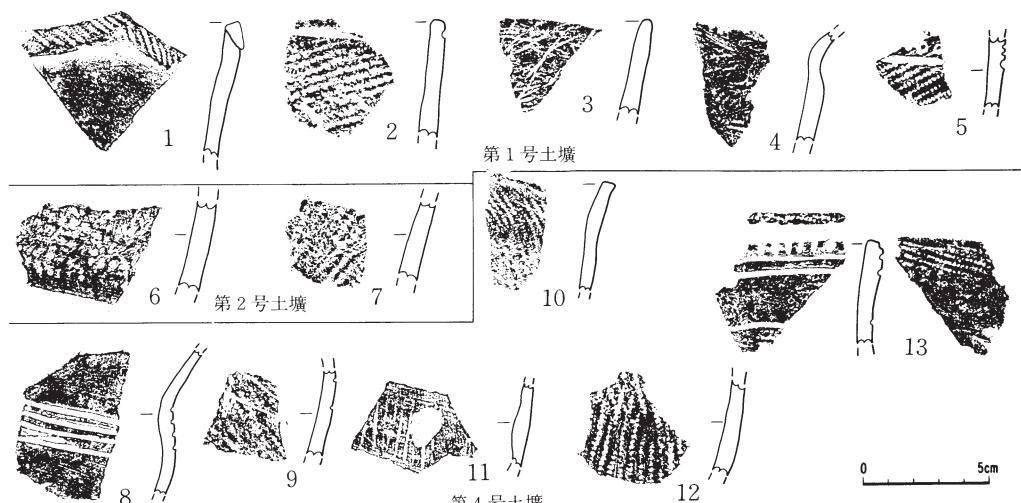
〔壁〕 第V～VI層を壁としている。上部はやや脆い。

〔底面〕 第VI層を底面とし、若干起伏は認められるが、ほぼ平坦で堅緻である。

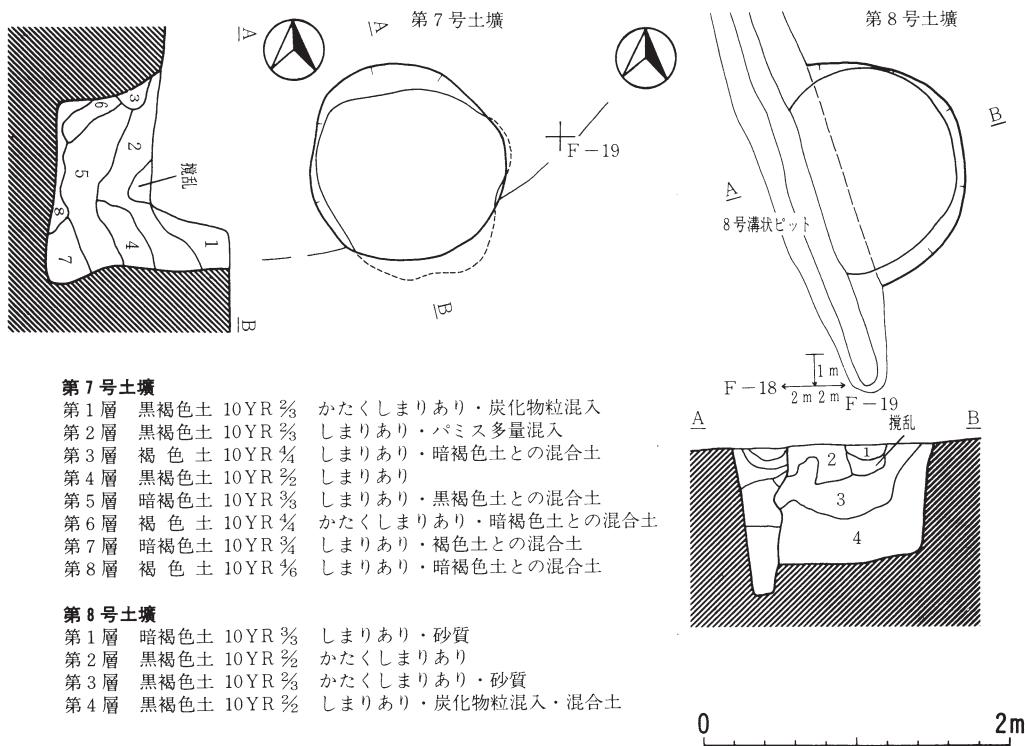
〔堆積土〕 4層に分層される。黒褐色土を基調としており、中摺浮石及び南部浮石が混入している。全体にかたくしまりがある。人為的堆積と考えられる。

〔遺物〕 出土しなかった。

(白鳥 文雄)



第35図 第1・2・4号土壙出土土器



第36図 第7・8号土壤

3 溝状ピット

第1号溝状ピット (第37図)

[位置と確認] F-49・50グリッドに位置し、第IV層で黒色土の広がりとして確認した。

[重複] なし。

[規模と形状] 開口面は353cm×45cm、底面は337cm×10cmの長楕円形を呈する。深さは58～65cmである。短軸断面上では細長いV字状を呈している。長軸方位はN-80°-Wである。

[壁] 第VI・VII層を壁としており、上部はやや脆いものの、下部は堅緻である。

[底面] 第VII層を底面としており、西側に傾斜している。

[堆積土] 6層に分層できた。黒褐色土を基調としており、全体にしまりが弱くやわらかい。

[遺構の時期] 構築時の掘り込み最上部は不明であるが、確認時には、第IV層を掘り込んでいたことが明確であることから中摺浮石の降下時期よりは新しい。

第2号溝状ピット (第37図)

[位置と確認] F・G-30・31グリッドに位置し、第VI層で黒色土の広がりとして確認した

[重複] なし。

〔規模と形状〕 開口面は365cm×67cm、底面は365cm×16cmの長楕円形を呈する。深さは155～160cmである。短軸断面上では細長いV字状を呈している。長軸方位はN-27°-Wである。

〔壁〕 第VI・VII層を壁としており、概ね堅緻である。

〔底面〕 第VII層を底面としており、南東側に傾斜している。

〔堆積土〕 6層に分層できた。黒色土及び黒褐色土を基調としており、上部はしまりは認められるが、全体にしまりがなくやわらかい。中振浮石及び南部浮石が粒子状に混入する。

〔遺構の時期〕 第IV層を掘り込んでいることから、中振浮石降下時期よりは新しいものと考えられる。

第3号溝状ピット（第37図）

〔位置と確認〕 G・H-27グリッドに位置し、第IV層で黒色土の広がりとして確認した。

〔重複〕 なし。

〔規模と形状〕 開口面は382cm×65cm、底面は367cm×11cmの長楕円形を呈する。深さは80～150cmである。短軸断面上では細長いV字状を呈しているが、中位から極度に幅が狭くなる。長軸方位はN-3°-Wである。

〔壁〕 第V～VII層を壁としており、上部はやや脆いものの、下部は堅緻である。

〔底面〕 第VII層を底面としており、南側に傾斜している。

〔堆積土〕 10層に分層できた。黒褐色土を基調としており、最上部はしまりはあるが、他の層は全体にしまりがなくやわらかい。最下層は地山の再堆積層である。

〔遺構の時期〕 第IV層を掘り込んでいることから、中振浮石降下時期よりは新しいものと考えられる。

第4号溝状ピット（第38図）

〔位置と確認〕 F・G-21・22グリッドに位置し、第IV層で黒褐色土の範囲として確認した

〔重複〕 なし。

〔規模と形状〕 開口面は338cm×53cm、底面は364cm×10cmの長楕円形を呈する。深さは110～130cmである。短軸断面上では細長いV字状を呈している。長軸方位はN-62°-Eである。

〔壁〕 第V～VII層を壁としており、上部はやや脆いものの、下部は堅緻である。

〔底面〕 第VII層を底面としており、南西側に傾斜している。

〔堆積土〕 5層に分層できた。黒褐色土を基調としており、上部はしまりはあるが、他の層はしまりが弱くやわらかい。

〔遺構の時期〕 第IV層を掘り込んでいることから、中振浮石降下時期よりは新しいものと考えられる。

第5号溝状ピット (第38図)

〔位置と確認〕 G・H-12グリッドに位置し、第VI層で黒褐色土の広がりとして確認した。

〔重複〕 なし。第6号土壙と近接している。

〔規模と形状〕 開口面は410cm×60cmで、底面は434cm×15cmの長楕円形を呈する。深さは120～125cmである。短軸断面上では細長いY字状を呈している。長軸方位はN-23°-Wである。

〔壁〕 第V～VII層を壁としており、概ね堅緻であるが、上部は脆い。

〔底面〕 第VII層を底面としており、南西側に傾斜している。

〔堆積土〕 6層に分層できた。黒褐色土を基調としており、上部はしまりは認められるが、全体にしまりがなくやわらかい。中振浮石及び南部浮石が混入する。

〔遺構の時期〕 第IV層を掘り込んでいることから、中振浮石降下時期よりは新しいものと考えられる。

第6号溝状ピット (第38図)

〔位置と確認〕 G・H-12グリッドに位置し、第IV層で黒色土の広がりとして確認した。

〔重複〕 なし。第5号土壙と近接している。

〔規模と形状〕 開口面は376cm×106cmで、底面は383cm×12cmの長楕円形を呈する。深さは130～140cmである。短軸断面上では全体にY字状を呈しているが、開口面から中位にかけては非常に幅広である。中位以下は他の溝状ピットとほぼ同様の規模である。長軸方位はN-10°-Eである。

〔壁〕 第V～VII層を壁としており、概ね堅緻であるが、上部はしまりが弱く脆い。

〔底面〕 第VII層を底面としており、ほぼ平坦である。

〔堆積土〕 10層に分層できた。黒褐色土を基調としており、最上部はしまりはあるが、他の層は全体にしまりがなくやわらかい。中振浮石及び南部浮石が混入している。

〔遺構の時期〕 第IV層を掘り込んでいることから、中振浮石降下時期よりは新しいものと考えられる。

第7号溝状ピット (第39図)

〔位置と確認〕 E-15グリッドに位置し、第IV層で黒色土の広がりとして確認した。遺構の大部分は、調査区外に存在する。

〔重複〕 なし。

〔規模と形状〕 ごく一部分だけの検出であることから、規模は不明である。短軸断面上では幅広のV字状を呈している。

〔壁〕 第V～VII層を壁としており、上部はやや脆いものの、下部は堅緻である。

〔底面〕 第VII層を底面としている。

〔堆積土〕 4層に分層できた。黒褐色土を基調としており、上部はしまりはあるが、他の層

はしまりが弱くやわらかい。標準土層の第Ⅳ層を掘り込んでいるが掘り込みの最上面までは確認できなかった。また、最上部には十和田b降下火山灰を含む第Ⅱ層が堆積している。

〔遺構の時期〕 第Ⅳ層を掘り込んでいることから、中振浮石降下時期よりは新しく、第Ⅱ層よりは古いものと考えられる。

第8号溝状ピット（第39図）

〔位置と確認〕 F-18グリッドに位置し、第4号住居跡の床面精査時に黒褐色土の広がりとして確認した。

〔重複〕 第4号住居跡と重複し、本溝状ピットが古い。また、第8号土壙とも重複し、本遺構が新しい。

〔規模と形状〕 開口面は357cm×53cmで、底面は358cm×15cmの長楕円形を呈する。深さは90～98cmである。短軸断面上では細長いV字状を呈している。長軸方位はN-17°-Wである

〔壁〕 第V～VII層を壁としており、概ね堅緻であるが、上部は脆い。東壁の一部は第8号土壙の覆土を壁としている。

〔底面〕 第VII層を底面としており、南東側にやや傾斜している。概ね平坦である。

〔堆積土〕 6層に分層できた。黒褐色土を基調としており、全体にややしまりが認められる。中振浮石及び南部浮石が混入する。

〔遺構の時期〕 第4号住居跡の時期よりは古いものと考えられる。また、第8号土壙より新しいことから、該遺構の存在時期が特定できるものと考えられたが、8号土壙からは遺物が出土しなかったため、上限は不明である。

第9号溝状ピット（第39図）

〔位置と確認〕 E・F-22グリッドに位置し、第1号住居跡の床面精査時に黒褐色土の広がりとして確認した。南側が調査区外であることから、全体像は不明である。

〔重複〕 第1号住居跡と重複し、本溝状ピットが古い。

〔規模と形状〕 検出した範囲での規模は、開口面は250cm×60cmで、底面は240cm×12cmである。深さは100～115cmである。短軸断面上では全体にV字状を呈している。長軸方位はN-14°-Wである。

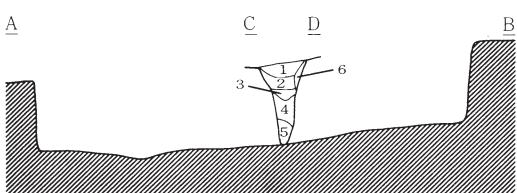
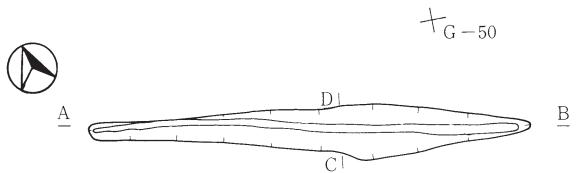
〔壁〕 第V～VII層を壁としており、概ね堅緻であるが、上部はしまりが弱く脆い。

〔底面〕 第VII層を底面としており、南東にやや傾斜している。

〔堆積土〕 8層に分層できた。黒褐色土を基調としており、全体にしまりがなくやわらかい。中振浮石及び南部浮石が混入している。

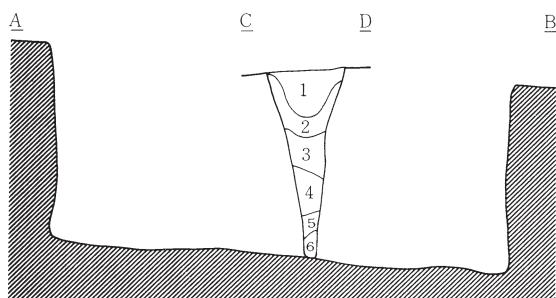
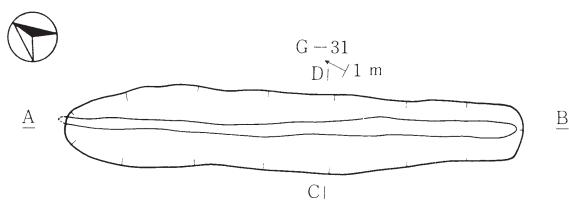
〔遺構の時期〕 第1号住居跡の時期よりは古い。

〔出土遺物〕 繩文時代後期と考えられる口縁部片が1点覆土上部から出土している。



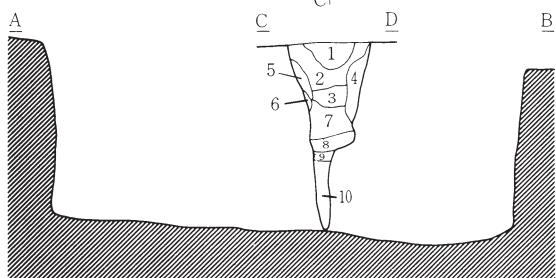
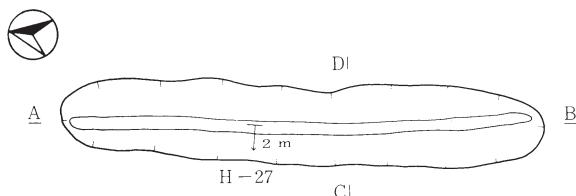
第1号溝状ピット

第1層	黒色土	10YR 2/3
第2層	黒褐色土	10YR 2/3
第3層	黒褐色土	10YR 2/3
第4層	暗褐色土	10YR 3/4
第5層	黒褐色土	10YR 2/3
第6層	暗褐色土	10YR 2/3



第2号溝状ピット

第1層	黒褐色土	10YR 2/3
第2層	黒褐色土	10YR 2/3
第3層	黒色土	10YR 2/3
第4層	黒褐色土	10YR 2/3
第5層	黒褐色土	10YR 2/3
第6層	黒色土	10YR 2/3

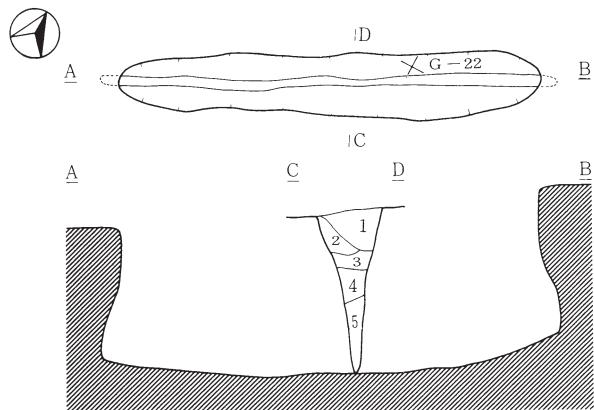


第3号溝状ピット

第1層	黒色土	10YR 2/3
第2層	黒褐色土	10YR 2/3
第3層	黒褐色土	10YR 2/3
第4層	黒褐色土	10YR 2/3
第5層	黒褐色土	10YR 2/3
第6層	暗褐色土	10YR 3/4
第7層	黒褐色土	10YR 2/3
第8層	暗褐色土	10YR 3/4
第9層	暗褐色土	10YR 2/3
第10層	にふ黄褐色土	10YR 4/3

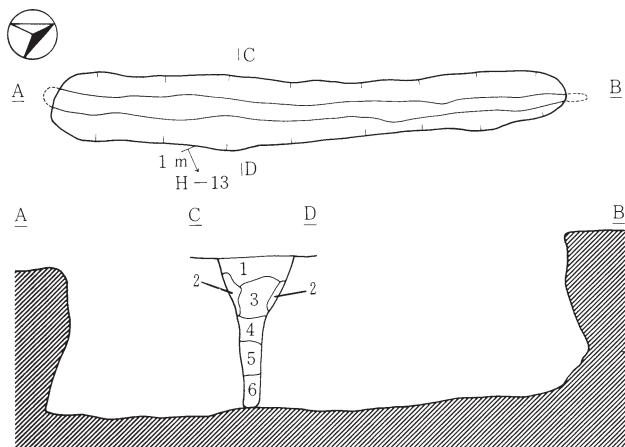
0 2m

第37図 第1号～第3号溝状ピット



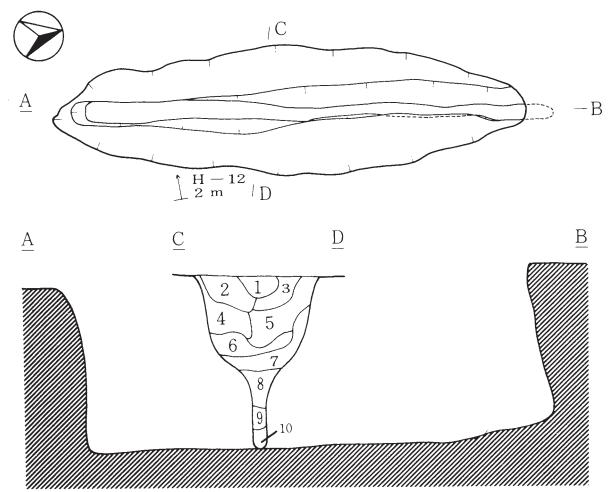
第4号溝状ピット

第1層 黒褐色土 10YR ½
第2層 黒色土 10YR ¾
第3層 黒褐色土 10YR ½
第4層 黒色土 10YR ¾
第5層 黒褐色土 10YR ½



第5号溝状ピット

第1層 黒褐色土 10YR ½
第2層 暗褐色土 10YR ¾
第3層 黑褐色土 10YR ½
第4層 褐色土 10YR ¾
第5層 暗褐色土 10YR ¾
第6層 暗褐色土 10YR ½

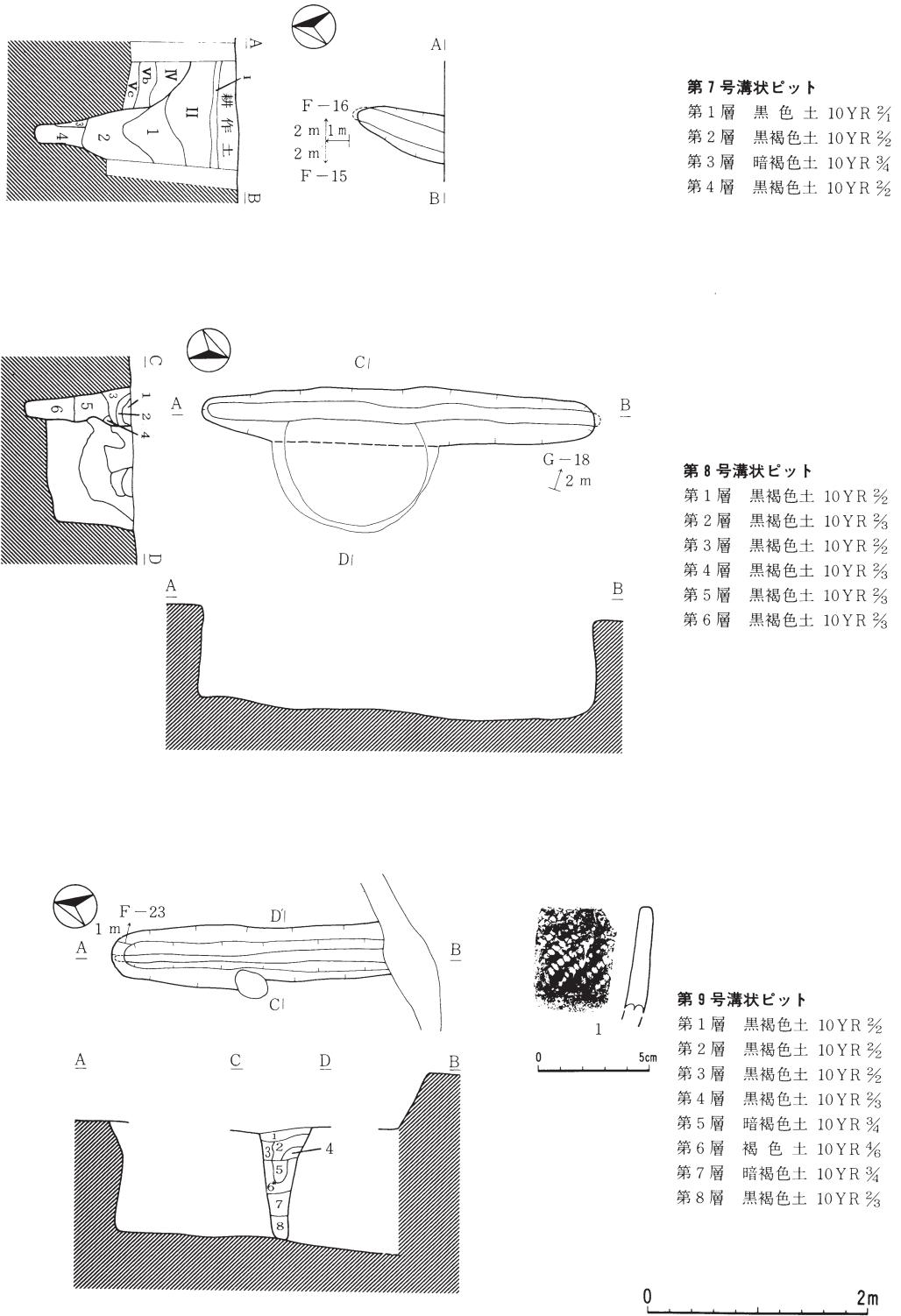


第6号溝状ピット

第1層 黑褐色土 10YR ½
第2層 黑褐色土 10YR ¾
第3層 暗褐色土 10YR ¾
第4層 黑褐色土 10YR ½
第5層 黑褐色土 10YR ¾
第6層 褐色土 10YR ¾
第7層 褐色土 10YR ¾
第8層 褐色土 10YR ¾
第9層 暗褐色土 10YR ¾
第10層 褐色土 10YR ¾



第38図 第4号～第6号溝状ピット



第39図 第7号～第9号溝状ピット

調査区域が、道路幅に限定されていることから、各溝状ピットの配置及び広がりは確認できなかった。検出された9基の規模や形状が類似していることから、ほぼ同時期のものと考えられる。また、確認面と他の遺構との重複関係から、該遺構の時期については、中振浮石降下時期よりも新しく、縄文時代晩期末よりは古いものと推察される。

(白鳥 文雄)

4 燃 土

4基検出した。

第1号焼土 (第40・41図)

H-13グリッドに位置する。第IV層で、径70cm程の焼土の広がりとして確認した。西側が攪乱を受けており、全体像は不明である。

残存している部分は、径70cm程で厚さは最大で10cmである。平面形状は橢円形であったと推定される。焼土は全体にしまりが認められるが、一様に赤変してはおらず、ブロック状を呈するところが多い。また、掘り込みも確認できなかったことから、地床炉等ではなく、廃棄によるものと考えられる。遺物は数点の土器片が出土しただけである(第41図-1・2)。

第2号焼土 (第40図)

G-15グリッドに位置する。遺物上げの作業中に径40cm程の焼土の広がりとして確認した。本焼土下からは土器片が出土しているが、この土器片上で火を焚いたものではない。

焼土は厚さが5cm程で、ブロック状に存在している。廃棄されたものと考えられる。

第3号焼土 (第40図)

G-14グリッドに位置する。遺物密集部において、長径60cm程の橢円形の焼土の広がりとして確認した。遺物及び焼土の存在から、住居跡の可能性もあり、精査も慎重に行ったが、住居跡の床面、壁及び柱穴等は確認できなかった。このため、焼土遺構として取り扱った。

焼土は、中央部が耕作による攪乱をうけているが、厚さ10cm程で、レンズ状である。

焼土の除去後はナベ底状のピットになったが、意識的に掘り込んだ形跡は認められず、この地点において火を焚いたものと考えられる。屋外における地床炉と推察される。

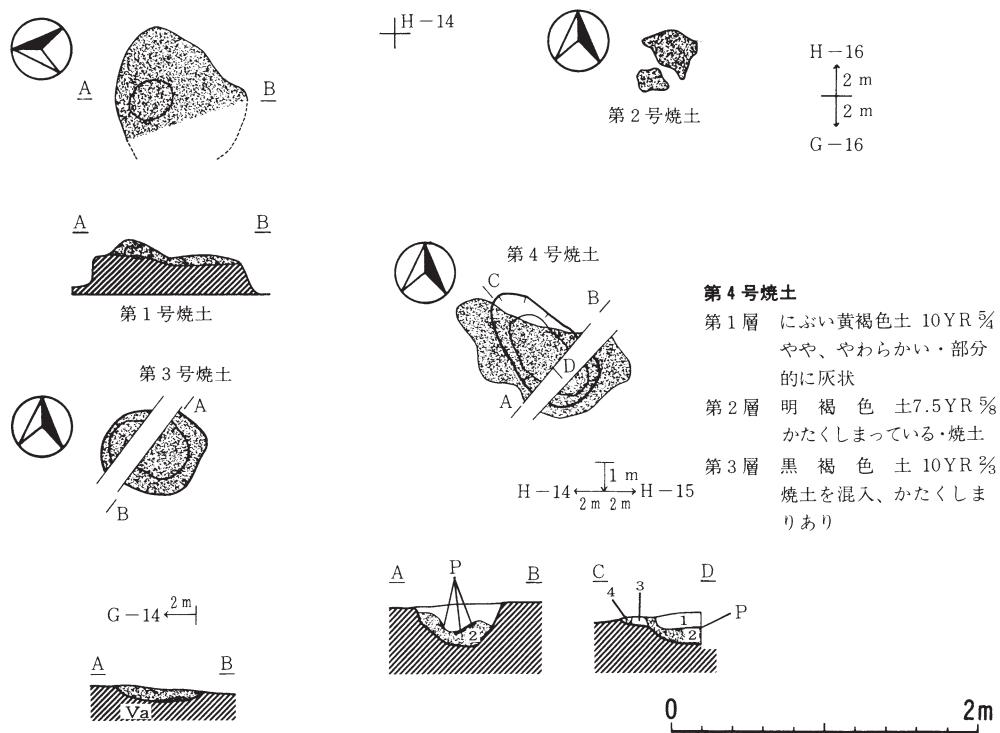
第4号焼土 (第40・41・42図)

H-14グリッドに位置する。焼土を含む暗褐色土の広がりとして確認した。長径100cm程の不整な橢円形を呈する。焼土の一部は、耕作による攪乱を受けている。

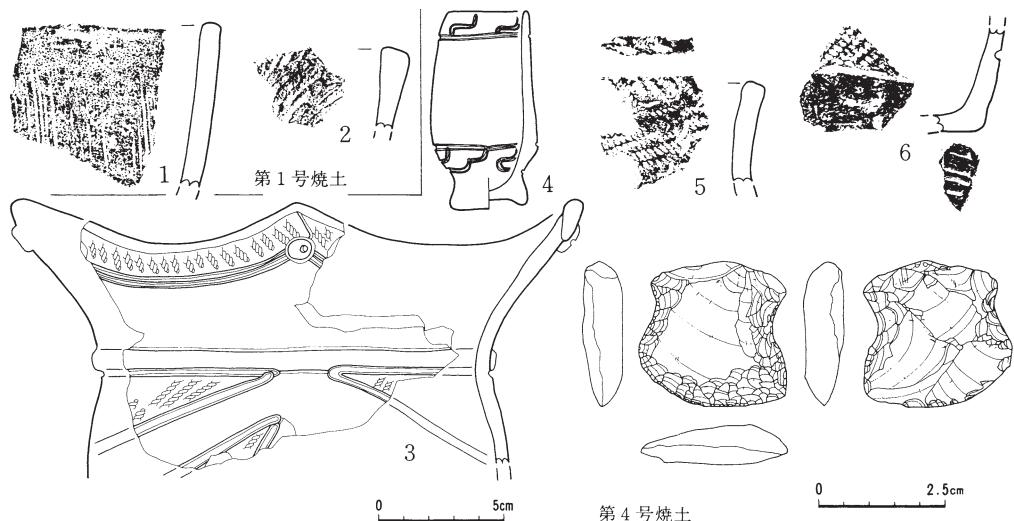
焼土はややかためで、しまっている。焼土及び焼土の直上からは土器片が出土している。

掘り込んだ形跡も確認されたことから、屋外炉と推察される。

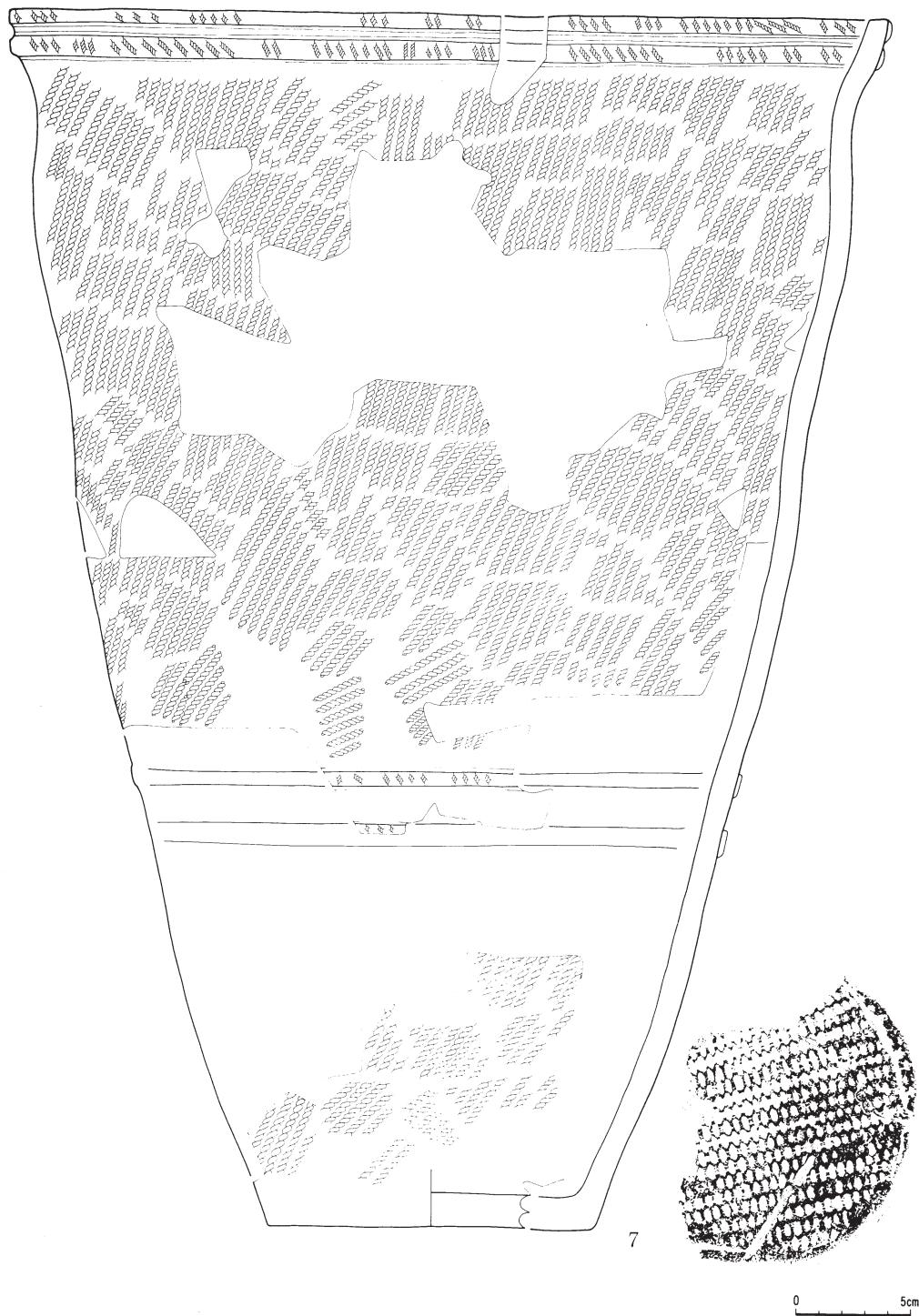
出土遺物は、縄文時代中期後半期の土器が出土しており、石器では、不定形石器が1点出土している。出土遺物から、本焼土は縄文時代中期後半期の所産と考えられる。(白鳥 文雄)



第40図 第1号～第4号焼土



第41図 焼土出土遺物 - 1



第42図 焼土出土遺物－2 (4号焼土)

第8表 遺構内出土土器観察表

番号	出土地点	層	部位	外面施文文様	内面	分類
16図-1	1号住居跡	覆	口縁～胴部	平行・重菱形・山形沈線+刺突+繩文(R L)	口唇部に繩文	VI
16図-2	1号住居跡	覆	口縁～胴部	無文		VI
17図-3	1号住居跡	台	部	沈線+繩文 赤色顔料付着		V
17図-4	1号住居跡	床直	口～肩部	沈線+繩文		V
17図-5	1号住居跡	覆	肩部～底部	繩文		VI
17図-6	1号住居跡	2	口縁～底部	沈線+繩文		VI
17図-7	1号住居跡	覆	口縁～胴部	刻目+沈線+繩文		VI
17図-8	1号住居跡	覆	胴部	無文		VI
17図-9	1号住居跡	覆	底部	無文		VI
17図-10	1号住居跡	覆	口縁部	沈線+繩文	沈線1条	V
17図-11	1号住居跡	覆	口縁部	沈線	沈線1条	V
17図-12	1号住居跡	床直	口縁部	無文+繩文		V
17図-13	1号住居跡	2	口縁部	繩文+沈線 刻み目		VI
17図-14	1号住居跡	覆	口縁部	繩文+沈線	口唇部に繩文	VI
17図-15	1号住居跡	覆	口縁部	繩文+沈線		VI
17図-16	1号住居跡	覆	底部	沈線		VI
17図-17	1号住居跡	2	口縁部	繩文	口唇部に繩文	VI
17図-18	1号住居跡	覆	肩部	重菱形文		VI
17図-19	1号住居跡	覆	胴部	繩文+沈線		VI
17図-20	1号住居跡	2		土製品?		—
17図-21	1号住居跡	覆		蓋		VI
19図-1	2号住居跡	覆	口縁部	無文・みがき		V
19図-2	2号住居跡	床	口縁～底部	繩文+平行沈線		V
19図-3	2号住居跡	覆	口縁～底部	繩文+変形工字文		VI
19図-4	2号住居跡	覆	口縁～胴部	重菱形文+刻目 口唇小波状+小孔+繩文	繩文帶	VI
19図-5	2号住居跡	床	底部～胴部	繩文		
19図-6	2号住居跡	覆	肩部	繩文+沈線		VI
19図-7	2号住居跡	床直	口縁部	繩文+沈線+刻目		VI
19図-8	2号住居跡	覆	口縁部	繩文 口唇部繩文		VI
19図-9	2号住居跡	覆	口縁部	繩文+沈線 口唇部繩文		VI
19図-10	2号住居跡	覆	口縁部	繩文+沈線 小波状口縁		V
19図-11	2号住居跡	床直	胴部	繩文+沈線+貼付		V
19図-12	2号住居跡	覆	胴部	繩文+沈線		VI
19図-13	2号住居跡	覆	胴部	繩文+沈線		VI
19図-14	2号住居跡	覆	底部	繩文		VI
19図-15	2号住居跡	覆	底部	繩文		V
19図-16	2号住居跡	覆	底部	繩文		V
19図-17	2号住居跡	覆	底部	繩文		VI
21図-1	3号住居跡	覆	口縁部	沈線 小波状口縁		
21図-2	3号住居跡	覆	口縁部	沈線		IV?
21図-3	3号住居跡	覆	胴部	繩文+沈線		VI
21図-4	3号住居跡	覆	胴部	繩文+沈線		IV?
25図-1	4号住居跡	覆	口縁～底部	沈線(変形工字文)+繩文	沈線	V
25図-2	4号住居跡	覆	口縁～底部	沈線+繩文		VI
25図-3	4号住居跡	覆	口縁～底部	沈線+繩文		VI
25図-4	4号住居跡	覆	口縁～肩部	繩文 頸部に沈線		V

25図- 5	4号住居跡	覆	口縁～底部	無文 頸部にヘラナデ		IV ?
25図- 6	4号住居跡	覆	口縁～肩部	沈線+刻目		VI
25図- 7	4号住居跡	覆	口縁部	縄文・綾絡文 口唇部に縄文		VI
25図- 8	4号住居跡	覆	口縁～胴部	縄文+沈線		VI
26図- 9	4号住居跡	床直	口縁～胴部	沈線+縄文		VI
26図- 10	4号住居跡	覆	口縁～胴部	沈線+縄文		VI
26図- 11	4号住居跡	覆	口縁～胴部	無文		VI
26図- 12	4号住居跡	床直	口縁～胴部	縄文		VI
26図- 13	4号住居跡	覆	口縁部	沈線(重菱形文)		VI
26図- 14	4号住居跡	覆	底部	縄文		VI
27図- 15	4号住居跡	覆	底部	縄文		VI
27図- 16	4号住居跡	1	口縁部	沈線・口縁部に粘土粒貼付 口唇部刻目		VI
27図- 17	4号住居跡	覆	口縁部	縄文+沈線 口唇部刻目+縄文		VI
27図- 18	4号住居跡	1	口縁部	縄文+沈線 口唇部刻目		VI
27図- 19	4号住居跡	覆	口縁部	縄文+沈線 口唇部刻目+縄文		VI
27図- 20	4号住居跡	覆	口縁部	無文・肩部縄文 口唇部に外面と上部からの刻目		VI
27図- 21	4号住居跡	1	口縁部	縄文+沈線 口唇部刻目+縄文		VI
27図- 22	4号住居跡	覆	口縁部	縄文+沈線(綾絡文) 口唇部縄文		VI
27図- 23	4号住居跡	覆	口縁部	縄文 口唇部指頭圧痕+縄文		VI
27図- 24	4号住居跡		口縁部	縄文 口唇部指頭圧痕		VI
27図- 25	4号住居跡	2	口縁部	縄文+沈線 口唇部縄文		VI
27図- 26	4号住居跡	覆	口縁部	縄文+沈線+刺突 口唇部縄文		VI
27図- 27	4号住居跡	覆	口縁部	沈線 みがき	沈線1条	V
27図- 28	4号住居跡	覆	口縁部	沈線 みがき 小波状口縁		V
27図- 29	4号住居跡	覆	口縁部	縄文+沈線+貼付		VI ?
27図- 30	4号住居跡	覆	口縁部	縄文+沈線		VI
27図- 31	4号住居跡	覆	肩部	縄文+沈線(磨消)		VI
27図- 32	4号住居跡	覆	口縁部	無文		V
27図- 33	4号住居跡	1	肩部	縄文+沈線		VI
27図- 34	4号住居跡	覆	胴部	縄文+沈線(磨消)		VI
27図- 35	4号住居跡	覆	胴部	沈線 赤色顔料付着		IV
27図- 36	4号住居跡		口縁部	沈線+貼付隆帯		IV
28図- 37	4号住居跡	覆	胴部	沈線+櫛歯状沈線		
28図- 38	4号住居跡	覆	胴部	沈線		V-3
28図- 39	4号住居跡	覆	胴部	沈線	同一個体	V-3
28図- 40	4号住居跡	覆	胴部	沈線		V-3
28図- 41	4号住居跡	覆	胴部	縄文+沈線		V
28図- 42	4号住居跡	2	口縁部?	縄文+沈線(磨消)		VI
28図- 43	4号住居跡		胴部	縄文+沈線		VI
28図- 44	4号住居跡	床直	底部	縄文		
28図- 45	4号住居跡	覆	底部	無文		
28図- 46	4号住居跡	覆	底部	縄文		
28図- 47	4号住居跡		底部	縄文		
28図- 48	4号住居跡		底部	縄文		
28図- 49	4号住居跡	覆	底部	縄文		
28図- 50	4号住居跡	覆	底部	縄文		
28図- 51	4号住居跡	覆	底部	縄文		
28図- 52	4号住居跡		底部	縄文		

28図－53	4号住居跡		底 部	縄 文			
28図－54	4号住居跡		底 部	縄 文			
28図－55	4号住居跡	覆	底 部	縄 文			
28図－56	4号住居跡	覆	底 部	櫛歯状沈線			
28図－57	4号住居跡	覆	底 部	縄 文			
28図－58	4号住居跡	覆	底 部	木葉痕			
29図－1	5号住居跡	覆	口縁～胴部	縄 文		VI	
29図－2	5号住居跡	覆	口縁～胴部	縄文+沈線(磨消)		IV-1	
29図－3	5号住居跡	覆	底 部	縄 文			
29図－4	5号住居跡	覆	口 縁 部	縄文+沈線+隆帯+刻目 波状口縁		V	
29図－5	5号住居跡	覆	口 縁 部	縄文+沈線		V	
29図－6	5号住居跡	覆	口 縁 部	縄文+沈線(磨消) 波状口縁		IV-1	
29図－7	5号住居跡	覆	口 縁 部	縄文+沈線+円竹管刺突 波状口縁		IV-1	
29図－8	5号住居跡	覆	胴 部	沈線 赤色顔料付着			
29図－9	5号住居跡	覆	胴 部	櫛歯状沈線			
29図－10	5号住居跡	覆	底 部	網代痕			
35図－1	1号土壤	4	口 縁 部	折返し口縁部に縄文 波状口縁		IV-1	
35図－2	1号土壤	覆	胴 部	縄文+沈線			
35図－3	1号土壤	覆	口 縁 部	撚糸文			
35図－4	1号土壤	1	肩 部	縄 文			
35図－5	1号土壤	3	胴 部	縄文+円竹管刺突		VI	
35図－6	2号土壤	4	胴 部	縄 文			
35図－7	2号土壤	覆	胴 部	縄 文			
35図－8	4号土壤	2	口 縁 部	沈 線		VI	
35図－9	4号土壤	2	胴 部	縄文+沈線			
35図－10	4号土壤	2	口 縁 部	縄文+綾絡文 口唇部縄文		VI	
35図－11	4号土壤	2	胴 部	櫛歯状沈線			
35図－12	4号土壤	2	胴 部	縄 文			
35図－13	4号土壤	2	口 縁 部	沈線+刻目 口唇部縄文	帶状縄文	VI	
41図－1	1号焼土		口 縁 部	櫛歯状沈線		IV?	
41図－2	1号焼土		口 縁 部	縄文 波状口縁			
41図－3	4号焼土		口縁～胴部	磨消縄文+沈線+隆帯+粘土粒貼付 波状口縁		IV-1	
41図－4	4号焼土		口縁～底部	沈線 上底		IV	
41図－5	4号焼土		口 縁 部	縄文 口唇部縄文			
41図－6	4号焼土		底 部	縄文+沈線 底部櫛歯状沈線			
42図－7	4号焼土		口縁～底部	縄文+貼付隆帯 底部、網代痕		VII	

第2節 出土遺物

今回の調査では、土器・石器等ダンボール箱で、約20箱分出土した。

1 土 器

出土した土器は、縄文時代と弥生時代の土器である。土器は大まかに時期ごとに群別した。各群中において型式により細分した。

第Ⅰ群土器——縄文時代早期の土器

第Ⅲ群土器——縄文時代中期の土器

第Ⅴ群土器——縄文時代晚期の土器

第Ⅶ群土器——時期が不明のもの、または特定できないもの

第Ⅷ群土器——平安時代の土器

第Ⅰ群土器 (第43図-1)

縄文時代早期の土器を一括した。本群土器は、赤御堂式に比定できるものである。出土地点は第4号焼土とF-13グリッドの第Ⅲ層からで、口縁部の破片が2点だけである。口唇部には、縄による側面圧痕が強く施文されているため、うねりの小さい波状口縁を形成している。胎土には少量の小石と植物纖維が含まれている。また、器形は尖底深鉢形になるものと思われる。

第Ⅱ群土器

縄文時代前期の土器を一括した。本群土器も出土数量は極めて少量であり、口縁部の破片が2点だけであるが、次のように分類した。

1類 長七谷地Ⅲ群に比定できるもの。

2類 早稻田6類に比定できるもの。

以下、類別された土器の諸特徴について記載する。

II群 1類 長七谷地Ⅲ群に比定できるものである (第43図-2)。

本類土器は、調査区の中央西寄りH-23グリッドから出土したもので、文様は羽状縄文を施文している。内面は、工具により横位調整がなされており擦痕が残っている。口唇部は、上面を平坦に面取りしている。また、胎土には、細かい砂粒が多く含まれており、焼成は良好で硬質な破片である。

II群 2類 早稻田6類に比定できるものである (第43図-3)。

本類土器は、調査区東寄りのE-48グリッドⅣ層から出土した。口唇部は、上面が面取りされて器面外側にせり出している。口縁部には、縄による圧痕が1列施文されている。また、胎土には1類と同様に細かい砂粒が含まれ、焼成も良好で硬質な破片である。

第Ⅲ群土器

縄文時代中期の土器を一括した。出土遺物が中期の2つの時期に分かれていることから、本

第Ⅱ群土器——縄文時代前期の土器

第Ⅳ群土器——縄文時代後期の土器

第Ⅵ群土器——弥生時代の土器

群土器を2つに大別し、文様施文や器形等の諸特徴について述べる。

III群 1類 円筒上層 b式に比定できるものである（第43図-4～7）。

本類土器の特徴について、「上層 a式土器に続く b式土器は、円筒土器群の中でも装飾文様がもっとも華やかなものである（1974、村越）」。また、江坂氏は「円筒形の土器ではあるが、b式土器では撚糸を指先に弧状に張り、これを土器面に押捺して撚糸の圧痕による爪形文を施文している（1956、江坂輝弥）」。本遺跡からは、数量的には極めて少ないが上記に比定できる円筒上層 b式土器が4片出土している。出土範囲は狭く調査区西側隅のE・FラインのIII層からだけである。（7）は、貼付隆帯の間に縄による側面圧痕があり、さらにその中央に馬蹄状の圧痕が施文されている。

III群 2類 円筒上層 d式に比定できるものである（第43図-8）。

本遺跡から検出されたものは頸部の破片が1点だけである。無文の貼付隆帯が1条あり、器面には、不明瞭な縄の回転文が施文されている。

（成田 悟）

第IV群土器

縄文時代後期の土器を一括した。本群土器は弥生時代の土器に次いで出土量が多いものである。時期及び型式から細分した。

1類 後期初頭の十腰内 I式以前のもの。

2類 十腰内 I群に比定できるもの。

3類 十腰内 II群に比定できるもの。

4類 十腰内 IVまたはV群に比定できるもの。

5類 狩猟文土器

この他に、後期の可能性が高いが、胴部破片のため特定出来ないものが多数認められる。

1類 後期初頭に位置付けられるものを一括した。

器形では、深鉢形土器が多数を占める。口縁部は、山形の波状口縁のものと、平口縁のものがある。波状口縁は、4単位の波状を基本としているが、44図24は7単位の波状口縁を呈している。口縁部は折り返し口縁のによるものが多く認められる。また、大きく外反するものが多いが、25は丸みを帯びた小波状口縁で、内湾している。文様構成では、地文縄文、粘土紐の貼付、沈線、磨消縄文、ボタン状の貼付が認められる。また、ボタン状の粘土貼付後に円形の棒状工具による刺突の認められるものがある。頸部に沈線を一巡させ、これから下位に斜行する沈線によって文様帶を区画し、胴部中央には沈線による渦巻き状の文様を施文しているものが多い。内面は、念入りに研磨されたものが多く、胎土・焼成とも良好なものが多数を占める。

小型のミニチュア土器も数点出土している。後述する狩猟文土器は本類に属する。

2類 十腰内 I群に比定されるもので、1類に比べて出土量はさほど多くない。

器形では、深鉢形を基本としているが、小型のミニチュア土器も数点出土している。口縁部は、山形の小波状口縁と、平口縁のものとが認められる。文様は、地文縄文、沈線、磨消縄文によるもので、矩形を基本とするものが多い特徴が認められる。また、小型の甕棺と考えられる破片があり（46図84）、無文地に沈線による文様構成が認められるが、破片資料のため、全体がこの手法によるものかどうかは不明である。

3類 十腰内II群に比定されるもので、全体の形状を知り得るものはない。（46図86～94）主に口縁部破片だけを選別した。口縁部には鰐状突起が設けられており、把手部は無文である。文様構成では、地文縄文に沈線によって区画を行い、区画帯の一部を磨消しているものと、磨消していないものとが認められる。また、縄文帯に刺突を行ったものが認められる。46図92は他の資料とは異なり、山形の口唇部の右稜に鰐状の面を作出しているもので、器面の文様は口縁直下から区画された文様帯内を、平行沈線によって充填している。内面は、平行に工具によるみがきが行われている。胎土・焼成は良好であり、内外面ともみがき込まれているものが多い。

4類 十腰内IVまたはV群に比定されると考えられるもので、1点だけの出土である。口縁部片で、口唇部に小突起を持つ。内外面とも磨かれて無文である。胎土中には細砂粒が混入している。焼成は概ね良好である。（46図95）

5類 狩猟文土器を一括した。主に遺構外出土の破片であるが、数片は、3号住居跡及び第4号住居跡の範囲内からも出土している。

96～103は同一個体の破片であるが、全体の文様構成を知り得るまでには至らなかった。96は口縁部から底部直上まで接合できたものである。文様構成では、無文地に粘土紐の貼付によって文様を構成していく手法がとられており、粘土紐の接合部は、籠状または棒状工具によって丹念にみがき込まれている。また、器面には粘土紐の剥落した痕跡も多く認められる。器形的には壺形であるが、小型の甕棺タイプの可能性も考えられる。98は鹿を意匠したものとみられるが、角の部分の先端は欠失している。脚部は棒状工具により四脚を表現している。樹木と考えられる部分は、粘土紐が斜め下向きに貼付されている。他の破片は器面のどの位置に存在したものかは不明である。106・107はこれらと同一個体の可能性も高いが、出土地点がやや離れている。104・105は単節R Lの地文上に沈線による文様が施文されている。樹木と考えられる部分は、他のものと異なり、中途から、沈線の方向が反対に施文されている。また、沈線による文様帯の一部は縄文が磨消されている。樹木文様で、地文縄文上に沈線によって施文されたものの出土例ははじめてである。

器形及び文様構成から、1類同様の縄文時代後期初頭から前半期までの所産と考えられる。

第 V 群土器

縄文時代晚期の土器を一括した。

本群の土器は、出土量がきわめて少量である。出土地点は、遺構外よりは住居跡を中心とした遺構内からの出土が多い。また、この中のほとんどは遺構の時期決定の重要な要素となっている。

器種では、深鉢形土器、鉢、壺、台付鉢である。

深鉢形土器では、1H出土の17図12及び2H出土の19図1のように口縁部及び胴部の破片が出土しているが全体形を知り得るものはない。これらは、みがきこまれた短い口縁部を有し、肩部から斜行する縄文が施文されている。

小型のものでは、縄文と平行沈線による文様構成を持つものがほとんどである。1H出土の17図3・4、2H出土の19図2等である。

他は、小破片で全体の特徴を列記できないが、文様構成などから晚期終末期の大洞A'式に比定されると考えられる。

4H出土の25図1は略完形の鉢形土器であり、器面上部に、沈線による変形工字文が施文され下部に縄文が施文されている。工字文の頂点には、特徴となる粘土粒の貼り付けまたは沈線による区画（結節）が認められない。このことから大洞A式または、大洞A'式としての特定は困難であるが、沈線の幅及び断面から砂沢式の範疇には入らない。一応本群とし、型式は特定しないこととした。

第 VI 群土器

弥生時代の土器を一括した。

主に弥生時代の後半期のものであり、一般的な型式名では念佛間式に比定されるものと考えられる。ほとんどが破片での出土で、接合復原できたものは少数である。

本群土器は、遺構内外にわたって多く出土したが、特に、住居跡等の落ち込みから密集して出土した。出土量では、縄文時代後期の土器とともに、本遺跡の中心となる遺物である。

器種では、頸部にくびれを有する甕を基本としており、くびれの認められない深鉢形土器、鉢、壺の出土が認められる。台付鉢の出土は認められない。

甕の器形では、口縁部が上方に長く伸びるものと、短く外反するものとが認められる。

頸部は、前者がやや長めに緩やかに伸びるのに対し、後者は「く」の字状に短く折れる傾向が認められる。

口縁部は、緩やかに外反するものが多く、小型の鉢形土器においても同じような傾向が認められる。肩部は、湾曲の度合いが低く、概ね丸みを帯びているものが多く、大きく張り出したものは、小型の19図6・27図31のようにごく数点しか認められない。

底部は、小型鉢、壺においては緩やかに立ち上がるるものも認められるが、大型の甕においては、一旦急角度で立ち上がり、その後緩やかに開いていくタイプのものが多い。

文様は、縄文、沈線、刺突によって施文されている。沈線は、平行沈線、連続山形文、重菱形文、連弧文などである。平行沈線は、主に文様帶の区画に用いられているが、多くは、縄文及び他の沈線文との複合によるものである。無文帶に単独で用いられている（27図16・48図116）はごく少数である。縄文による地文上に、沈線を施文したものが最も多く認められる。連続山形文は、胴部に施文される傾向が強く、特に最大径を有する部位の下部に認められる。また、山形の頂部が丸みを帯びた、小波状を呈するものが多い傾向が認められる。重菱形文は頸部下位から胴部上半に施文される傾向がみられ、1号住居跡出土の16図1は広めの文様帶を構成している。連弧文は上下で対になるものも少量認められるが、概ね2単位などの複数の一方が開放された文様構成である。これらの沈線のほかには、19図3のような変形工字文も認められる。

縄文は、縦位に転回するものと、斜位のものが有り、口縁部及び肩部以下には縦位に転回するものが多い。縄文原体は、単節の細目のものを使用しており、各部位によって施文方向に変化を持たせている。また、25図7は口縁部から頸部にかけての破片で、全面に綾絡文が施文されており、さらに口唇部にも縄文が施文されている。27図22は口縁部に、結節した縄端部を回転させて、2列の連続山形文風の文様を構成させている。

縄文による施文は、主に器外面においてなされているが、口縁部の内面に1～2cm程の幅で帶状に施文されているものも認められる。また、口唇部上に施文されているものも多数認められる。

また、沈線との組み合わせにおいては、文様区画帶内を磨消しているものもみられる。

刺突には、円竹管、棒状工具及び箆状工具によるものが認められる。

円竹管及び円形の棒状工具による連続刺突は、主に、平行沈線による区画帶内に行われている。拓図132は沈線に区画された隆帶上に、上下から交互に刺突を加えたものである。

口唇部に、刻み目を有するものが多く認められる。この刻み目は口唇部の外面から頂部に斜めに行われているものと、この刻み目の間にさらに口唇部上面から器外面に向けてやや斜めに行っているもの（27図20・49図150・151）がある。前者は刻み目がやや広めであるのに対し、後者は細身であり、口縁部を上から俯瞰すると鋸歯状を呈している。厳密には、名称が異なるが交互刺突的な要素を含んでいる。

本遺跡出土の弥生時代土器を概観してきたが、主な特徴は念佛間式の範疇で捉えられるものである。新たな要素としては、口縁部における綾絡文の施文及び口唇部における刻み目の多用が挙げられる。また、甕において口縁部自体が長く伸びるものが認められることなども特徴の

ひとつである。本型式の内容については、完全に確定されたものではなく、また、地域差・時期差などについても論じられていること、また、本遺跡出土のものでは完形資料が乏しい点から、推察の域を出ないが、同型式中においても新しい部類に入る可能性が高い。

本群土器と十和田 b 旗下火山灰との関係は、1 H の覆土中においては火山灰上面だけではなく、床面直上から出土した破片とも接合している。長イモの耕作による深掘りが行われており当該住居跡も数条のトレッチャによる搅乱を受けているため、断定は困難であるが、本群土器の期間内において降下した可能性も考えられる。

第VII群土器

縄文時代の土器で、時期及び型式を特定できないものを一括した。ほぼ全体形を把握できるものは取り扱った。

第42図7は大型の深鉢形土器で、第4号焼土からの出土である。器形は底部から口縁部に向かい、大きく開くバケツ状を呈しており、口縁部直下及び胴部上部がややくびれている。口縁部は2条の貼り付けによる隆帯が巡らされている。また、欠損部分のため明瞭ではないが、胴部下位にも2条の貼り付け隆帯が認められる。器面全体は単節R Lの縄文が施文されている。隆帯の上部にも同様に縄文が施文されている。胴部下位の2条の隆帯間には施文が行われていない。底部外面には網代痕が鮮明に認められる。胎土・焼成は良好である。型式は特定できないが、縄文時代中期後半期に帰属するものと考えられる。

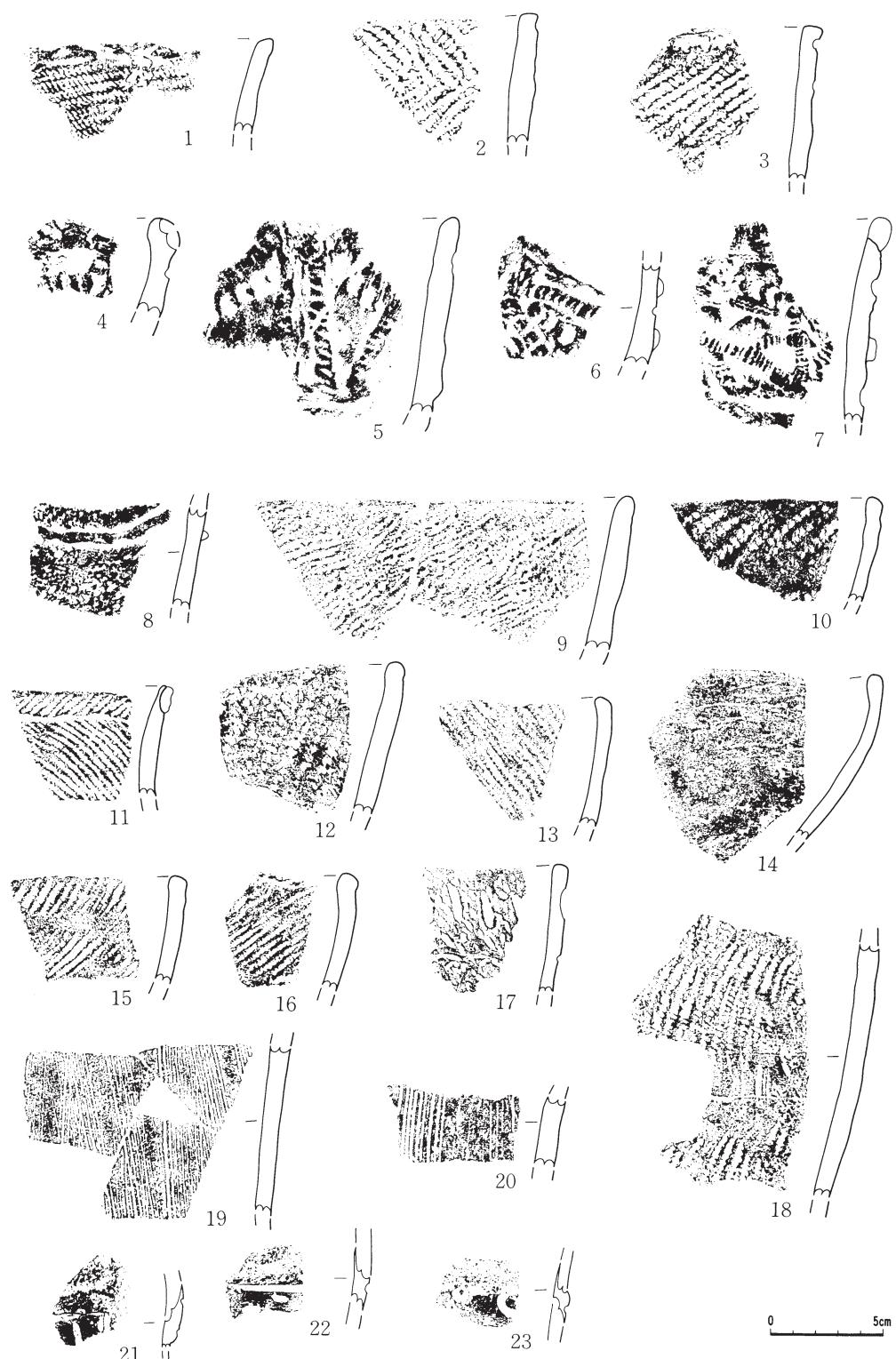
第64図79は非常に小型の切斷蓋付土器の底部である。底部直上で棒状工具により切り放されており、残存部分は無文である。底部外面には木葉痕が認められる。器形及び文様構成が不明のため、本群としたが、中期末葉から後期前半期のものと考えられる。

第VIII群土器

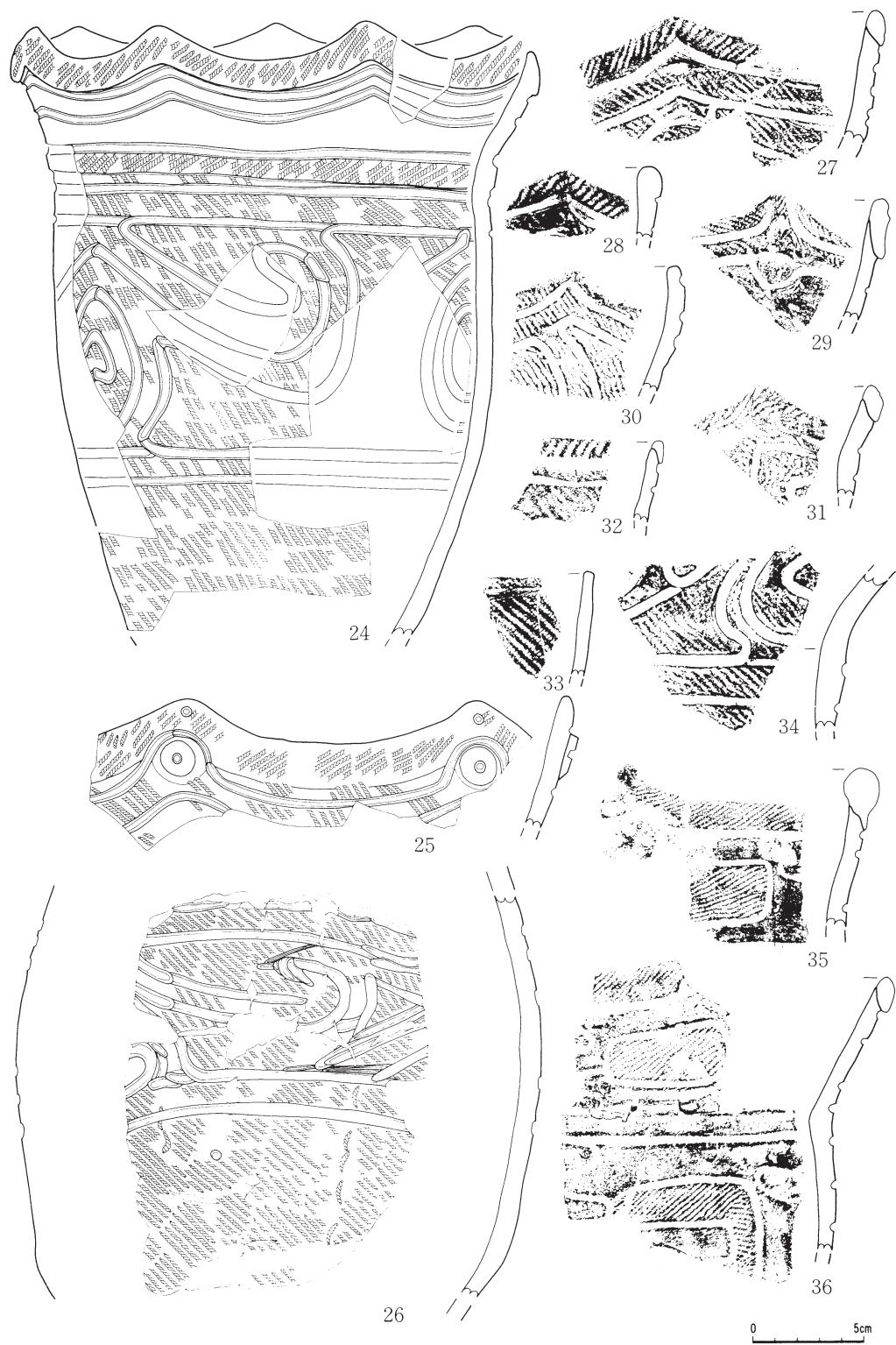
平安時代の土器を一括した。調査区内においては、土師器の長胴甕及び壺の破片が数点出土した。いずれも胴部破片であり、全体形を知り得ない。本調査区に隣接する畠地からも数片の土師器が出土しているが、小破片である。須恵器の出土は認められない。

口縁部及び底部の破片がないことから、実測図の記載は割愛し、出土した事実のみ報告するにとどめたい。

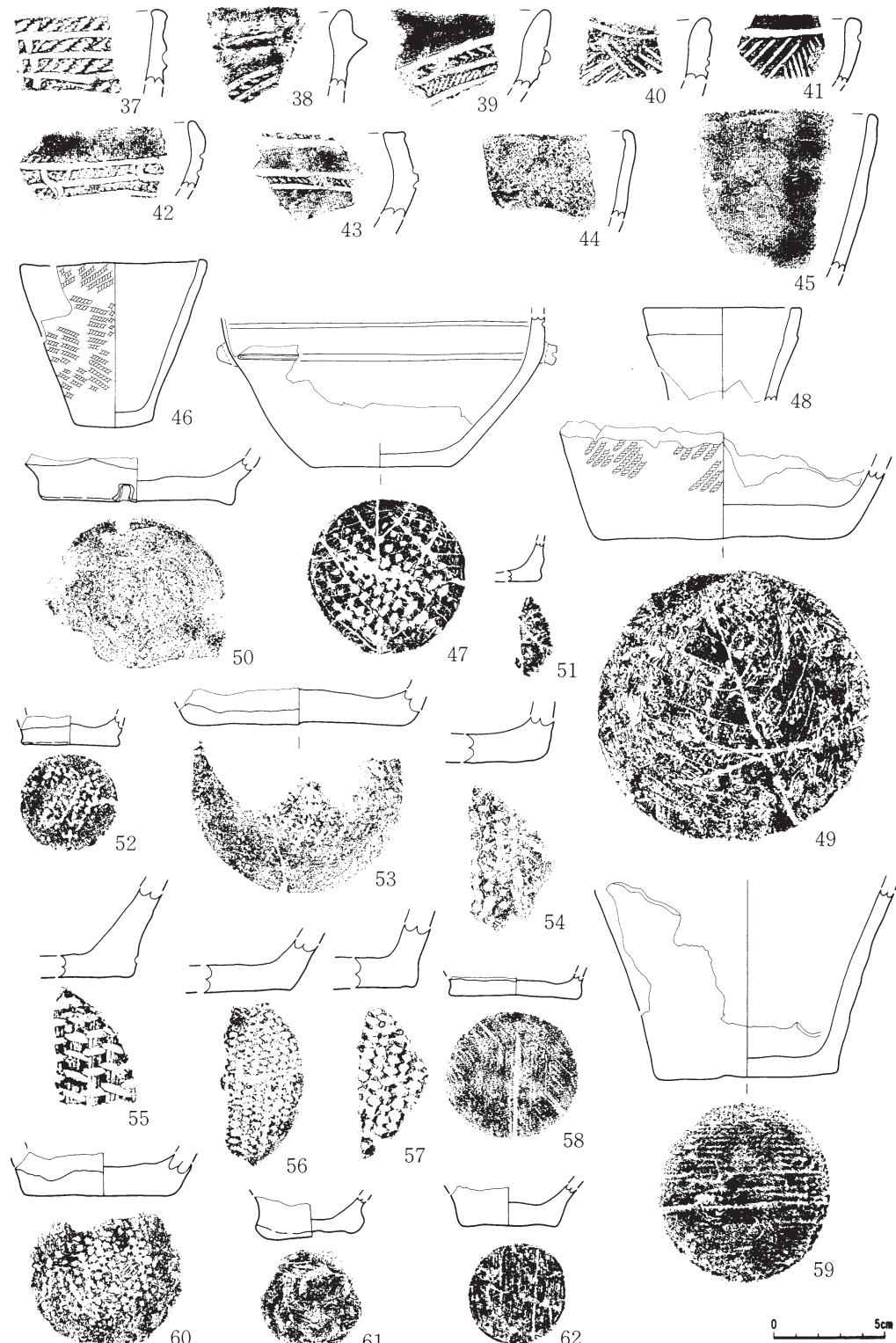
(白鳥 文雄)



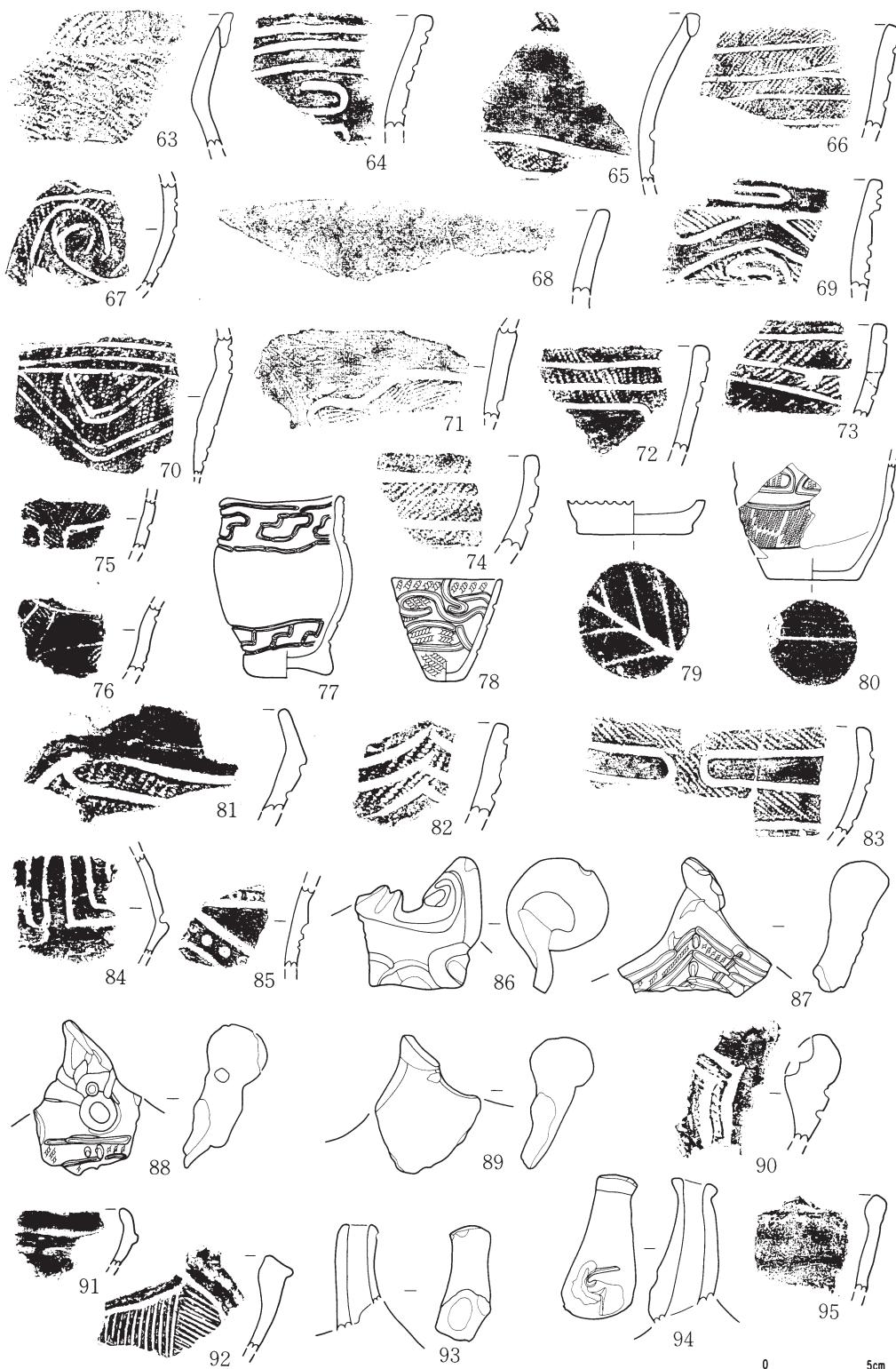
第43図 遺構外出土土器－1



第44図 遺構外出土土器－2



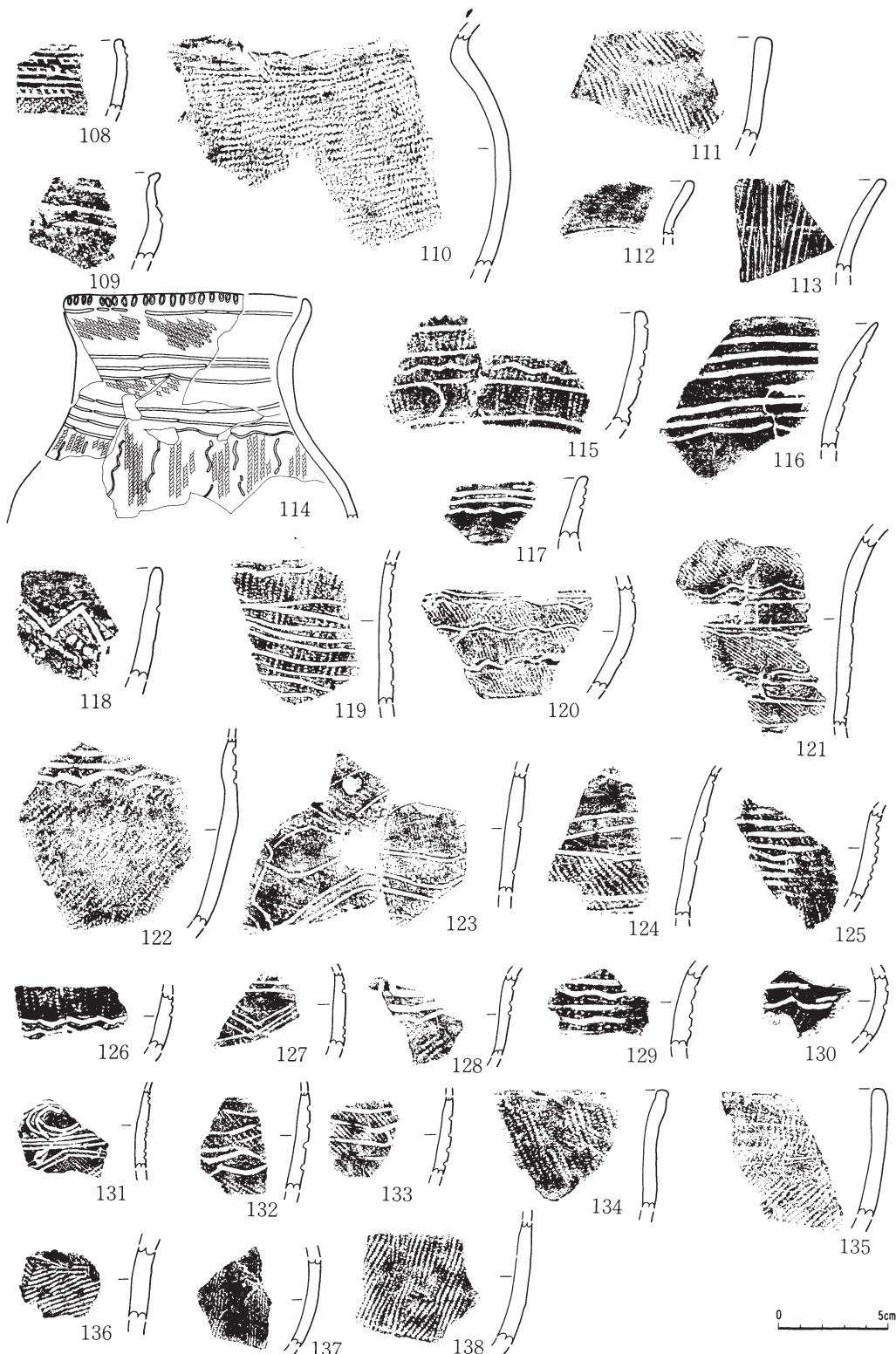
第45図 遺構外出土土器-3



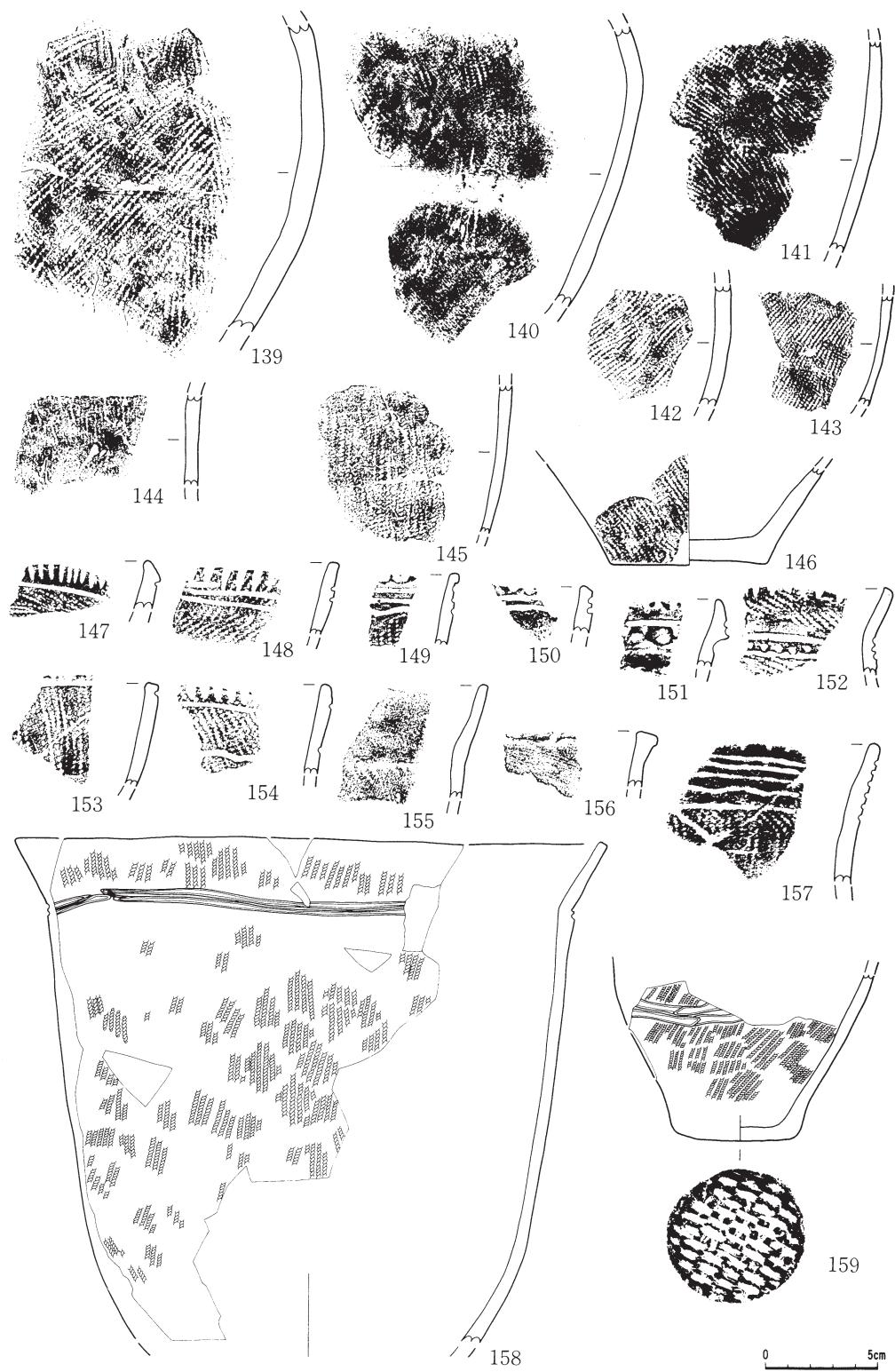
第46図 遺構外出土土器—4



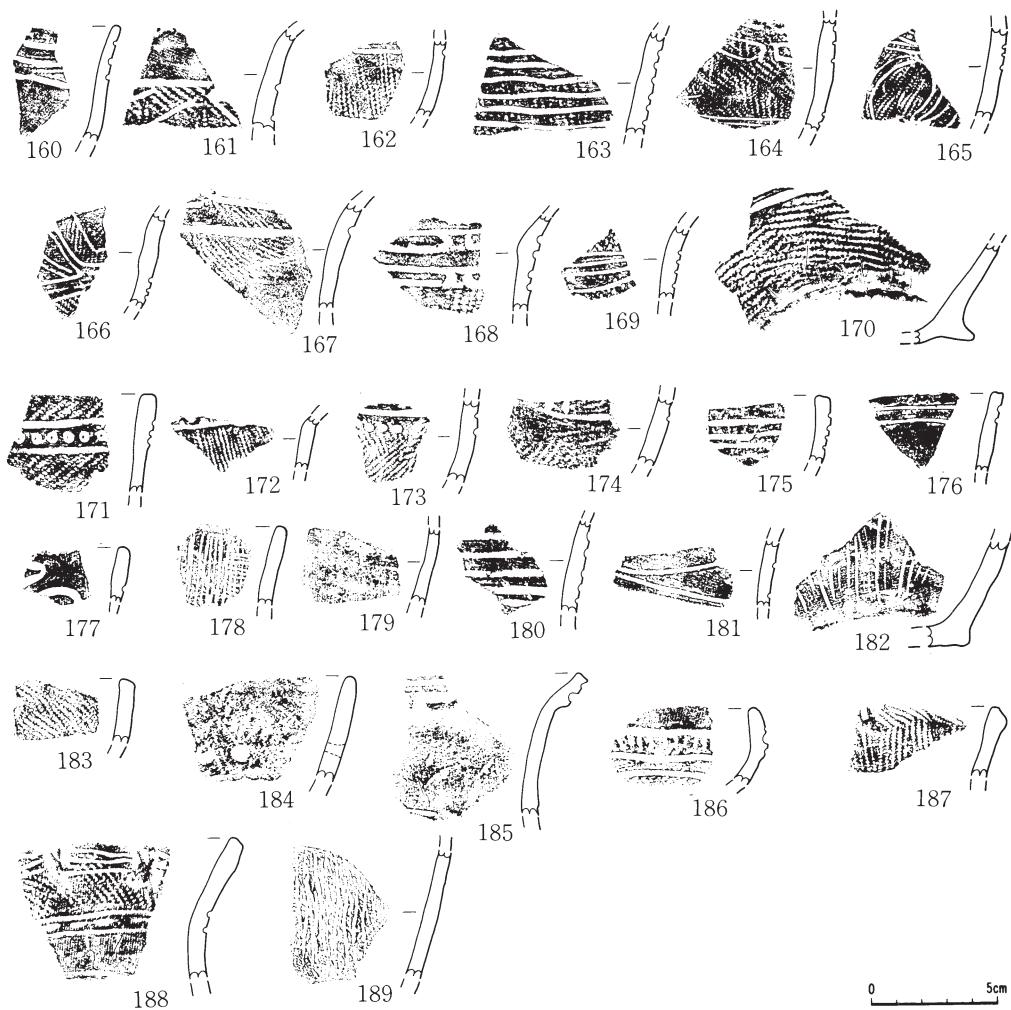
第47図 遺構外出土土器—5



第48図 遺構外出土土器 - 6



第49図 遺構出土土器-7



第50図 遺構外出土土器一 8

0 5cm

第9表 遺構外出土土器觀察表

番号	出土地点	層	部位	外施文様	内面	分類
43図-1	F-13	III	口縁部	繩文(0段多条RL)、口唇部繩側面圧痕		I
43図-2	H-23	II	口縁部	結束1種羽状繩文、口唇部面取り	条痕	II
43図-3	E-48	IV	口縁部	繩文(LR)、口縁部繩端圧痕、口唇部面取り		II
43図-4	E-11	III	口縁部	馬蹄状圧痕+貼付隆帯		III-1
43図-5	F-12	III	口縁部	馬蹄状圧痕+貼付隆帯		III-1
43図-6	F-12	III	口頸部	馬蹄状圧痕+貼付隆帯		III-1
43図-7	E-14	III	口縁部	馬蹄状圧痕+貼付隆帯		III-1
43図-8	F-13	III	口頸部	貼付隆帯		III-2
43図-9	F-16	II	口縁部	繩文		III·IV?
43図-10	G-17	II	口縁部	繩文(L)		III·IV?
43図-11	G-21	II	口縁部	繩文(RL)		IV?
43図-12	F-12		口縁部	繩文(LR)		III·IV?
43図-13	F-16	III	口縁部	繩文(LR)		III·IV?
43図-14	E-14	III	口縁部	無文		III·IV?
43図-15	F-16	III	口縁部	繩文(LR)、口唇部繩文(LR)		III·IV?
43図-16	H-14	II	口縁部	繩文(LR)、口唇部繩文(LR)		III·IV?
43図-17	F-15	IV	口縁部	刺突		III·IV?
43図-18	H-11	I	胴部	繩文(LR)		III·IV?
43図-19	H-23	II	胴部			IV?
43図-20	G-16	II	胴部			IV?
43図-21	E・F-14		胴部	沈線、赤色顔料付着		IV?
43図-22	E・F-14		胴部	沈線、赤色顔料付着	同一個体	IV?
43図-23	F-16	III	胴部	沈線、赤色顔料付着		IV?
44図-24	H-14	II	略完形	沈線+繩文(LR)		IV-1
44図-25	F-13	III	足	無文		IV-1
44図-26	G-14	IV	胴部	沈線+繩文(LR)		IV-1
44図-27	E-15	II	口縁部	沈線+繩文(LR)		IV-1
44図-28	E・F-14		口縁部	沈線+繩文(LR)		IV-1
44図-29	F-29	II	口縁部	沈線+繩文(LR)		IV-1
44図-30	F-17	IV	口縁部	沈線+繩文(L)		IV-1
44図-31	F-24	II	口縁部	沈線+繩文(L)		IV-1
44図-32	H-22	II	口縁部	沈線+繩文(LR)		IV-1
44図-33	F-17	II	胴部	沈線+繩文(LR)		IV-1
44図-34	E・F-14		頸部	沈線+繩文(LR)		IV-1
44図-35	F-13	III	口縁部	沈線+繩文(LR)、磨消繩文、口唇部突起		IV-1
44図-36	E-16	II	口縁部	沈線+繩文(LR)、磨消繩文		IV-1
45図-37	G-21	II	口縁部	沈線+刺突+繩文(RL)		IV
45図-38	F-16	II	口縁部	沈線		IV
45図-39	E-15	II	口縁部	沈線、貼付隆帯+繩文(LR)		IV
45図-40	G-21	II	口縁部	沈線		IV
45図-41	F-16	II	口縁部	沈線		IV-3
45図-42	H-16	II	口縁部	沈線+繩文(LR)		IV
45図-43	H-14	III	口縁部	沈線+隆帯に刻目		IV
45図-44	G-17	II	口縁部	無文		IV
45図-45	H-20	II	口縁部	無文		IV
45図-46	F-14	III	略完形	繩文(LR)		IV

45図- 47	F-16	III	底 部	沈線+貼付、木葉痕、網代痕		IV-2
45図- 48	G-15	III	口 縁 部	無文、内外面黒色		IV ?
45図- 49	H-16	II	底 部	縄文 (R L)、木葉痕		III・IV ?
45図- 50	H-24	II	底 部	四隅に刻目		IV
45図- 51	F-12	II	底 部	木葉痕		IV ?
45図- 52	H-14	II	底 部	網代痕		IV ?
45図- 53	H-20	II	底 部	網代痕		IV ?
45図- 54	G-14	II	底 部	網代痕		IV ?
45図- 55	H-26	II	底 部	網代痕		IV ?
45図- 56	G-14	II	底 部	網代痕		IV ?
45図- 57	H-29	II	底 部	網代痕		IV ?
45図- 58	G-23	II	底 部	擦 痕		IV ?
45図- 59	E・F-14		底 部	擦 痕		IV ?
45図- 60	E-21		底 部	網代痕		IV ?
45図- 61	E-22	I	底 部	擦 痕		IV ?
45図- 62	H-13	III	底 部	擦 痕		IV ?
46図- 63	H-23	II	口 縁 部	縄文 (L R)		IV
46図- 64	E-13	III	口 縁 部	沈 線		IV-1
46図- 65	E-14	III	口 縁 部	沈線+縄文 (R L)		IV-1
46図- 66	F-24	II	口 縁 部	沈線+縄文 (付加条)		IV-1
46図- 67	F-17	II	胴 部	沈線+縄文 (L R)		IV-1
46図- 68	G-18	IVa	口 縁 部	無文 赤色顔料付着		IV-1
46図- 69	G-30	I	口 縁 部	沈線+縄文 (L R)		IV-1
46図- 70	H-13	II	胴 部	沈線+縄文 (R L)		IV-1
46図- 71	G-23	II	胴 部	沈線+縄文 (R L)		IV-1
46図- 72	H-16	II	口 縁 部	沈線+縄文 (R L)		IV-1
46図- 73	F-14	III	口 縁 部	沈線+縄文 (R L)、補修孔		IV-1
46図- 74	F-16	II	口 縁 部	沈線+縄文 (L R)、口唇部縄文 (L R)		IV-1
46図- 75	F-13	II	胴 部	沈線+縄文 (L R)		IV-1
46図- 76	E-47	III	胴 部	沈線+縄文 (L R)、磨消縄文		IV-1
46図- 77	H-14	IV	完 形	沈線、ミニチュア土器		IV-1
46図- 78	H-13	III	完 形	沈線+縄文 (L R)、ミニチュア土器		IV-1
46図- 79	G-20	I	完 形	切断蓋付土器、木葉痕		VII
46図- 80	G-19	II	底 部	沈線+縄文 (R L)、擦痕、ミニチュア土器		IV-2
46図- 81	E-15	II	口 縁 部	沈線+縄文 (L R)		IV-2
46図- 82	E-14	III	口 縁 部	沈線+縄文 (R L)		IV-2
46図- 83	E-15	II	口 縁 部	沈線+縄文 (R L)、赤色顔料付着	赤色顔料付着	IV-2
46図- 84	G-24	II	胴 部	沈 線		IV-2
46図- 85	E-15	IV	胴 部	沈線+刺突		IV-2
46図- 86	H-17	II	口 縁 部	沈線+刺突、鰭状突起		IV-3
46図- 87	G-20	I	口 縁 部	沈線+縄文 (L R)、鰭状突起		IV-3
46図- 88	H-20	II	口 縁 部	沈線+刺突+縄文 (L R)、鰭状突起		IV-3
46図- 89	G-19	II	口 縁 部	無文 鰭状突起		IV-3
46図- 90	H-23	II	口 縁 部	沈線+縄文、鰭状突起		IV-3
46図- 91	G-18	II	口 縁 部	貼付隆帯		IV-3
46図- 92	G-20	II	口 縁 部	櫛齒状沈線、口唇部貼付		IV-3
46図- 93	F-14	IV	注 口	無 文		IV-3
46図- 94		III	注 口	沈 線		IV-3

46図-95	G-18	II	口 縁 部	無文、口唇部粘土粒貼付		IV-4
47図-96	F・H-16	III	口 縁 部	狩獵文・粘土紐貼付による		IV-5
47図-97	E-14	III	胴 部	狩獵文・粘土紐貼付による		IV-5
47図-98	H-16	II	胴 部	狩獵文・粘土紐貼付による		IV-5
47図-99	H-16	IV	胴 部	狩獵文・粘土紐貼付による		IV-5
47図-100	G-16	II	胴 部	狩獵文・粘土紐貼付による		IV-5
47図-101	G-14	II	胴 部	狩獵文・粘土紐貼付による		IV-5
47図-102			口 頸 部	狩獵文・粘土紐貼付による		IV-5
47図-103	H-16	II	胴 部	狩獵文・粘土紐貼付による		IV-5
47図-104	H-12		胴 部	沈線+縄文(R L)		IV-5
47図-105	H-16	II	胴 部	沈線+縄文(R L)		IV-5
47図-106			胴 部	狩獵文・粘土紐貼付による		IV-5
47図-107	F-18		胴 部	狩獵文・粘土紐貼付による		IV-5
48図-108	F-20	II	口 頸 部	沈線+縄文(L R)	(大洞B C式)	V
48図-109	F-21	II	口 縁 部	沈線+貼付	沈線1条	V
48図-110	E-17	II	口 頸 部	縄文(L R)		V
48図-111	E-16		口 縁 部	縄文(R L)		V
48図-112	F-17	II	口 縁 部	沈 線		V
48図-113	H-14	III	口 縁 部	櫛削、口唇部压痕		V
48図-114	G-15	II	口 縁 部	沈線+縄文(R L)、口唇部刻目・縄文(R L)		VI
48図-115	F-17	II	口 縁 部	連続山形文+縄文(R L)、口唇部刻目・縄文(R L)		VI
48図-116	F-20	II	口 縁 部	連続山形文+横位沈線		VI
48図-117	H-13	II	口 縁 部	連続山形文		VI
48図-118	E-16		口 縁 部	連続山形文+縄文(L R)		VI
48図-119	F-20	II	胴 部	連続山形文+縄文(R L)		VI
48図-120	F-20	II	口 縁 部	連続山形文+縄文(R L)、口唇部沈線		VI
48図-121	E-20	II	胴 部	連続山形文+縄文(R L)		VI
48図-122	F-17	II	胴 部	連続山形文+縄文(L R)		VI
48図-123	F-21	II	胴 部	連続山形文+縄文(R L)		VI
48図-124	H-19	II	胴 部	斜位沈線+縄文(R L)、磨消縄文		VI
48図-125	F-20	II	胴 部	連続山形文+縄文(R L)		VI
48図-126	F-18		胴 部	連続山形文+縄文(R L)		VI
48図-127	E-12	III	胴 部	連続山形文+横位沈線		VI
48図-128	F-18		胴 部	連続山形文+縄文(L R)		VI
48図-129	E-20	II	胴 部	連続山形文+縄文(R L)		VI
48図-130	F-17	II	胴 部	連続山形文+縄文(L R)、赤色顔料付着		VI
48図-131	G-16	II	胴 部	連続山形文+うず巻文+縄文(R L)		VI
48図-132	F-18		胴 部	連続山形文+縄文(L R)		VI
48図-133	H-13	III	胴 部	連続山形文+縄文(R L)		VI
48図-134	E-20	II	口 縁 部	縄文(R L)、口唇部縄文(R L)		VI
48図-135	E-14	III	口 縁 部	縄文(L R)		VI
48図-136	F-26	I	胴 部	縄文(R L)		VI
48図-137	E-21	II	胴 部	縄文(R L)		VI
48図-138	H-15	III	胴 部	縄文(R L)		VI
49図-139	G-17	II	胴 部	縄文(R L)		VI
49図-140	G-15	II	胴 部	縄文(R L)		VI
49図-141	F-13	II	胴 部	縄文(R L)		VI
49図-142	H-16	III	胴 部	縄文(R L)		VI

49図-143	G-17	III	胴 部	縄文 (L R)		VI
49図-144	F-16	III	胴 部	縄文 (L R)		VI
49図-145	E-18		胴 部	縄文 (R L)		VI
49図-146	F-13	III	底 部	縄文 (R L)		VI
49図-147	G-15	II	口 縁 部	縄文 (R L)、口唇部刻目・縄文 (R L)		VI
49図-148	E-21	II	口 縁 部	口唇部刻目・縄文 (R L)		VI
49図-149	H-15	II	口 縁 部	沈線+縄文 (R L)、口唇部刻目・貼付	沈線、縄文 (R L)	VI
49図-150	G-14	I	口 縁 部	沈線、口唇部刻目		VI
49図-151	E-14	I	口 縁 部	沈線+刺突+縄の側面压痕+指頭压痕、口唇部刻目		VI
49図-152	G-18	II	口 縁 部	沈線+刺突+縄文 (R L)、口唇部刻目・縄文 (R L)	沈線 1 条	VI
49図-153	F-18		口 縁 部	沈線+縄文 (R L)、口唇部刻目・縄文 (R L)		VI
49図-154	E-11	III	口 縁 部	沈線+縄文 (R L)、口唇部刻目		VI
49図-155	G-18	II	口 縁 部	縄文 (R L)、口唇部刻目		VI
49図-156	E-21	II	口 縁 部	無文、口唇部刻目・縄文 (R L)		VI
49図-157	F-19	II	口 縁 部	沈線+縄文 (R L)、口唇部刻目	縄文 (R L)	VI
49図-158	E-21	II	口 縁 部	沈線+縄文 (R L)		VI
49図-159	G-14	IV	胴 部	沈線+縄文 (L R)		VI
50図-160	H-12		口 縁 部	沈線+縄文 (L R)		VI
50図-161	F-18		胴 部	沈線+縄文 (R L)、補修孔		VI
50図-162	G-16	II	胴 部	沈線+縄文 (R L)		VI
50図-163	E-18		胴 部	沈線+縄文 (R L)		VI
50図-164	F-18		胴 部	沈線+縄文 (R L)		VI
50図-165	E-12	III	胴 部	沈線+縄文 (R L)		VI
50図-166	F-16	III	胴 部	沈線+縄文 (R L)		VI
50図-167	F-19	II	胴 部	沈線+縄文		VI
50図-168	E-22	I	胴 部	沈線+縄文 (R L)		VI
50図-169	F-20	II	胴 部	沈線+縄文 (R L)		VI
50図-170	G-17	IV	底 部	沈線+縄文 (L R)、赤色顔料付着		V
50図-171	G-16	II	口 縁 部	沈線+刺突+縄文 (R L)		VI
50図-172	E-21	II	胴 部	沈線+刺突+縄文 (R L)		VI
50図-173	G-17	II	胴 部	沈線+刺突+縄文 (R L)		VI
50図-174	G-17	II	胴 部	沈線+刺突+縄文 (R L)		VI
50図-175	F-14	III	口 縁 部	沈線、口唇部縄文 (R L)		VI
50図-176	E-22	I	口 縁 部	沈線、口唇部縄文 (R L)		VI
50図-177	G-23	II	口 縁 部	沈線、口唇部刻目		VI
50図-178	H-16	II	口 縁 部	櫛歯状沈線		VI
50図-179	E-22	I	胴 部	沈 線		VI
50図-180	F-18		胴 部	沈 線		VI
50図-181	F-17	II	胴 部	沈 線		VI
50図-182	H-14	II	底 部	櫛歯状沈線		VI
50図-183	G-19	II	口 縁 部	無文、口唇部縄文 (R L)	縄文 (R L)	VI
50図-184	H-20	II	口 縁 部	無文、補修孔		VI
50図-185	E-22	I	口 縁 部	沈線+貼付		VI
50図-186	H-13	II	口 縁 部	沈線+刻目		VI
50図-187	F-18		口 縁 部	貼付、縄文 (R L)		VI
50図-188	E-21	III	口 縁 部	沈線、刺突、貼付、縄文 (R L)、口唇部縄文 (R L)		VI
50図-189	E-12	III	胴 部	燃 糸		VI

2 石 器

剥片石器56点、礫石器36点の出土である。総点数92点中、半数が遺構内出土である。また、特定の器種においては、そのほとんどが遺構内出土品であることから、遺構内出土のものと、遺構外出土のものを一括して述べる。

記載においては、剥片石器と礫石器とに大別して記載する。また、各器種においては一般的な器種名を用いた。

(1) 剥片石器

石鏸 (第30図-1~6・13~19・第51図-1~6)

20点出土した。無茎鏸3点、有茎鏸11点、尖基鏸6点で、完形品は9点である。

無茎平基鏸は、遺構外出土の51図1の1点である。無茎凹基鏸は4号住居跡の覆土中から出土した30図13と、遺構外出土の51図2の2点である。両者とも、基端の一方が丸く、一方が角張っており、抉りもごく浅いという特徴が認められ、後者は、基部側が非常に肉厚である。

有茎鏸は本器種中もつとも多数出土したもので、特に、凸基のものは7点出土している。

有茎平基の30図1と同2は、第1号住居跡出土のもので、茎部が太目に作出されており、特に2は基部幅に近い幅を有している。1は、本遺跡中ただ1点の黒曜石製の石器である。51図3は遺構外出土であり、尖頭部が細長く作出されている。51図4も遺構外からの出土で、大型のものである。大きさに比しては薄手である。

有茎凸基のものは、基部に2種類の形状が認められる。一つは直線的に広がるもので、もう一つは若干の丸みを帶びて、尖頭部に向け銳角に立ち上がるものである。前者は、第1号住居跡出土の30図3、第4号住居跡出土の30図14・15の3点である。いずれも小型で軽量である。後者は、第1号住居跡出土の30図4、第2号住居跡出土の30図12、第4号住居跡出土の30図16・18の4点で、遺構内出土のものである。前者同様に小型、薄手で軽量である。

尖基としたものは6点で、遺構外出土は51図5・51図6の2点である。5は器体中央が肉厚のもので基部端を欠失している。側縁の調整から不定形削器の可能性も考えられたが、全体の形状から、石鏸の類とした。6は薄手の器長の長いもので先端寄りに微細な破損が認められる。第1号住居跡からは30図5・6が出土しており、ほぼ同形状である。2点とも先端部が若干厚みを持つこと、細長い棒状であること及び先端の形状から、石錐的用途も考えられる。30図19・17は第4号住居跡出土で、19は主に片面を調整しており、両面からの調整剥離は、両端部に行われている。尖頭部と基部の調整及び形状から本類としたが、第1号住居跡出土の2点と同様に石錐的用途も考えられ、両端部に可能性が認められる。17は片面が側縁のみの調整であり、尖頭部が偏っている。

石槍

2点出土した。第4号住居跡出土の30図4はやや肉厚の横長剝片を素材としており、両端とも同様調整がなされている。基部とした側は、片面が剝離によって薄手に調整されている。また、この部分の両側縁は若干抉りぎみに調整されている。この段状に加工された部分に着柄した可能性が考えられる。また、両端部の形状から、両端使用の石錐の可能性も考えられる。

51図7は欠損品で、尖頭部の破片である。

石錐

5点出土した。第1号住居跡出土の30図7は一端部を機能面としている。第4号住居跡出土の30図21は、細身の石鏃または石槍の類とも考えられるが、先端部の調整及び形状から石錐とした。また、同住居跡から出土した30図22は主に片面加工で、一端部が、籠上の加工がなされ、もう一端部に角状に2個の突起が作出されている。異形石器ともとれるが、突起の調整及び形状から、本類とした。51図8・9は周縁をスクレーパー状に調整しており、角状の突起を一個有する。

靴型石器

1点出土した。30図8は、第1号住居跡出土の完形品である。薄手の縦型剝片を素材としており、器面に光沢が認められる。

石籠

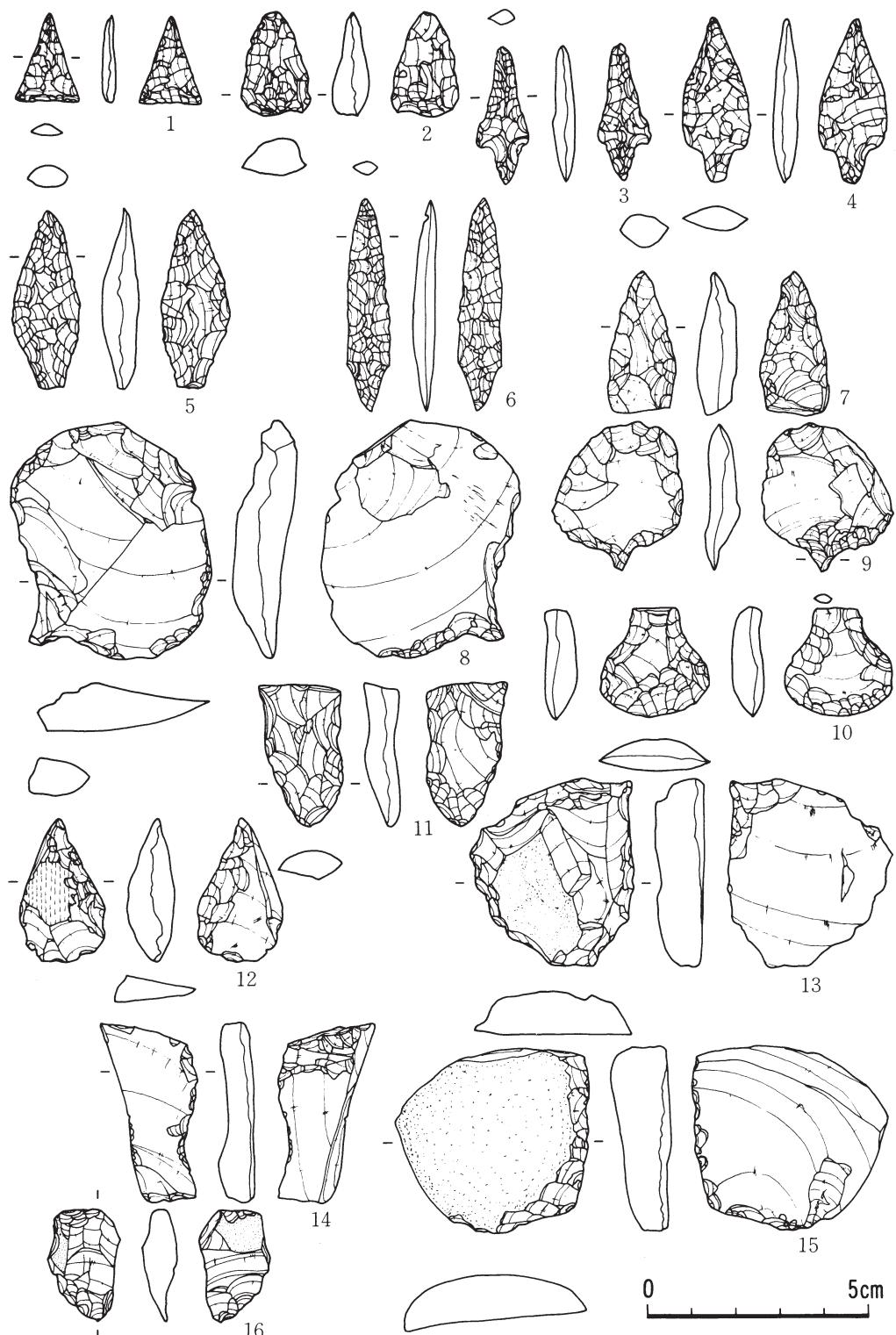
1点出土した（30図10）。遺構外からの出土で、基端部を欠失している。主に周縁を調整しており、刃部は両面からの調整されているが、片面側にやや偏っている。刃縁は円形を呈している。

不定形石器

25点出土した。

器面の調整及び刃部調整によってa～dに大別した。

a 器体全体に器面調整を行っているもの。または、形状自体を剝離によって調整しているもの。第1号住居跡出土の30図10は、完形品で、全面に器面調整が施され、基部側の側縁に浅い抉りが作出されている。刃部は基部端を除く周縁全体に及んでいる。第4号住居跡出土の31図9は、基端を除く周縁に調整が施されており、形状的にはつまみを欠失した石匙の様相を呈する。同住居跡出土の31図24は、欠損品であり器面調整がなされている。石槍の基部の可能性が高いが、この類とした。第4号焼土出土の41図は、縦横ほぼ同規模の肉厚の剝片を素材とし、基部を除く周縁に調整が行われている。基部寄りには両側縁に抉りが作出されている。第1号住居跡出土の30図9・遺構外出土の51図11は器面調整は行っているものの、明瞭な刃部は認められない。



第51図 遺構外出土石器－1

b 2辺以上の連続した刃部調整が行われているもの。第4号住居跡出土の31図25は3辺にわたって、第1号住居跡出土の30図11と遺構外出土の51図15は2辺にわたって連続した刃部が調整されている。この調整剥離以外はほとんど未加工である。

c 一部に刃部調整が行われているもの。第4号住居跡出土の31図26は小型の礫の両面を剥離し、1側縁に連続した調整を施したものである。同住居跡出土の31図27は1辺とこれに連続する辺の中程に調整が施されている。51図13は片面に連続した剥離がなされているが、器面調整には至っていない。一端に角状の突起を有し石錐の一種とも考えられるが、ごく小さなものであり、不定形石器とした。

d 特に明瞭な調整痕が認められないが、連続した微細剥離を及び使用痕跡が認められもの。11点出土した。このうち連続した長い使用痕が認められるのは、第4号住居跡出土の3点（31図28～30）と遺構外出土の1点（51図14）である。他は、ごく一部分に使用痕が認められる程度のものである。

楔形石器

2点出土した。第4号住居跡出土の31図31と遺構外出土の51図16である。2点とも両極石核を利用している。

（白鳥 文雄）

(2) 磯石器

37点出土した。

石斧 6点出土した（第52図-1～6）。

打製石斧 2点出土した。いずれも遺構外からの出土である。

1は、小型の欠損品で、主に片面加工で片面に自然面が残存する。折損部に器体調整の剥離とは異なる剥離痕があり、折損後に加工がなされた可能性がある。刃部形状は、ほぼ直刃である。2は小型の完形品で、片面に自然面を残す。自然面側は側縁部に剥離が施されている。刃部形状は円刃である。

磨製石斧 4点出土した。いずれも遺構外からの出土である。

6は欠損品で、刃部が残存している。全面に研磨がなされている。折損部に剥離が認められるが、転用等の痕跡は認められない。4は完形品で、小型で薄手である。全面に研磨がなされている。器面全体は整形時の研磨による数面の研磨面から構成されている。また漬し成形時のものと考えられる敲打痕が磨消されずに残存している。刃部形状は円刃で一方がやや変形している。頭頂部も刃部同様に鋭利である。刃部先端には刃円に斜行する使用痕が認められる。3はほぼ完形品であるが、刃部の片方の側縁部を欠失している。全面研磨によるが、成形時の敲打痕が若干磨消されずに残存している。側縁中央には一方は両面からの剥離が、他方は敲打が行われている。器面にはスス状炭化物が付着している。刃部形状は、両端が丸みを帯びるもの

の、ほぼ直刃である。頭頂部もほぼ平坦に整形されている。17は完形品であるが、刃部の一端を若干欠失している。全面研磨によるが、片面の頭頂部寄りに磨消しきれなかった剥離及び敲打痕が残存する。また、片面中央寄りに小範囲の敲打痕が認められる。刃部形状はほぼ直刃で、欠失した端部と刃縁中央部に剥離が認められる。これらは使用による欠損と考えられる。

本遺跡出土の石斧の素材は、頁岩が2点であることを除けば、砂岩・礫岩・閃緑岩・輝緑岩で、特に限定した石材は使用していないが、確質の素材が選定要素になっているものと推察される。また、欠損後の転用も認められない。

石錘（第52図-7～16）

11点出土した。すべて完形品である。また、第32図-7を除いて遺構外からの出土であり、9～11・14は同一地点からの出土である。

素材となった礫は、扁平ないしはやや肉厚の、平面形状が小判型のものを基調としているが、数点は不整形のものを利用している。

抉りは、短軸上の両側縁に作出されており、概ね、両面からの剥離によってなされている。片面加工のものは9の1点のみである。11・12の2点は、剥離後に敲打により潰しを行っているもので、11は端部にも小剥離が認められる。12の抉りの片方は、敲打だけで作出している。

重量では、最小60gから最大192g、95gから135gに7点が集中している。使用している石質は、凝灰岩2点・砂岩4点・チャート2点・安山岩2点・輝緑岩1点であり、加工の容易な素材を使用したものと推察される。

北海道式石冠（第52図-17）

1点出土した。遺構外からの出土であり、端部のみの欠損品である。器面の長軸上に敲打による帯状の把握部が形成されている。機能面のスリ面は幅広であり、片減りが認められ、研磨様のスリ面が形成されている。ザラ付き及び擦痕は認められない。

スリ石（第32図-1～3・第32図-5・6・8・第52図-19）

7点出土した。遺構外出土は19の1点であり、他の6点は住居跡内出土である。

19は断面が三角形の、いわゆる三角柱状磨石で一端部を若干欠失している。2側縁を機能面としているが、1面は側縁の約半分の使用であり、把握を容易にするための整形の可能性も考えられる。主機能面は、片減りが認められ、この片減りの対辺に使用によると考えられる剥離が連続している。端部及び礫の頂部に敲打痕が認められる。

第1号住居跡から3点のスリ石が出土した。32図1は両端部を主機能面としており、各々2方向からの使用による面で構成されている。また、一面にもスリ面が構成されている。他の面には大きな剥離痕が認められるが、これは、欠損部ではなく、この剥離の縁辺まで使用痕が及んでいる。両端部のスリは、研磨による面でほとんどザラ付きが認められない。また、器体全

体に敲打による潰しが行われている。32図3は両端部を主機能面としており、概ね研磨様のスリ面を構成している。また、同一面でも一般的なザラ付きを有するスリ面も認められる。器全体には敲打による潰しがなされている。また、両側縁は敲打後に軽度のスリがなされている。両端部とも強い敲打による剥離により、部分的に機能部分を失している。32図2はやや扁平な球状を呈し、主に周縁を主機能面として、敲打を伴った数面のスリ面で形成されている。上下両面には研磨による面が構成されており、各々小範囲の敲打痕が認められる。3・2は床面からの出土である。

第4号住居跡からも3点のスリ石が出土している。32図5は欠損品で面の一部と側縁の端部寄りに使用面が認められる。32図8は断面が三角形の礫を素材とし、最も鋭角な稜を機能面としている。機能面の両側には、意図的と考えられる剥離と、使用による剥離痕が並んでいる。機能面以外には、人為的な痕跡は認められない。32図6は床面出土で、台石と重なって出土したもので、非常に薄い板状の礫を素材としている。側縁の一部に敲打による2箇所の抉りが認められ、この周囲にごく軽度のスリ痕が認められた。他の器種の可能性も考えられるが、一応本類とした。

凹み石

2点出土した。32図9は第4号住居跡の出土で、肉厚の円礫の両面と一端部を使用しているが、凹みはあまり深くはない。52図18は肉厚の円礫を素材とし、両面を使用している。

石皿 (第53図-20・22)

2点出土した。いずれも遺構外からの出土で欠損品である。22は凝灰岩製で中央部が湾曲していたものと考えられる。周縁際は幅広の平坦面が形成されている。裏面は全体に湾曲しており、研磨がなされている。また、敲打痕が特に周縁側に多く認められる。スス状炭化物が部分的に付着している。20は緩やかな起伏を持ちながら湾曲する研磨面を形成しており、一部に軽度の敲打痕が認められる。砥石の可能性も考えられるが、この類とした。

台石 (第32図-10・第33図-11~13・第53図-21・23)

6点出土した。内4点は第4号住居痕からの出土である。

33図13は床面からの出土であり、若干スス状炭化物の付着が認められる。面に細かな敲打痕が認められる。32図10は完形品で、片面の中央部に研磨面が形成されている。若干の敲打痕も認められる。33図11・12はいずれも欠損品で12は敲打による凹みが認められる。

53図21は肉厚の礫で、両面の側縁際にスリ面が形成されている。23は断面形状が橢円形を呈する大型の礫で、一端を欠失している。片面に研磨面と小範囲の浅い凹みが認められる。全体の形状から石棒の可能性も考えられたが、人為的と思われる面の構成が、この部分に限定されていることから、台石として扱った。

その他

第1号住居跡の床面直上から、周縁のほとんどを敲打によって整形している礫が出土している。使用によるものか否かは不明であるため、加工痕跡のある礫として扱った。

(白鳥 文雄)

3 その他の遺物

円盤状土製品 (第53図-1~5)

5点出土した。すべて遺構外出土である。計測値は表に一括した。

第III層出土の1を除いて、4点は第II層からの出土である。1は無節Rの縄文が施文されており、4は無文である。3は表面が剥落しているため不明瞭であるが、2・5と同様に、沈線と単節LRの縄文によって施文されている。1は、特定できないが、2~5は十腰内I式の土器片を再利用したものと考えられ、縄文時代後期の所産と考えられる。

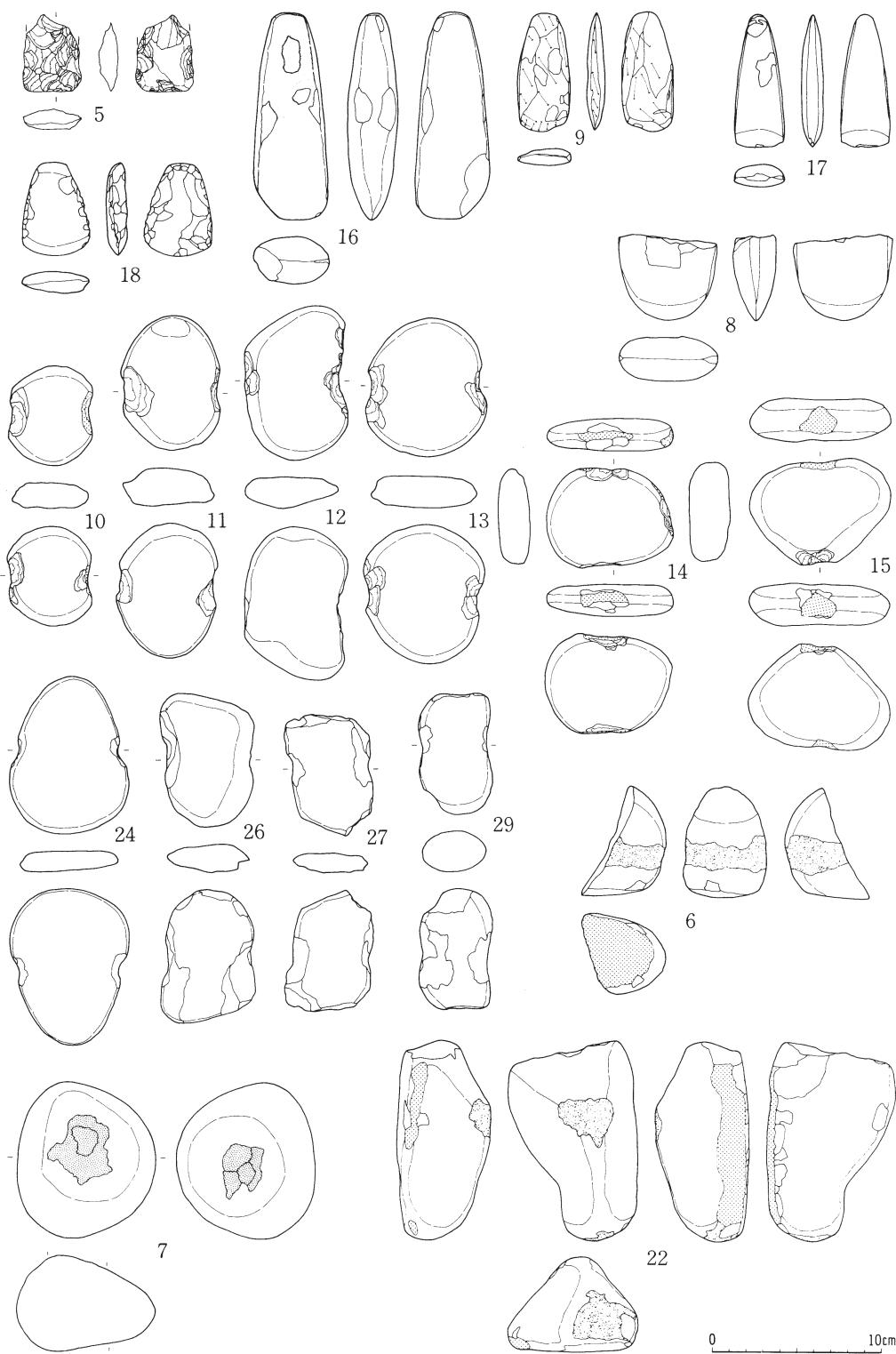
耳栓 (第54図-6)

1点出土した。F-20グリッドの第II層からの出土であり、小型で、一部欠損している。径は13mm×12mmで、高さは10mmである。重量は1.7gである。

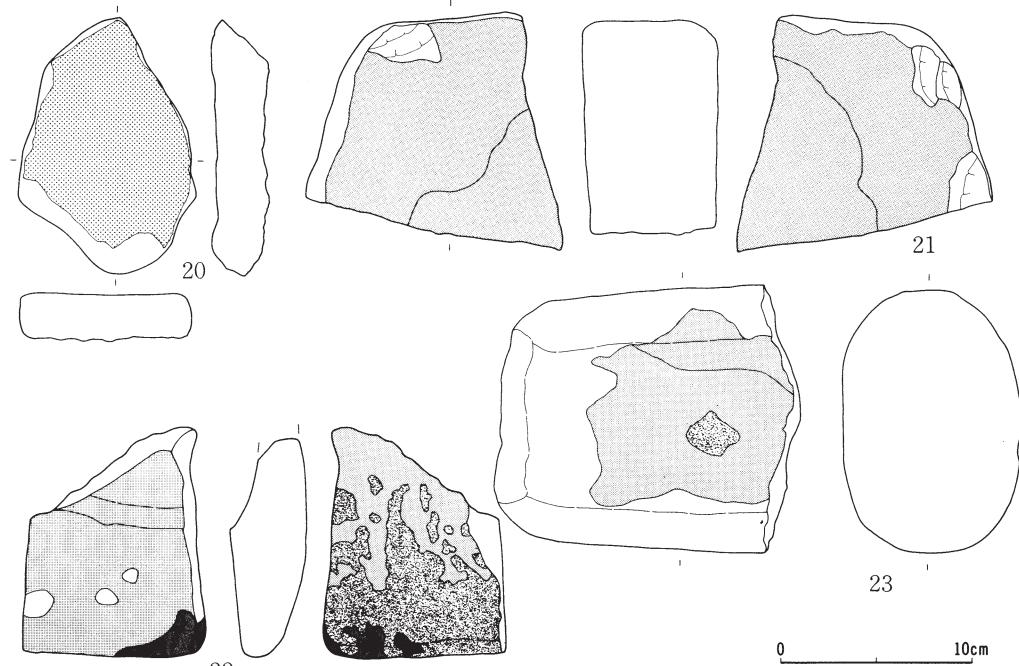
有脚皿? (第54図-7)

1点出土した。E-13グリッド出土である。破片資料で、全体形は把握できないが、1本の脚部が残存している。また、1cmほど離れて、もう1本の脚の剥落痕が認められる。当初、蓋の可能性も考えたが、脚部とした突起の先端が摩滅していることから脚付きの皿とした。器面の調整は、手捏ね風であり、丁寧な調整は行われていない。胎土中には砂粒が混入しており、焼成は良好である。胎土及び作りから、縄文時代後期の可能性が高い。

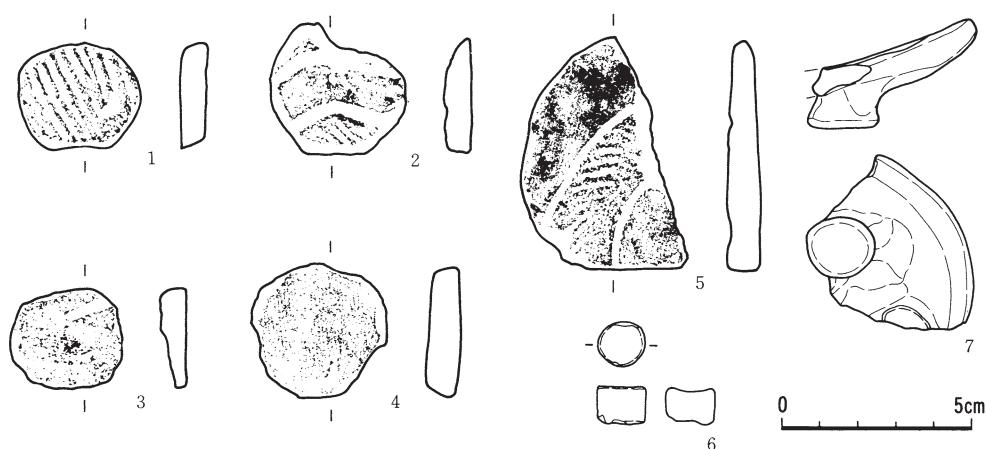
(白鳥 文雄)



第53図 遺構外出土石器－2



第53図 遺構外出土石器



第54図 その他の遺物（土製品）

円盤状土製品計測表

No.	出土 地点	長径×短径×厚(mm)	重(g)	
1	H-14 III層	32 × 28 × 8	8.1	無筋 R
2	F-16 II層	37 × (36) × 7	(9.7)	L R + 沈線
3	F-17 II層	30 × 27 × 7	5.4	縄文 + 沈線
4	F-16 II層	37 × 36 × 8	12.5	無文
5	F-23 II層	72 × - × 9	(23.9)	L R + 沈線

第10表 石器計測表

剥片石器

図版	出 地 点	層	器種	最大計測表				石質	整理番号	備 考
				長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
30図-1	1 H	2	石 鏃	31	18	4	0.9	黒	1	有茎平基
30図-2	1 H	覆	石 鏃	22	15	5	1.0	珪 貞	20	有茎平基
30図-3	1 H	覆	石 鏃	17	13	4	0.5	珪 貞	21	有茎凸基
30図-4	1 H	覆	石 鏃	(20)	11	4	(0.6)	珪 貞	22	有茎凸基
30図-5	1 H	覆	石 鏃	28	8	4	0.7	珪 貞	23	尖 基
30図-6	1 H	覆	石 鏃	31	7	4	0.7	珪 貞	24	尖 基
30図-7	1 H	覆	石 锥	29	18	7	2.7	玉 珪	26	
30図-8	1 H	覆	靴 型	61	23	7	7.5	珪 貞	25	
30図-10	1 H	覆	不 定 形	39	15	7	3.9	珪 貞	27	
30図-9	1 H	覆	不 定 形	(40)	23	9	(6.0)	珪 貞	29	
30図-11	1 H	覆	不 定 形	52	45	10	21.0	珪 貞	28	
30図-12	2 H	覆	石 鏃	(19)	12	2	(0.4)	珪 貞	30	有茎凸基
30図-13	4 H	覆	石 鏃	(21)	13	4	(0.9)	珪 貞	6	無茎凹基
30図-14	4 H	覆	石 鏃	(18)	(13)	4	(0.5)	珪 貞	31	有茎凸基 火山灰下
30図-15	4 H	覆	石 鏃	18	14	4	0.5	玉 體	32	有茎凸基
30図-16	4 H	覆	石 鏃	(20)	10	4	(0.5)	珪 貞	3	有茎凸基 火山灰下
30図-18	4 H	麻	石 鏃	(26)	11	4	(0.7)	珪 貞	33	有茎凸基
30図-19	4 H	覆	石 鏃	37	9	5	1.3	珪 貞	34	尖 基 火山灰下
30図-17	4 H	覆	石 鏃	(24)	10	6	(1.3)	珪 貞	4	尖 基
30図-20	4 H	覆	石 槍	60	18	11	8.0	珪 貞	8	
30図-21	4 H	覆	石 锥	52	8	7	2.2	珪 貞	18	
30図-22	4 H	II	石 锥	28	(27)	10	(6.0)	珪 貞	38	
31図-23	4 H	覆	不 定 形	70	30	15	23.0	珪 貞	9	
31図-24	4 H	麻	不 定 形	(72)	29	14	(22.0)	珪 貞	36	
31図-25	4 H	攬	不 定 形	(55)	42	10	(24.9)		37	
31図-26	4 H	覆	不 定 形	22	12	6	1.2	玉 體	12	
31図-27	4 H	覆	不 定 形	27	34	10	7.0	珪 貞	13	
31図-29	4 H	覆	不 定 形	50	30	11	11.0	珪 貞	16	
31図-28	4 H	覆	不 定 形	60	32	11	15.5	珪 貞	17	
31図-30	4 H		不 定 形	64	35	10	22.0	珪 貞	35	
	4 H	覆	不 定 形	59	40	11	20.0	珪 貞	15	
31図-31	4 H	覆	楔 型	25	19	9	4.5	玉 珪	39	
41図-1	4 燐	一	不 定 形	44	45	13	28.1	珪 貞	10	
51図-1	E-15	II	石 鏃	20	14	3	0.6	玉 體	5	無茎平基
51図-2	G-14	II	石 鏃	24	16	9	2.3	玉 珪	43	無茎凹基
51図-3	F-16	III	石 鏃	31	12	5	1.1	玉 珪	40	有茎平基
51図-4	G-21	一	石 鏃	38	16	5	2.5	珪 貞	2	有茎平基
51図-5	E-14	III	石 鏃	(41)	16	8	(3.7)	珪 貞	42	尖 基
51図-6	G-18	II	石 鏃	49	10	5	1.9	珪 貞	41	尖 基
51図-7	F-17	II	石 槍	(33)	16	9	(4.0)	珪 貞	7	

図版	出地	土点	層	器種	最大計測値				石質	整理番号	備考
					長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
51図-8	G-13		II	石錐	55	46	12	26.7	珪頁	47	
51図-9	F-18	-	石錐	(34)	30	7	(4.6)	珪頁	48		
51図-10	F-16		II	石範	25	24	7	4.2	玉珪	45	
51図-11	G-17		II	不定形	(33)	19	8	(5.2)	珪頁	44	
51図-15	H-14		II	不定形	43	44	13	26.5	珪頁	50	
51図-13	G-13		II	不定形	43	37	10	19.5	珪頁	49	
51図-12	F-15		III	不定形	33	19	11	5.2	玉珪	46	
51図-14	G-14		II	不定形	41	22	8	5.0	珪頁	53	
	E-29	-	不定形	25	20	7	3.0	玉髓	11		
	F-20		II	不定形	27	14	5	2.1	珪頁	14	
	G-14		II	不定形	26	27	5	4.1	珪頁	51	
	G-17		II	不定形	43	28	9	9.3	珪頁	52	
	G-26		II	不定形	38	26	16	14.0	珪頁	54	
	H-13	I	不定形	36	30	6	6.8	珪頁	55		
51図-16	E-19	-	楔型	26	16	8	3.5	珪頁	19		
	G-14	II	楔型	18	13	3	1.1	珪頁	56		

礫石器

図版	出地	土点	層	器種	最大計測値				石質	整理番号	備考
					長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
32図-1	1 H		覆	スリ石	92	55	40	309	砂岩	19	
32図-2	1 H	麻植	スリ石		60	55	44	219	安山岩	20	
32図-3	1 H	麻植	スリ石		117	54	47	(513)	安山岩	21	
32図-4	1 H	麻植	その他		114	92	70	1081	安山岩	37	
	1 H	麻植	台石		212	137	(112)	(4280)	チャート	38	
32図-7	4 H		覆	石錐	86	66	21	130	安山岩	25	
32図-5	4 H		覆	スリ石	(9.7)	(9.1)	(5.6)	(574)	安山岩	4	
32図-8	4 H		覆	スリ石	151	89	47	851	砂岩	28	
32図-6	4 H		覆	スリ石	(119)	(90)	(11)	(139)	砂岩	35	
32図-9	4 H		覆	凹石	85	66	53	394	安山岩	1	
33図-13	4 H		覆	台石	(372)	(295)	46	(7140)	安山岩	33	
32図-10	4 H		覆	台石	289	178	52	3580	安山岩	34	
33図-11	4 H		覆	台石	(74)	(75)	(45)	(403)	安山岩	2	
33図-12	4 H		覆	台石	(139)	(79)	(44)	(707)	安山岩	3	
52図-1	F-20	II	石斧	(46)	(35)	(12)	(13)	砂岩	5	打製石斧	
52図-2	F-16	III	石斧	55	40	12	33	頁岩	18	打製石斧	
52図-6	F-23	II	石斧	(51)	(58)	(25)	(86)	礫岩	8	磨製石斧	
52図-4	H-18	IV	石斧	71	31	10	36	頁岩	9	磨製石斧	
52図-3	F-16	III	石斧	123	(45)	30	(225)	閃綠岩	16	磨製石斧	
52図-5	F-20	II	石斧	78	30	13	45	輝凝岩	17	磨製石斧	
52図-7	G-17.	II	石錐	59	50	15	60	凝灰岩	10		
52図-8	G-14	II	石錐	80	60	22	133	砂岩	11		

図版	出土地点	層	器種	最大計測値				石質	整理番号	備考
				長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
52図-9	E-15	II	石錘	92	60	18	125	砂岩	12	
52図-10	E-15	II	石錘	83	72	19	163	輝緑岩	13	
52図-11	E-15	II	石錘	75	59	18	124	砂岩	14	
52図-12	G-21	II	石錘	83	63	26	192	砂岩	15	
52図-13	F-14	II	石錘	94	71	13	110	凝灰岩	24	
52図-14	E-15	II	石錘	80	56	17	97	チャート	26	
52図-15	F-19	II	石錘	73	53	12	68	チャート	27	
52図-16	—	—	石錘	72	44	24	101	安山岩	29	
52図-19	G-18	II	スリ石(119)	77	57	(534)	砂岩	22		
52図-17	G-21	II	北海道式石冠(50)	(66)	(48)	(147)	安山岩	6		
52図-18	—	—	凹石	73	83	57	568	安山岩	7	
53図-22	H-11	I	石皿(120)	(95)	38	(430)	凝灰岩	31		
53図-20	G-14	IV	石皿(133)	(88)	(31)	(337)	砂岩	30		
53図-23	H-23	II	台石(160)	(141)	(95)	3331	流紋岩	23		
53図-21	H-14	III	台石(125)	(136)	76	(2150)	安山岩	32		

第11表 石器組成表

	石 鎌	石 槍	石 錐	石 範	靴 型 石 器	楔 型 石 器	不 定 形 石 器	石 斧	石 錘	北 海 道 式 石 冠	ス リ 石	凹 み 石	石 皿 ・ 台 石	そ の 他	計
黒曜石	1														1
珪質頁岩	15	2	4		1	2	20								44
玉質珪質頁岩	2		1	1		1	1								6
玉髓	2						2								4
頁岩								2							2
チャート												1			3
礫岩								1							1
砂岩								1	4		4		1		10
凝灰岩								2					1		3
輝緑凝灰岩							1								1
流紋岩													1		1
安山岩								2		1	3	2	5	1	14
輝緑岩									1						1
閃緑岩								1							1
計	20	2	5	1	1	3	23	6	11	1	7	2	9	1	92

(玉質珪質→玉髓質珪質頁岩)

第3節 自然科学的分析

1 放射性炭素年代測定結果について

八戸工業大学助教授 村 中 健

1990年1月30日、受領した木片試料について ^{14}C 年代測定の結果を報告する。依頼試料は化学処理してベンゼンを合成し、これにシンチレーターを加え20mℓバイアルを作り測定試料とした。標準試料はNBSで保有する蔴酸標準体4990Cを処理して作成し、又、バックグラウンド試料は石炭を処理して作成したもの用いた。

測定装置はアロカ社製の低バックグラウンド液体シンチレーションカウンタ LSC-LB 鹿を用い、試料、標準試料、バックグラウンド試料について各々50分間ずつ4リピート、10サイクル合計2000分間の測定をおこなった。

年代の算出には ^{14}C 半減期としてlibbyの半減期5570年を用い、結果は1950年からの年数をBP年代として表記している。又、付記した誤差は計数値の 1σ に相当する年代である。

記

HIT-55: 福地村西山遺跡第1号堅穴住居床面から

出土した建築材と思われる炭化材

BP年代 : 1980±60年

以上

2 西山遺跡出土火山灰の蛍光X線分析

奈良教育大学教授 三辻 利一

考古学にとっての火山灰は遺跡の年代を知る上に重要な材料である。遺跡に堆積する火山灰がどの火山の、どの時期の火山活動による火山灰であるかが判定できれば、この火山灰を含む地層は年代を知る上の鍵層となる。この判定をする上に、蛍光X線分析は役に立つ。特に、東北地方では外来型のアルカリ質の火山灰と、在地型のアルカリ土類質の2種類の火山灰が遺跡に堆積しており、両者の相互識別は蛍光X線分析でも容易にできる。しかし、同一火山の火山灰でも、火山の活動時期によってK、Ca、Fe因子に変動が起こることが知られている。例えば十和田火山活動による火山灰でも、縄文時代早期の活動によるとみられる二ノ倉火山灰にはK量が少ないが、その火山活動による南部浮石（縄文時代早期）、中振浮石（縄文時代中期）、十和田b（弥生時代）、十和田a（平安時代）と年代が下がるにつれて少しづつK量は増加するが、逆に、Ca量は減少する。Fe因子はK、Ca、因子のように系統的に年代変化はしないが、それでも、二ノ倉火山灰にはFe量はきわめて多い。これらの因子の年代変化によって同じ十和田系火山灰でも、十和田a、b、二ノ倉火山灰などの間の相互識別は比較的に容易である。しかし、中振浮石と南部浮石を検出することは目下のところデータ不足のため十分にはできない。

このような状況のもとで、西山遺跡の縄文時代～弥生時代と推定される地層から出土した火山灰の分析結果について報告する。

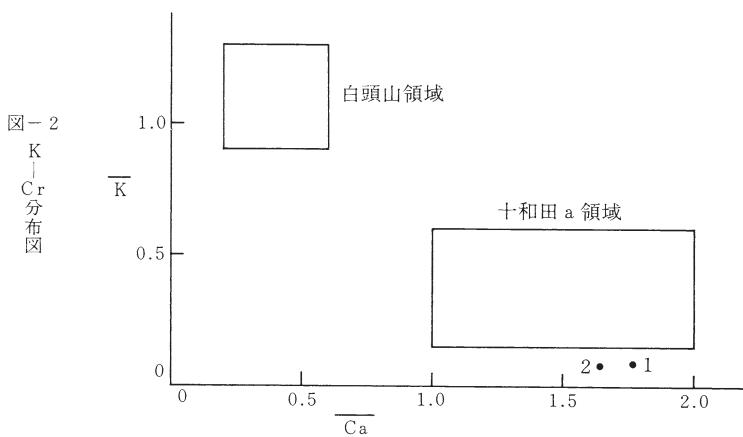
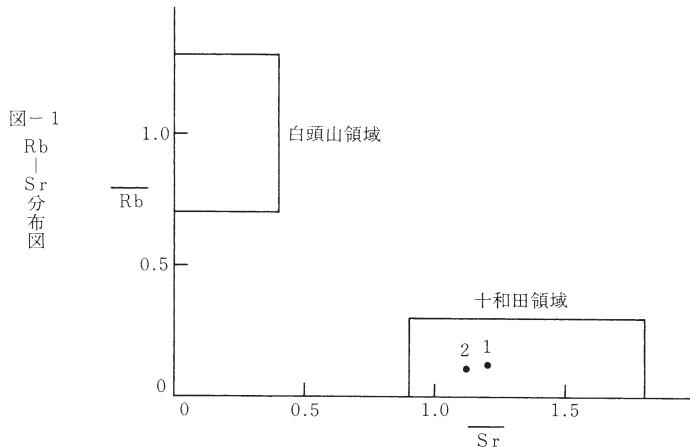
図1にはRb-Sr分布図を示す。白頭山領域と十和田領域は、これまでに分析されている東北地方の遺跡や露頭から採取した数百点の火山灰の分析データに基づいて、それぞれ、大部分の白頭山火山灰、十和田系火山灰が分布する領域である。したがって、特に、この領域は定量的な意味はもないが、アルカリ質火山灰とアルカリ土類質火山灰の化学特性が対照的であるので、両者の相互識別はRb-Sr分布図上で十分可能である。図1をみると、No.1、2はともにアルカリ土類質火山灰で十和田領域に分布し、十和田系火山灰であることを示している。

問題は十和田系火山灰の中で、どの時期の火山灰の化学特性に対応するかである。表1にNo.1、2の分析値を岩石標準試料JG-1による標準化値で示してあるが、二ノ倉火山灰のFe量はNo.1、2の2～3倍程度である。したがって、No.1、2は二ノ倉火山灰ではないことは間違いない。さらに、図2にK-Ca分布図を示してあるが、十和田a領域には分布していないので、十和田a火山灰でもない。また、No.1、2のK量は十和田b火山灰にしては少な過ぎる。十和田b火山灰でもないと思われる。したがって、残りの可能性は中振浮石か南部浮石のいずれかである。ところが、これまでの分析データからはデータ不足のため、この両者の相互識別は十

分にはできないのが現状である。K、Ca、Fe因子から強いて推察すれば、南部浮石よりも中振浮石に近い化学特性をもつと思われる。もし、中振浮石に対応するとすれば、大池・中川編年より、この火山灰を含む地層は縄文時代中期ということになる。

表-1 分析値

No.	検出遺構	K	Ca	Fe	Rb	Sr
No. 1	第1号竪穴住居跡	0.089	1.77	2.40	0.119	1.20
No. 2	第2号竪穴住居跡	0.082	1.64	2.61	0.111	1.12



3 西山遺跡から検出された微細植物遺体について

北海道大学埋蔵文化財調査室調査員 椿 坂 恭 代

(1) 遺跡の所在と性格

遺跡の所在：青森県

調査主体：青森県埋蔵文化財調査センター

種子を伴った遺構の年代：弥生年代

遺構の性格：竪穴住居

(2) 資料の観察方法

ここで扱った資料は、長イモ用トレッチャによる破壊から辛うじてまぬがれた竪穴住居の床面で採取された土壌から得られたものである。土壌は調査担当者がフローテーション処理し、その浮遊物中から得られた炭化した植物遺体（種子）として送付されてきた。この資料を、まず実体顕微鏡下で選別・観察をおこない、つぎに、走査型電子顕微鏡（SEM）を使用して微細構造を観察した。資料は、導伝性接着剤を用いて資料台に固定し、金イオンスパッタリング法により5mA. 1KV. DC. で3分間コーティングし、観察時の加速電圧12.5KV、写真撮影にはネオパンSS120ロール（6×7cm）フィルムを使用した。

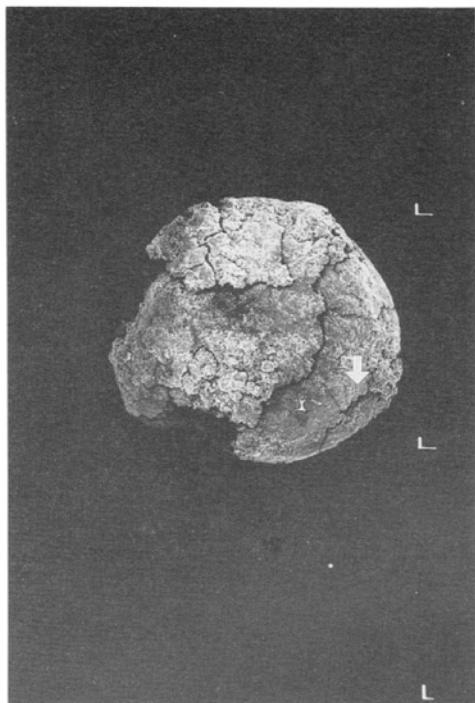
(3) 同定結果

同定作業の結果、タデ科種子（POLYGONACEAE）2、アカザ属種子（*Chenopodium* Linn.）2、ニワトコ属種子（*Sambucus* L.）1、クルミ内果皮片、不明種子が3粒出土した。不明種子については保存状態が悪く同定不可能であった。このほかに円形で直径1mm前後の表面構造を持たないものが多数検出されている。この種のものは種子とは考えられず、植物の根に寄生する菌核であろうと見られる。

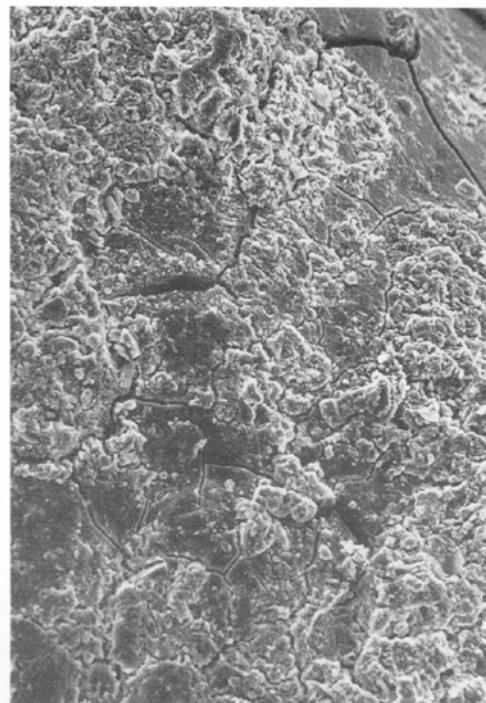
西山遺跡出土炭化植物遺体表

遺構名	サンプル 採取区	タデ科 (粒)	アカザ属 (粒)	ニワトコ属 (粒)	クルミ層 (g)	不明種子 (粒)
4 H	F O					1
4 H	K				0.06	
4 H	L			1	0.04	1
4 H	M	1	1			
4 H	P					1
4 H	G O	1				
合計		2	1	1	0.10	3

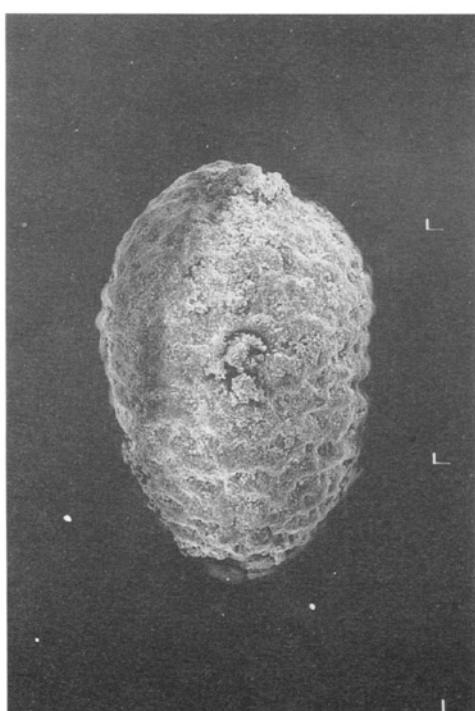
図 1



1 a アカザ属 $\times 35$

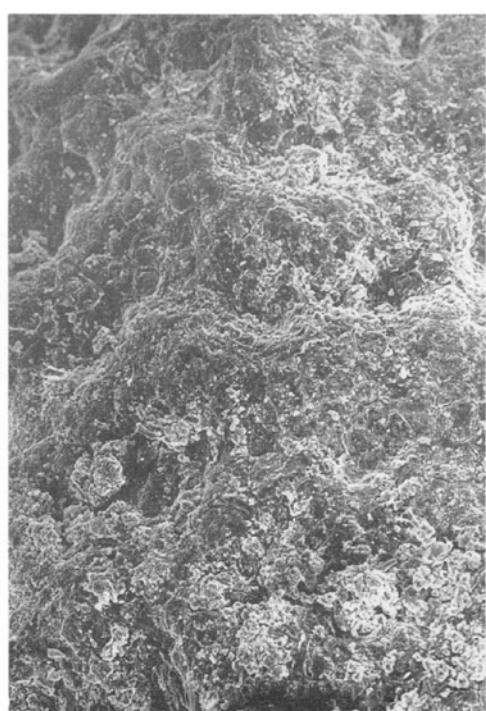


1 b 1 a の拡大 $\times 100$



2 a ニワトコ属 $\times 35$

スケール 「」の間隔1.0mm



2 b 2 a の拡大 $\times 200$

(本図は原図を80%に縮少した。
顕微鏡位率は縮少前のものである。)

第4節 小 結

今回の調査は、雷遺跡と同じように道路幅の範囲に限定されたため、遺跡の全容を把握するには至らなかった。

調査以前は、畑地であったことから、長イモの栽培のために1m程の深さで溝が掘られており、これが調査区のほぼ全面に及んでいた。このため、重要な部分を欠失した遺構もあり、遺物の出土状態においても種々の影響があるものと考えられる。

遺構では、縄文時代の晩期末と考えられる竪穴住居跡が3軒、縄文時代で時期が特定できない竪穴住居跡2軒、縄文時代の土壙6基、溝状ピット9基、焼土4基を検出した。

遺構の検出位置は、現在の農道部分のある傾斜地からは、溝状ピットが1基検出されただけで、ほとんどは下位の緩斜面及び平坦面に集中している。

竪穴住居跡は、第1・2・4号が近接した状態で検出されたもので、規模及び形状等の特徴も類似点が多いものである。3軒の住居跡では遺物の出土状態等から、第2号住居跡が最も古いと考えられる。3軒の形状は、やや楕円形気味の大型を呈し、主柱穴の配列は、ほぼ中央に4本を基本とするものと考えられる。また、炉は中央からどちらかに偏った位置に構築され、石組等を持たない地床炉的なものである。壁溝は認められない。また、床面からの遺物の出土が少ないと傾向が認められる。

これらの3軒の竪穴住居跡は、あまりに近接していることから同時に存在した可能性は少なく、前述したとおり、第2号は明らかにやや古い時期に構築されたものと推察される。第1号及び第4号竪穴住居跡において、履土中の降下火山灰の堆積状態からほぼ同時期に存在した可能性も考えられる。

これらの竪穴住居跡は、台地の縁辺部に構築されており、この縁辺に沿ってあと数軒存在する可能性が大である。

土壙は、遺物の出土量が少ないため、時期を特定できるものはない。しかし、竪穴住居跡及び溝状ピットとの重複関係から、縄文時代後期及びそれ以前の可能性がある。

土壙の配置には特に、規則性はなく、時期的にもバラつきがあるものと考えられる。

溝状ピットは、竪穴住居跡と重複しているものを除いて、いずれも中摺浮石層及び相当層を掘り込んでおり、該火山灰の降下時期よりは新しいものである。また、第8号溝状ピットは、晩期の第4号住居跡より古く、第8号土壙よりは新しいものであるが、土壙内からは時期を決定できる遺物の出土がなかったため、溝状ピットの存在時期を特定するには至らなかった。

調査区が限定されたことから配置及び方向性等は不明であるが、この検出状態からは、本台上には相当数の該遺構が構築されている可能性が大である。

焼土は、小規模のものがほとんどであったが、第4号焼土は、非常に大型の深鉢形土器を伴出しておらず、中期後半期に帰属する可能性が高いものである。また、土器自体も特殊なものである。

遺物では、第I層及び第II層上面から出土したものは、耕作時に移動した可能性の高いものである。後述する狩猟文土器は、広範囲から同一個体が破片で出土したものである。

本遺跡の主体をなす土器は、縄文時代後期前半期と弥生時代後期の土器である。このほかには、縄文時代早期・前期・中期の土器が、数片ではあるが出土している。また、晩期の土器が出土しているが量的には少ない。縄文時代後期の土器は、初頭期の山形の波状口縁を有するものがまとまって出土しており、これに後続する十腰内I群土器よりも数量的にも多い。また、全体の器形を把握するには至らなかったが、十腰内II群土器に比定される鰐状把手が数点出土している。注口土器の注口部分の破片もこの時期と考えられる。

弥生時代の土器は、ほぼ念佛間式期のもので、該型式内でも新しい部類に属する可能性が高く、今後該型式を再検討する際に好資料となるものと考えられる。

これらの土器のなかで、特筆されるものの一つとして狩猟文土器が挙げられる。器形は壺形であることは把握されたが、文様の展開は不明である。この中の1片に粘土の貼り付けによる鹿のモチーフが認められた。本資料が在地のものであれば、当該時期の狩猟対象獸に鹿が存在したことの証左となるものである。

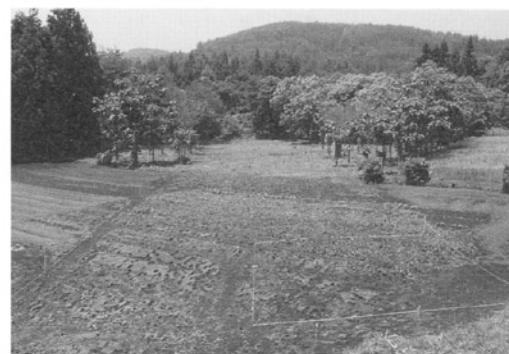
石器では、特記すべきことはあまりないが、竪穴住居跡内から、小型の石鎌が出土したことがあげられる。また、縄文時代の前期及び中期の円筒土器が多く出土した隣接する館野遺跡では検出されなかった礫石錘が、まとまって出土していることから、該石器の使用が時期的または土器型式による生業の違いによるものであることが示唆された。

自然科学的な成果としては、十和田b降下火山灰の年代が、B P年代で 1980 ± 60 年の数値を得たことがあげられる。この十和田b降下火山灰の直上から出土した弥生時代の土器は、同時に放射性炭素測定による年代を受けたものと同様と考えられる。断定はできないが、この火山灰を挟んだ形で同一個体が接合した例だけを抽出すれば、降下時期が第VI群土器の中で把握される可能性がある。また、竪穴住居跡の床面直上から出土した植物遺体の分析では、農耕による作物の種子等の発見はなかった。

以上概観してきたが、本遺跡の生活の場としての主要な時期は、縄文時代後期及び晩期と弥生時代であり、溝状ピットの検出から一時期狩猟の場としても利用されたものと考えられる。また、本台地の縁辺部に沿って、多くの遺構・遺物の存在する可能性が推察される。

遺構・遺物については、詳細な分析を行う間がなかったが、今回の調査の成果が、今後の研究の一助になれば幸いである。

(白鳥 文雄)



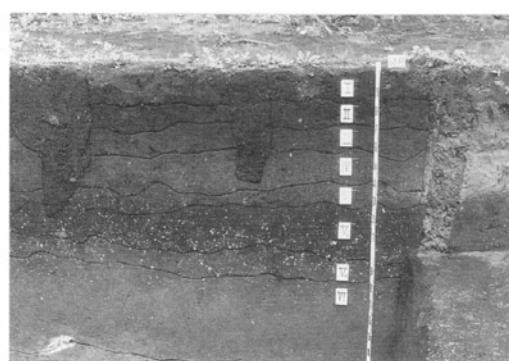
全景（調査前）



調査風景

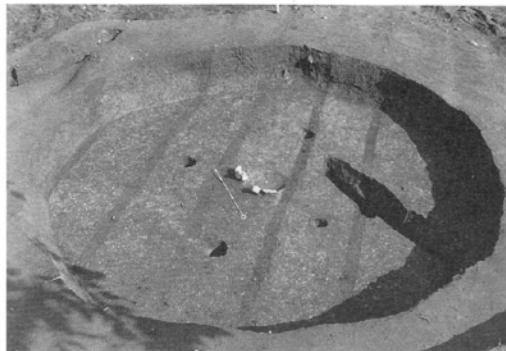


全景（調査終了時）



標準土層

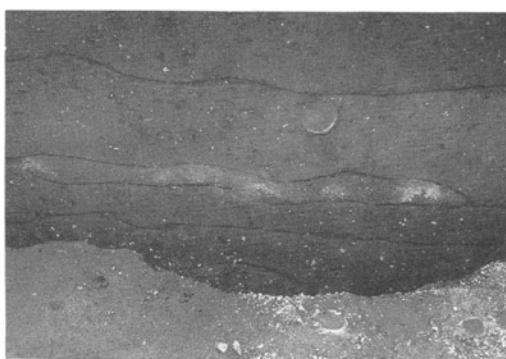
第1号竪穴住居跡



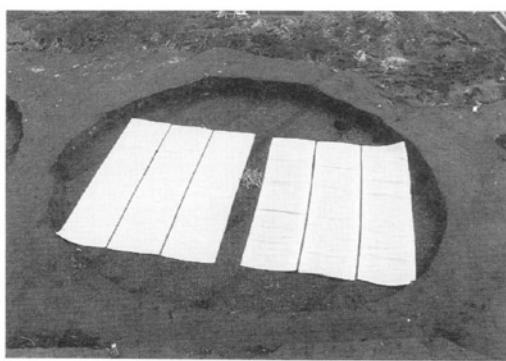
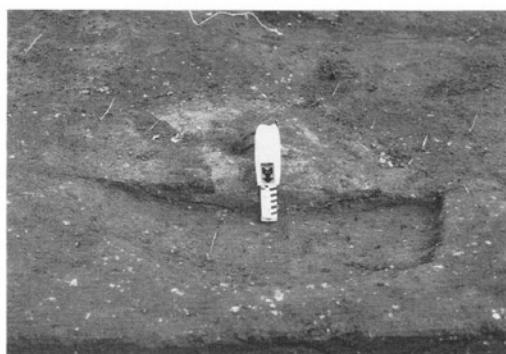
炉



降下火山灰



第2号竪穴住居跡



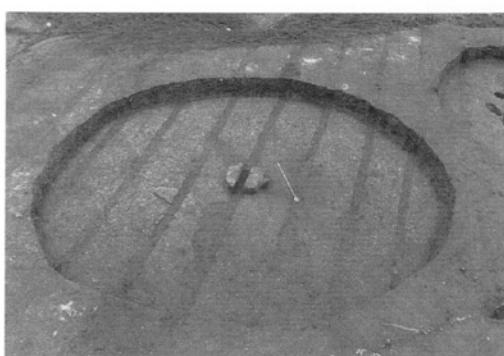
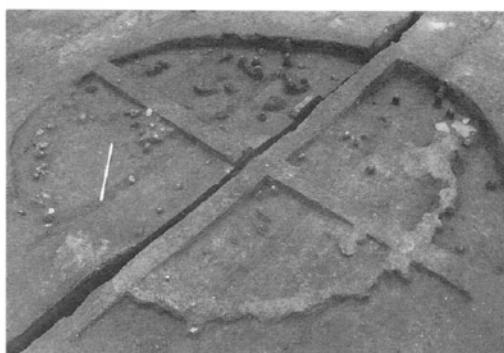
P L - 3

第4号竪穴住居跡



確認

火山灰堆積状況



第4号竪穴住居跡



火山灰及び上部焼土

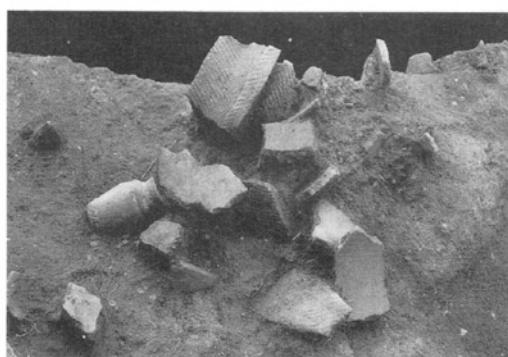
第5号竪穴住居跡



第4号焼土

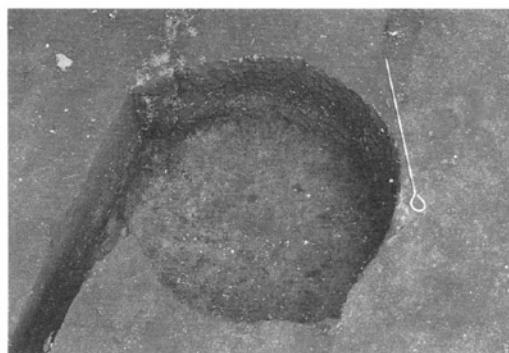


第4号焼土



遺物出土状況

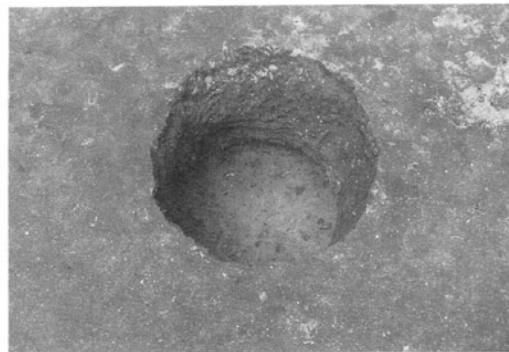
第1号土壤



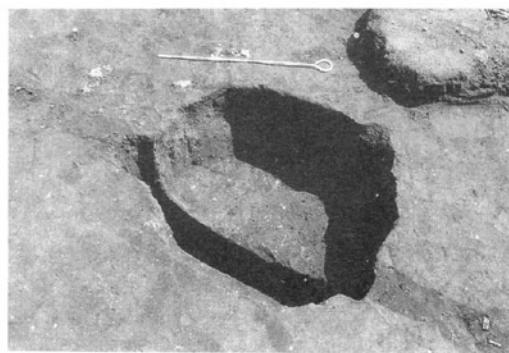
第2号土壤



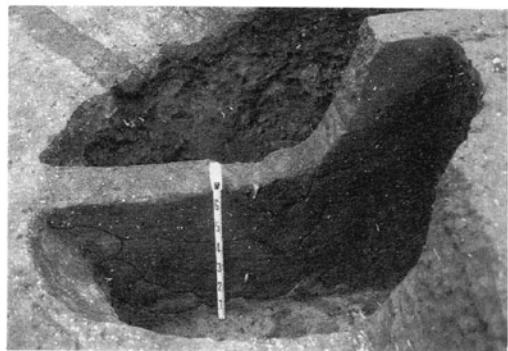
第3号土壤



第4号土壤



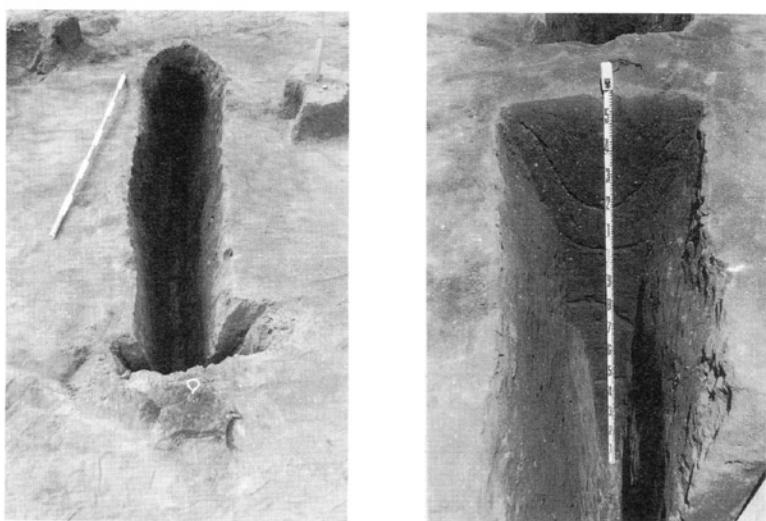
第7号土壤

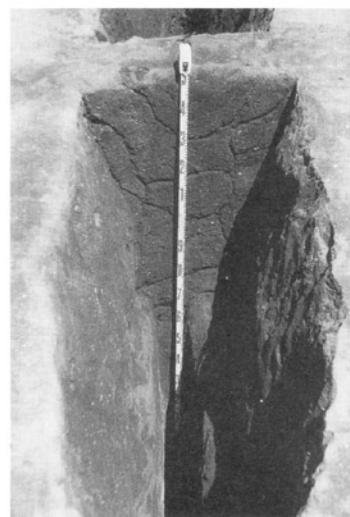
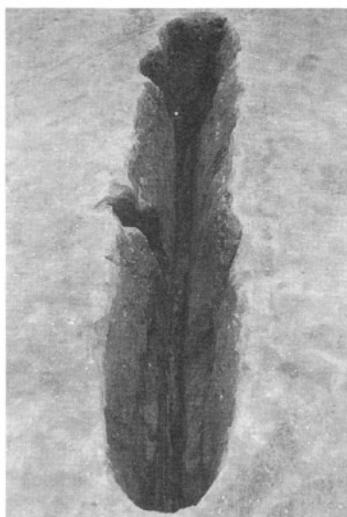


第1号溝状ピット

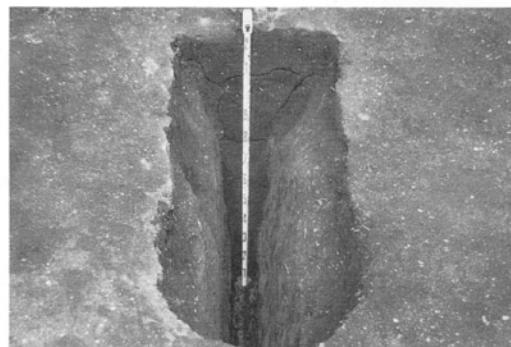


第2号溝状ピット





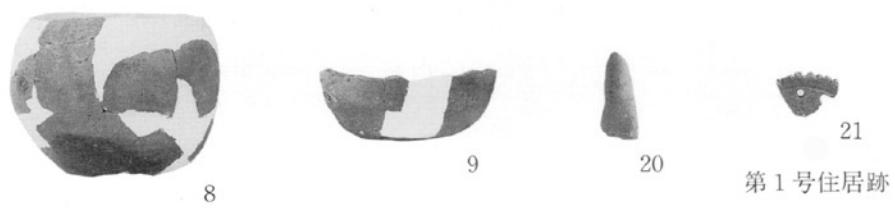
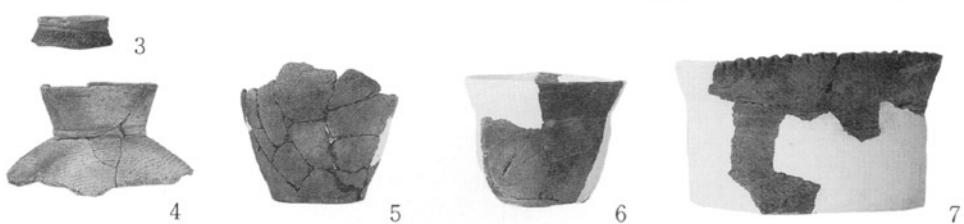
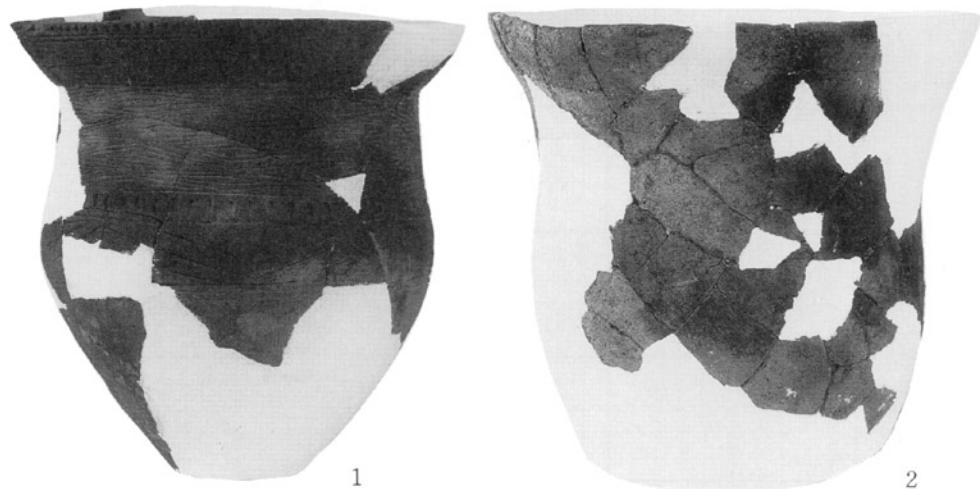
第3号溝状ピット



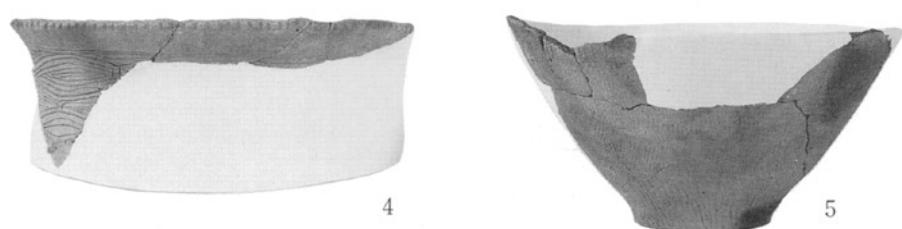
第5号溝状ピット



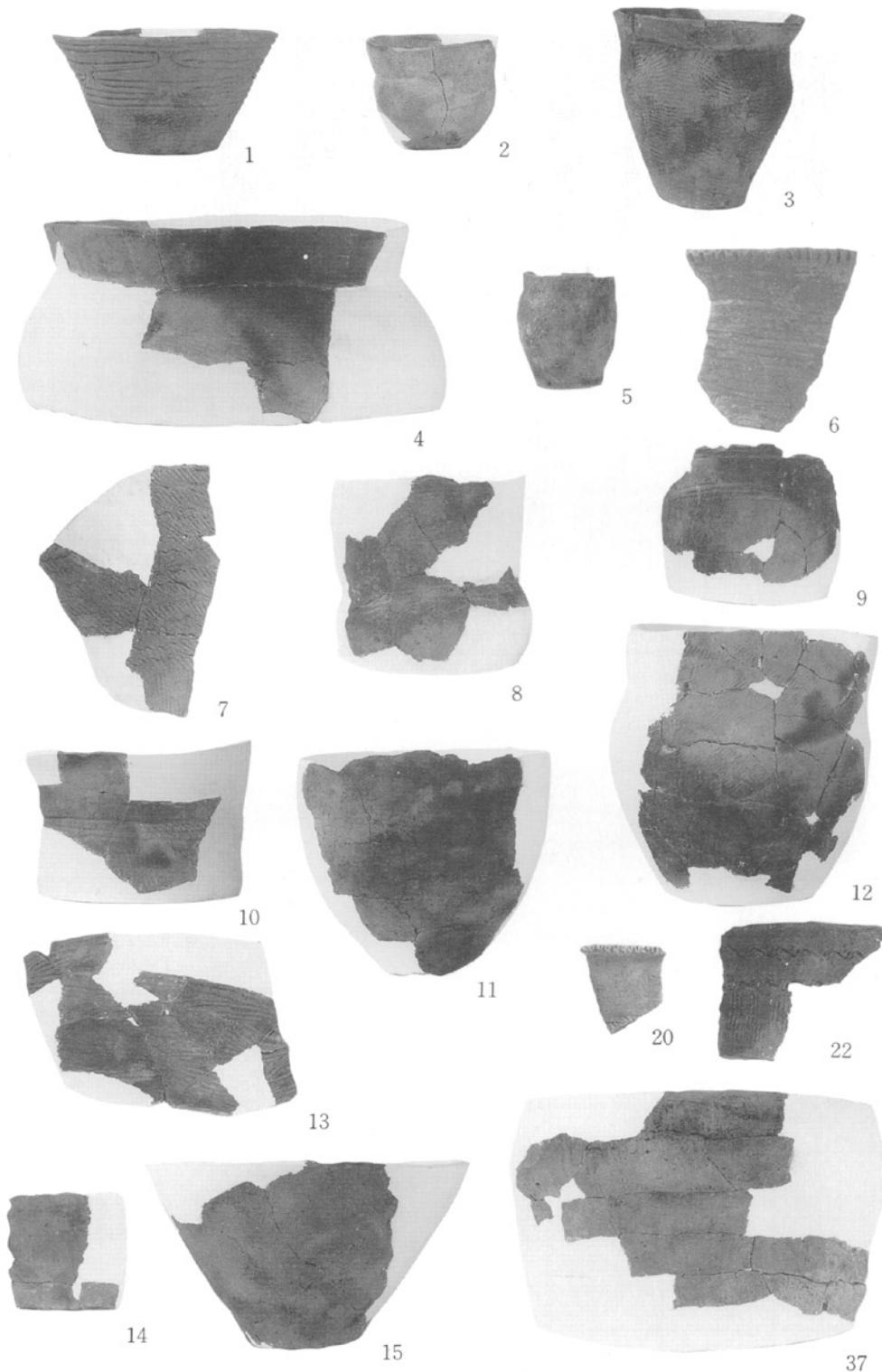
第6号溝状ピット

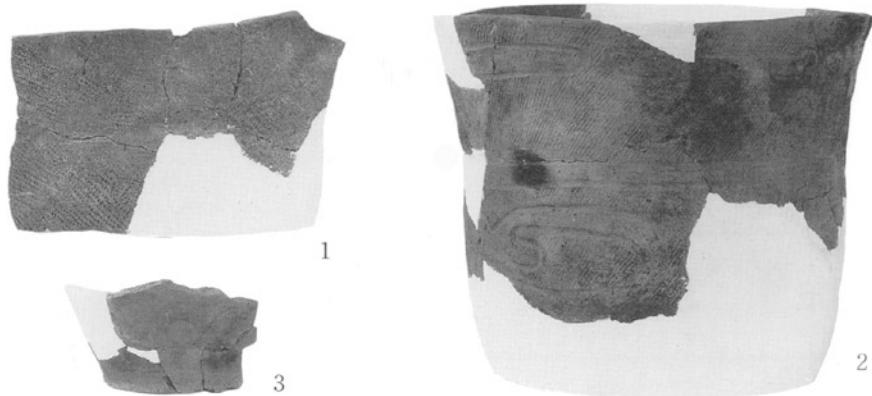


第1号住居跡



第2号住居跡

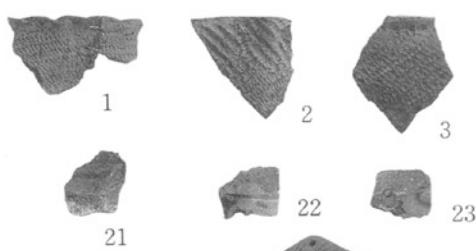




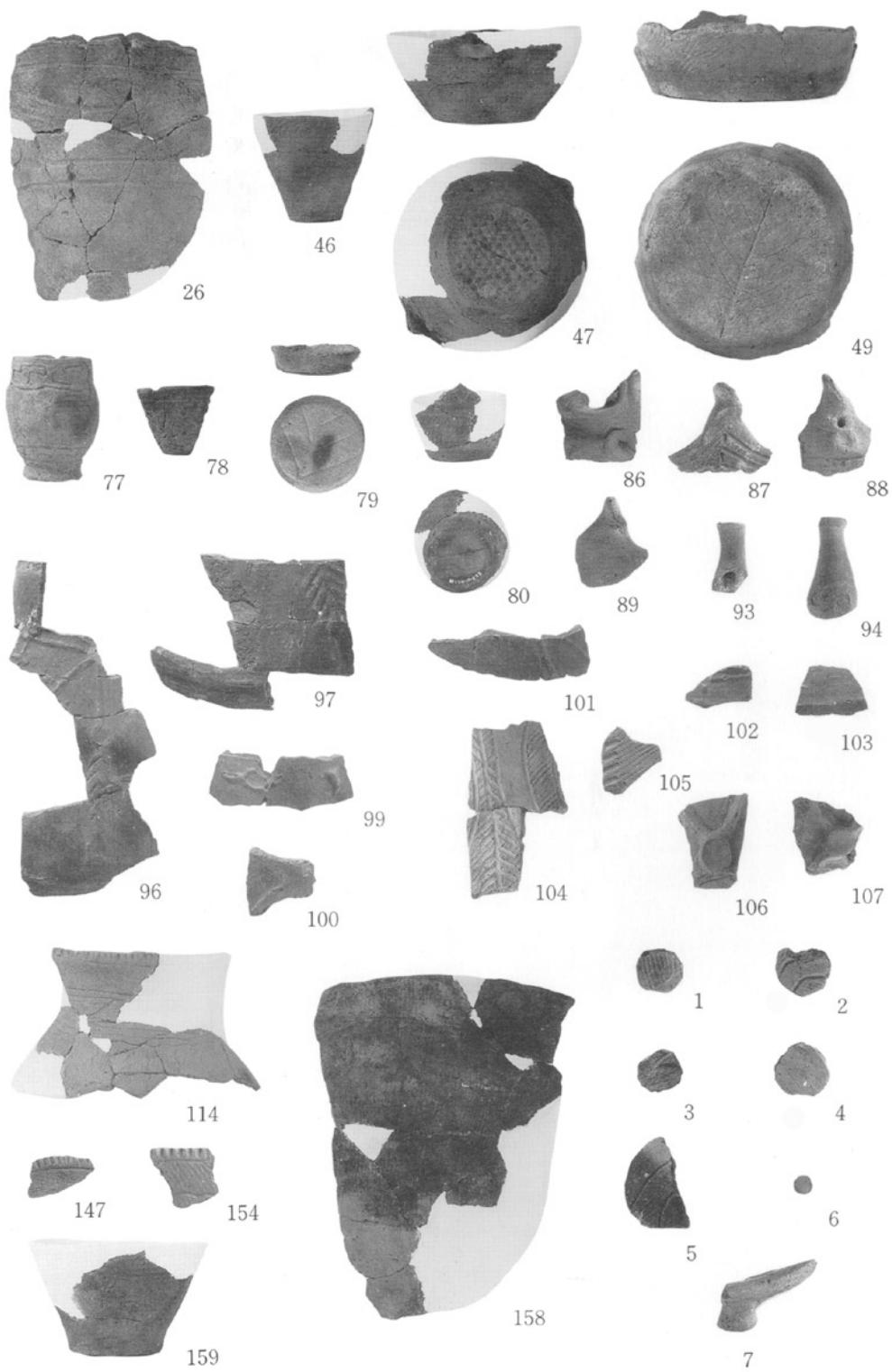
第5号住居跡

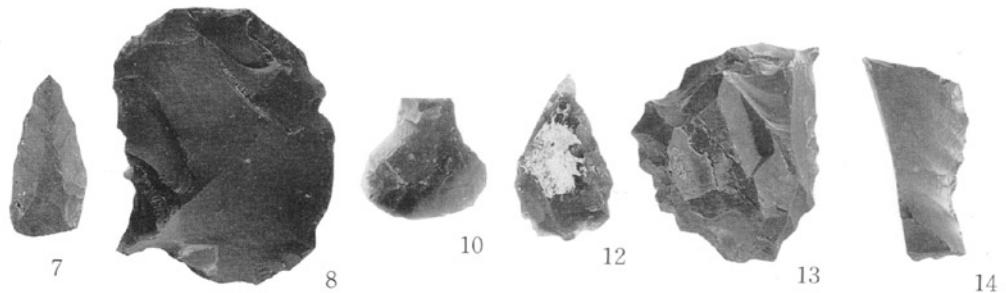
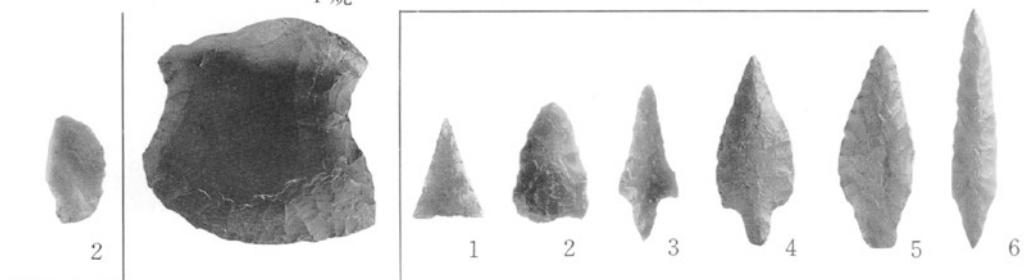
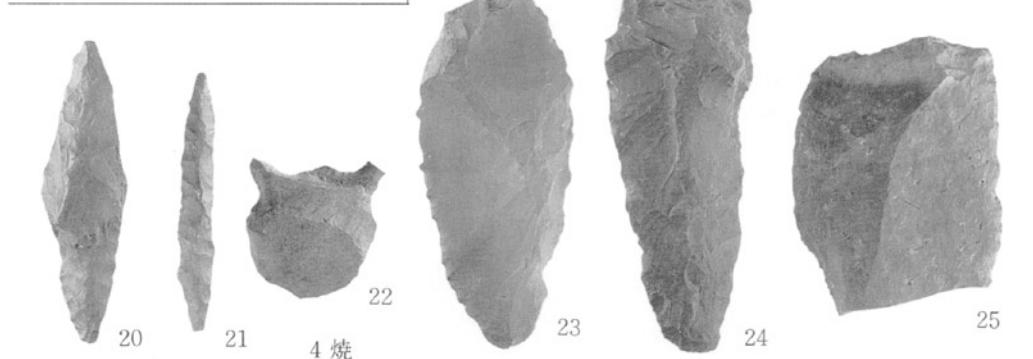
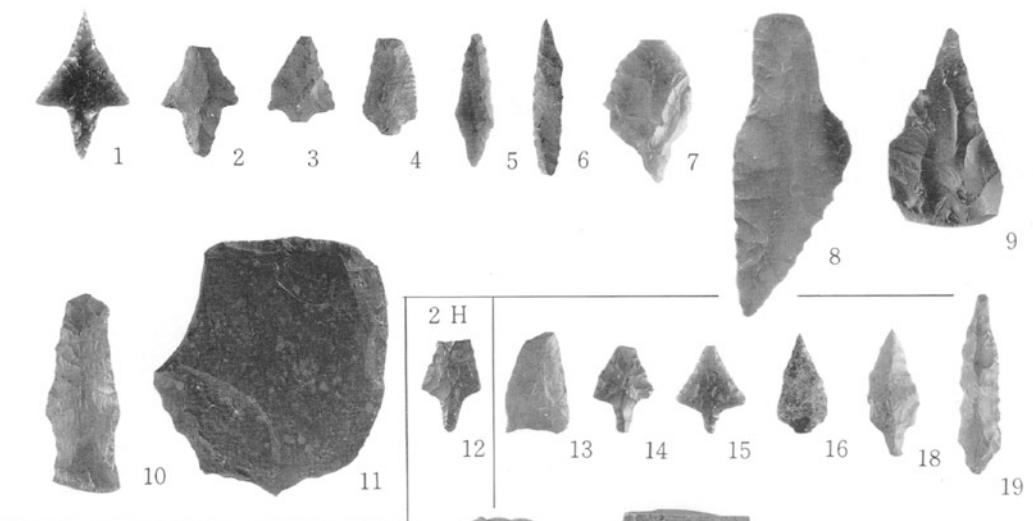


第4号焼土



遺構外土器





ま　　と　　め

今回の調査は、農道整備に伴うものであり、調査範囲は道路幅の約10mの細長いものであつた。このため、両遺跡とも遺跡の範囲及び全容を知り得ることはできなかつた。

両遺跡のまとめは、それぞれ小結として記載したので、詳細は省く。両遺跡はその間を沢によって分断されているが、生活空間として、当然簡単に動き回れる範囲であり、遺跡名は異なるものの一つの場として利用されていたものと考えられる。

地形的には、雷遺跡はやや急な斜面から少しのびた緩傾斜面及び平坦面に立地しており、西山遺跡はほぼ平坦な面に立地している。このことから両遺跡においては西山遺跡がより生活（居住）の場として良好であったものと考えられる。

出土遺物の面からは縄文時代後期初頭、少量の出土ではあるが縄文時代晩期末葉及び弥生時代後期の土器が出土しており、この時期に特に生活の場として活用されたものと推察される。

また、検出遺構の面からは、縄文時代晩期に居住空間として利用されていたことが理解されたが、縄文時代後期及び弥生時代後期の遺構が検出されなかつたため、この時期に、両遺跡がどのように利用されていたものかは不明である。しかし、量的にもまとまった土器が出土していることから、調査区域外に当該時期の遺構が存在していた可能性が高い。

両遺跡に共通する遺構としては、溝状ピットがあり、両遺跡をとおして、ある時期に狩猟の場として利用されていたことが理解された。

以上、雷遺跡、西山遺跡について概観したが、前述のとおり、調査区域が、道路幅に限定されていたことから、両遺跡ともにその性格を断定できるには至らなかつた。また、紙面の都合及び時間的な制約から、検出遺構、出土遺物に対して詳細な分析ができなかつたが、今回の調査の成果が、今後活用されれば幸いである。

（白鳥 文雄）

青森県埋蔵文化財調査報告書第136集

雷遺跡・西山遺跡発掘調査報告書

—福地村天魔平地区農道整備事業に係る

埋 藏 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書 —

発行年月日 平成3年3月30日

発 行 青 森 県 教 育 委 員 会

編 集 青 森 県 埋 蔵 文 化 財 調 査 セン タ ー

〒038 青森市大字新城字天田内152-15

☎0177-88-5701

印 刷 高 金 印 刷 株 式 会 社

〒038 青森市千刈二丁目1の30

☎0177-81-0519・2244
